

2003 年度
修士論文

現代農山村における環境文化運動の民族誌学的研究
—地域環境教育活動を担う住民の複層性に着目して—

東北大学大学院教育学研究科博士前期課程
人間形成論研究コース
A2PM1001
出川 真也

目次

序章・・・3

- はじめに～研究の対象と目的～
- 調査状況と本稿の構成-
- 当研究の端緒と研究スタンス-

第1章 調査地域の概況ー山形県最上郡戸沢村角川地区を中心にー・・・18

- 1、当研究調査の範囲と規模
- 2、地域住民によって語られる農山村の実態～自然環境の賛美と暗い感情、見え隠れする世代間ギャップ～
- 3、研究者参入の実態と村人のまなざし

第2章 環境教育活動による「環境文化運動」の表層ーとざわ里地塾の取組みを中心にしてー・・・24

- 1、戸沢村との出会い
- 2、農山村地域の環境教育活動ー「とざわ里地塾」ルポルタージュー

第3章 地域の人々の諸相Ⅰー環境教育と地域作りの取組みを推進する人々ー・・・38

- 1、社会教育課長Tさんの話から～行政・住民の意識改革と「とざわ里地塾」～
- 2、地元学校の校長先生の話～地域に誇りを持たないことが子供達の甘さにつながる～
- 3、地元の地域活動家の思い
- 4、山のサブローさんとの出会い
- 5、地権者Tさんの語り～守りたい地域の自然環境～
- 6、地域の活動に取り組む地域の女性たちの動きと思い

第4章 地域の人々の諸相Ⅱー日常生活と住民の意識～若手世代の女性達を中心にして～・・・63

- 1、調査の難しさ～世代間ギャップと聞こえにくい若手女性達の声～
- 2、とざわ里地塾に対する評価
- 3、地域行事に対するまなざし
- 4、過疎地で育つ子供達の将来に対する不安～よそとの交流の重要性～
- 5、子供達の将来についての展望～「いずれは地域の外に出るから」～
- 6、狸を背負う話～世代間ギャップの楽しさと地域の良さへの気づき～

終章ー里の自然環境学校の設立と新たな変化への兆しー・・・76

- 1、暫定的なまとめ
- 2、「角川里の自然環境学校」の設立～研究者のインパクトと変化への兆し～
- 3、現在進行中の動き～新たなつながりの構築を目指して～
- 4、より広範な社会的メッセージ発信への自覚

資料・参考文献・・・83

位置関係図、統計資料、角川小中学校アンケート、里の自然環境学校関連資料、新聞記事、参考文献

序章

～はじめに～研究の対象と目的～

当研究は、現代産業社会の中で社会経済的に周辺化されてきた農山村地域における環境教育活動を直接の対象にしている。当研究では農山村のこれらの活動が、活動を担う内部（及び外部）の多様な背景や思惑を持つ人々の極めて複雑で錯綜した状況のもとで展開されていること、そしてこの活動（＝運動）が現代社会に対してどのような意味を持っているのかを民族誌的記述によって浮き彫りにすることを目的とする。

1、現代農山村における「環境文化運動」

結論を先取りすることになるが、近年各地の農山村で展開しつつある一連の村作り（＝村おこし）の取り組みは¹、住民による単なる村の活性化運動という側面の他に、3つの要素と密接な結びつきを持っていると考えられる。1つは当該農村を取り巻く里の自然環境の保全運動であるという側面。これはこれまで産業化の趨勢の下で行われて来た農村整備・開発とは逆の方向性を持っていると言える。2つ目は農村地域に受け継がれて来た伝統的文化の保護・継承の運動であるという側面。この伝統的文化には集落の年中行事や宗教的行事の他に、衣食住などのさまざまな生活の知恵、いわゆる「生活文化」全般が含まれる。また、これら文化を維持し伝えていくための地域住民の人的つながり、付き合い方のスタイルも含めて考えることができる。そしてこれらの文化は一つ目の要素、すなわち集落を取り巻く自然環境と密接な関係がある。この文化が持つ里の自然環境の利用や保全の機能は時に現代科学を超えるほど高度なものである。3つ目は、現代の産業社会（＝社会経済体制）に対するアンチテーゼとしてのメッセージの発信運動であるという側面である。そしてこのメッセージは、1つ目と2つ目の要素、すなわち里の自然環境や文化的価値観によって支えられて発せられている。本稿の題目の「環境文化運動」とは農山村におけるこうした状況を言い表わしている²。

¹ 筆者が直接取材できた地域としては、佐渡島、京都綾部市、三重県藤原町、岩手県沢内村、そして本稿で取り上げる戸沢村があげられる。また当研究で関わった環境NGO里地ネットワークのサイト <http://www.mizumidori.jp/satochi/>には多くの農山村での取り組みが紹介されている。

² 「環境文化運動」という言葉はおそらく当研究における造語である。そしてこの言葉やコンセプトはまさに地域の活動家たちと研究者である私との共同作業の結果出て来たものである。著者の研究調査の中で、当研究の対象地域の活動家との十数度にわたるインタビュー調査の終わり頃、次のようなやり取りがあった。「つまり、あなたの方のやっていることは、こうした現代の農山村での『環境文化運動』と言えるのではないのでしょうか？」「そうなあ、まさにそれだよ、ぴったりの言葉だ。そういうことなんだ。俺らの地域が持っている自然環境と文化の運動なんだ。」また、こうした環境問題の解決をNP0段階にある市民運動の動きに着目して文化的アイデンティティの問題やコミュニティ形成に結び付けて考察している高田（2001）の研究からも示唆を受けて

2、環境文化運動の具体的アクションとしての環境教育活動

本稿ではこうした現代農山村の「環境文化運動」を、環境教育の取り組みを事例研究する中で具体的に考察することとなった。なぜならば上記の「環境文化運動」のメッセージが、地域住民によってもっとも劇的に語られ、実践される場面が環境教育活動であると言えるからだ。しばしば運動家が口にする子供達に「原体験」をさせるという語りはまさにこの「環境文化運動」のメッセージ（簡単に言えば地域の自然環境や生活文化など、農村地域の良さを伝えるということなのだが、後で見るようにそれだけではない）を、直接体験を通して子供達に伝えることを意味している。本稿で取り上げる環境教育の取り組みは、いずれも当該地域の自然環境や生活文化を背景にして、地域の住民によって行われた取り組みである。一方でこのことは研究調査の対象として、環境教育活動だけではなく、それら環境教育活動を担う地域住民の意識や日常生活実践を考察する必要性を示唆する。本稿では、文化人類学的フィールドワーク（主として参与観察とインタビュー調査）を通じて、環境教育の取り組みと日常の生活実践との相互の関係構造を描き出すことになった。当研究はこの点で、従来の環境教育の研究とは異なっていると言える。従来の環境教育学では主として環境教育活動そのものへの関心があっても、それを担う地域住民へのアプローチが不十分であったと考えられる。ほとんどは地域住民が不在のまま、環境に関するプロパー（外部の研究者や運動家）の研究や指針がそのまま環境教育学として語られる³。

3、地域住民内部の「複層性」への着目

本稿では、こうした状況を踏まえ、環境教育を担う地域の住民の動向に考察の照準を定める。このことは運動を展開している地域住民内部の複雑で錯綜した状況を浮き彫りにすることを意味する。ところでここで言う地域住民内部の複雑で錯綜した状況（＝地域住民の複層性）とは具体的には何か。さらに結論を先取りすることになるのだが、それは、「環

いる。

³ 環境教育の議論はそのほとんどが、どのように子供達に効果的に環境の大切さを認識させ行動させるかといったいわゆる how to ものの議論が多いことが指摘できる。例えば学校教育における総合的な学習の時間をいかに効率よく進めるかといったカリキュラム論や環境教育の指導方法を説明するものに集約する傾向があるようだ（参考にした文献に関しては本稿末の文献表参照のこと）。それら議論には前提として研究者や教師などの環境学のプロパーが環境教育の担い手だとする暗黙の了解がある。だが、最近の農山村に関する研究の中では、調査研究の過程に住民が主体的に参入することの重要性を指摘しているものもある（年報村落研究第32集「自然の再生 21世紀への視点」1996）。90年代、農村社会学分野においてはジェンダーや環境の問題等、市民運動とタイアップする方向での研究が進んでいるように思える。90年代以降の『年報村落社会研究』を見るとそのことが如実に伺える。ここでは農村の活動家は研究において単なるインフォーマントに留まらない。例えば『有機農業運動の展開と地域形成』1998においては、農村の活動家が寄稿したものも掲載されている。また、本稿で紹介する地元学は、住民が主体となつて行う研究調査の手法である。それがどういうインパクトを与えたかは終章で詳しく述べたい。

環境文化運動」(＝環境教育活動)に必ずしも賛意を持っているわけではない人々が存在することを示す。というのは、たとえ環境教育活動に参加していたとしても、地域住民全てが環境文化運動(＝環境教育活動)に積極的であるわけではないからだ。運動推進側でさえ様々な複数の軸で分断されているし、またこうした運動や取り組みに否定的な意見を持つ住民も様々なレベルで存在しているのである。その要因は、地域住民が置かれている社会経済状況、地域及び家庭内における人間関係、力関係など広範囲に渡っている。しかし、一定の傾向は観察できるものである。本稿の分析では、運動に対して否定的見解を持つ層が、特に若手世代の女性達によく見られるという結果となった。そしてこのことは、こうした運動が隠ぺいしがちな農山村のもう一つの側面、すなわち現代的な生活スタイルとのギャップ、世代間のギャップ、地域・家庭内の力関係、とりわけジェンダーの問題など、いずれも農山村の「環境文化運動」が土台としている地域の自然環境や生活文化自体に内蔵された諸問題を浮き彫りにしてくれる。本稿ではこうした運動を担う地域住民内部の複層性に着目することで、運動の推進が持つ地域住民内部におけるもう一つの意味(運動が陥りやすい、そして陥っているかも知れない消極的な意味)をも浮き彫りにすることになる。また、逆にこうした側面を浮き彫りにすることこそ、当研究が対象としている農山村地域の「環境文化運動」のより良い今後の展開につながるためのよすがとなるかも知れないと考えているのである。

4、本稿の理論図式-住民の複層性を考察するに際して-

誤解のないように付け加えておきたい。ここでは運動に消極的な「女性達」は、「彼女らは農村の地域社会や家庭において社会的弱者である、そして「環境文化運動」が農村地域の男性達を中心とする地域の支配層(＝地域社会の強者)によって展開される中で、彼女達は排除され周辺化されてしまう、あるいは服属的に取り込まれてしまうのだ」、といったフェミニズムの議論でよく描かれがちな図式を単純に意味しているわけではない⁴。

農山村での「環境文化運動」が、現代の経済社会体制の中で周辺化された(＝いわば社会的弱者の)マイノリティの側だとしたならば、それに否定的な農村女性達の身振りは、現代経済社会体制の(いわば、社会的強者の)マジョリティの論理を駆使して行われていることが観察されるからである。そして時に彼女らの語りは差別的でさえある(ここは道が

⁴ この点で、私はポストコロニアリズムの議論から多くの影響を受けている。この議論では運動の内部の複層性に着目すること、そして運動内部の排他要素として女性が登場してくることが浮き彫りにされる。つまり運動の推進に伴って女性達が声が押し込められ、抑圧されるということであり、この点に関しては説得力のあるさまざまな研究がある。第1章の先行研究でも検討するが日本の農山村での女性達もそのような形で物語れることが多いように思われる。しかし、本稿の考察の結果、まさにその逆転的な現象も存在することが指摘できる。

悪い(実際にはそうでもないのだが)、仕事場が遠い、ショッピングを楽しめる所もない・・・とにかく不便だ。農業?・・・汚い。山の生活?・・・見れば見るほど興味ないよ、ここはほんと、遅れた「ださい」「因習に縛られた」田舎だよ)。したがってここでは、従来のフェミニズムとは全く逆転した現象が見られる。つまり男性側がいわば社会的弱者の側にたって、これまで見過ごしてきた周辺化された地域の自然や生活文化、生活様式、そして人や地域のつながりを見直していこうとするのに対して、女性達が、社会的強者の側に立ち、多数派の(いわゆる都市的な)自分達の価値観を主張することによって、これらの運動家達が目指すささやかで風前の灯火の情勢下にあるような願いをまさにその地域内部から台無しにしてしまうからだ。

しかしながら、次元をずらせば、「女性達」は地域において「外部者」であり地域内の力関係において弱者であるということもできる。例えば集落の長はいずれも男性達で占められているし、家長も男性であることが一般的である⁵。したがって、地域においても家庭においてもイニシアティブを握っているのは男性であるように見える。しかし、だからといって、このような「抑圧された現地の女性達を救うのだ」と外部から現地を表象しようとすることもまた安易な二項対立図式の偽善に陥る可能性がある⁶。したがって、当研究において、地域住民に対する考察を展開するに際して、このような運動推進側と反対側の両者の力関係について何度も反転させて考察せねばならないだろうし、男性-女性(あるいは運動推進派-運動反対派)といった安易な二項対立図式に陥ってしまうことに注意せねばならない。また「聞き取られることの無い声」とは一体どの次元において何なのかを詳細に検討せねばならないだろう⁷。

⁵ 当研究の舞台となった村も例外ではない。地区にある14集落のいずれも長は男性だし、主要な役職は男性達で占められている。

⁶ 第1章で検討する国際結婚関係の研究や取材の身振りには時としてこのような素振りが見えるように思う。以下の註7も参照のこと。

⁷ この点に関して、くり返すが私はポストコロニアリズムの議論から特に大きな影響を受けた。例えばスピヴァック1998、アーニャ・ルーンバ2001参照のこと。「原住民男性が野蛮だということが、帝国主義支配を正当化する手段となり、植民地政策を推進し、植民地における対立を形作りその方向性を定めた。他方、白人男性が『自分たちの』文化に介入してきたことがきっかけとなって、ネイティブの反抗が生まれたこともある。『サティール擁護が「ネイティブの抵抗」の一形式であったとしよう。この場合問題となっているネイティブは男性であり、この「抵抗」は女性を殉死に追い込むものであったこと、これを忘れてはならない。(中略)植民地主義的分断線の両側にいる男性たちは激しい闘争に明け暮れながらも、女性支配という点ではよく共同戦線を引いた。』(アーニャ=ルーンバ前掲、p.193、スピヴァックの引用を再引)ルーンバはさらにスピヴァックを引きつつこの力学を要約して含蓄深い文にまとめている。『白人男が茶色い男から茶色い女を救う』。フロイトがセクシュアリティを探求する際、『子供がたたかれる』という図式が彼にとって絶対的であったのと同じくらい、『白人男が茶色い男から茶色い女を救う』と言う図式はスピヴァックが植民地主義の力学を探求するときの、根本的な問題だった。」(ルーンバ前掲、p.198)。スピヴァックがインドのサティールに関する分析では、サティールに貞女の意味を付

ー調査状況と本稿の構成ー

1、調査状況について

以下に続く章は、山形県最上郡戸沢村角川（つのがわ）地区（人口約 1200 人、300 世帯）におけるフィールドワークによって、作成された。この稿のまさにほとんどの部分が「現地」で書かれたものである。現地調査は 2002 年 8 月 21 日～23 日、戸沢村角川地区に入ったのが最初である。この角川地区が本稿の第 3、4、終章で扱う舞台となる農山村地域である。また、第 2 章で扱う環境教育活動「とざわ里地塾」の調査取材のために、8 月下旬に 4 日間、10 月 19、20 日、また、2 月 21、22 日に戸沢村に入っている。

本格的な住み込み調査を実施するための準備調査で 2003 年 1 月中旬の 4 日間、2 月中旬の 6 日間、3 月初旬から中旬にかけて 4 日間、戸沢村角川地区を訪れている。このことは、当研究のインタビュー調査の中で住民が語る冬の厳しさ、雪の厳しさを著者が実体験できる貴重な機会を得ることになった。これを体験せねば、住民が日常生活実践の文脈の中で語る冬の厳しさを理解するのはかなり難しかったに違いない。

そして、2003 年 3 月 22 日～本稿執筆現在（2003 年 11 月下旬）、現地（戸沢村角川地区）へ住み込み、本格的な参与観察とインタビュー調査を行っている。そして現在もそれは継続中である⁸。

2、本稿の構成について

第 1 章では、戸沢村及び角川地区の概況と先行研究を紹介する。この地域の社会科学分野の先行研究は国際結婚関係のものがほとんどを占める。ここでは、外部の研究者によって、この村がこれまでどのようなまなざしで見つめられて来たのかということにも触れておきたい。

第 2 章から 4 章は戸沢村の中で、主として著者が住み込み 8 ヶ月間の参与観察とインタビュー調査を実施した角川地区が舞台となる。

第 2 章では、当研究が扱う環境教育の実践活動として「とざわ里地塾」の事例を紹介し、

与するということで現地の男性も植民者も共同戦線を構築していることも指摘されている。またサティエに反対し声をあげる都市の女性たちや富裕な女性たちもまた声をあげることができる社会的立場にあり、そこから発言していることが指摘されている。その意味で彼女たちもまた男性たちと同様の図式にはまってしまう。そこでは当のサティエとなる農村の女性たちの声が聞こえてくることはない。スピヴァックの「サバルタンは語るができない」（スピヴァック、前掲 p. 116）という言葉は、こうした事態を指摘しているのである。

⁸ 3 月以来 11 月にいたるまで、5 度ほど、それも 1～7 日間の短期間のみ、離れたに過ぎない。しかもそのうちの 1 回（最も長期にわたる 7 日間）は戸沢の地域活動家たちと佐渡島のトキ野生復帰と地域社会作りのボランティア活動のために出かけたものなのであるから、参与観察から離れていたとはいいたいものである。

具体的にどのような取り組みでどのような思惑の下で実施されているのかを紹介したい。

ここで、「環境文化運動」の実態の輪郭が説明されることになる。

第3章では、第2章で扱ったような環境教育活動を推進する地域住民の声とその日常生活を具体的に取り上げたい。ここでは、何十回にも及ぶ地域の活動家に対するインタビュー調査、ライフヒストリー調査と参与観察を踏まえて、彼等の生の声から環境文化運動に寄せる彼等の願いと彼等自身のアイデンティティを浮き彫りにすることを目的とする。

第4章では、主として、地域の日常生活と住民の意識を、とりわけ運動に否定的な意見を持つ女性達を中心にして書かれることになる。

第3、4章は、農村における市民運動内部の複層性（世代・ジェンダー間の相違、外部参入者との意識の違い、個々人のアイデンティティに起因する相違など）やそれら相互間の権力的関係構造の実態を把握することがねらいである。

終章では、現地の最新の状況を紹介・分析する。ここでは、研究者（著者自身）の置かれた立場性の問題をも考察の対象となる。この章では第2～第4章で考察した一連の地域環境教育活動のその後の展開と新しい動きとして「里の自然環境学校」の設立と取り組みの状況を描く。ここでは第3、4章のような住民の錯綜した複層性の中で住民がどのような形で連帯しようとし、どのようなメッセージを発しようとしているのかが浮き彫りになるだろう。

ー当研究の端緒と研究スタンスー

1、研究の端緒～個人的次元における～

さて、本論にはいる前になぜ農山村における「環境文化運動」を研究対象として取り上げたのか、その最初の動機（＝研究端緒）を示す必要があるだろう。そのために著者自身の経験した直接体験をしばらく語らせていただくことをお許し頂きたい。

私は18年間、当研究で取り上げたような戸数80ほどの里の自然と文化を残す農村集落で、主として商品作物を生産する農家の長男として育ってきた。人生の初期の18年間は本稿でもしばしば触れることになる「原体験」を行う時期であり、私の「原体験」はまさに里の自然と生活文化の中で行われたものであるといつてよい。

私は地域の子どもたちと一緒に里でたくさん遊んだ。草花遊びもしたし、田んぼで泥遊びをしたり、畑や野原で鬼ごっこをしたり、川遊びをしたりして夕暮れまで遊びまわっていた。しばしば集落を取り巻く里山を探検し、秘密基地を作ったりもしたものである。そうして、暗い中、帰り道に迷って恐ろしい思いをしたことも数え切れないほどある。

私の育った農村集落にもそれぞれの季節にそれぞれの生活文化があった。雪が消えると祖母と一緒に畑のわきの土手を昇り降りしてフキノトウを採る。そのフキはフキミソにしてご飯にかけて食べる。絶品だった。初夏の時期は父といっしょに集落の上流部にある山の中に分け入り山菜採りに行ったものだった。それを持って帰ってくると母と祖母がそれをおいしく料理してくれた。ワラビの煮物は今でも私の好物だ。秋の終わりになると正月行事の飾りものを取りに、やはり父と二人で、熊の出没を心配しながら、山に分け入ったことを思い出す。

私の育った村は江戸時代に村を開いた人たちが10キロも遠方の奥山から水路を作って水を引いてきている。今でもそうだと思うが、私が小学生の頃、集落の人々と一緒に毎年春と秋にこの水路の掃除を行う。集落から山に分け入り水路を上流に向かって歩きながら掃除をするのである。この清掃作業は私たち子どもたちにとっては集落の一員として参加するちょっとした冒険であった。何より水路にはニジマス等の大きな魚が棲息していて運がよければそれを捕まえるチャンスがある。私の父もこうした村の水路の作業で魚を捕まえてきたことがあり、お昼に母が焼いてくれて食べたものだ。そしてその水路の水を私たちは飲み水として使っていたわけである。そういうわけで、私が育った村の水は確かにおいしかった。しかし近年、汚染を心配する行政当局は水路がつながる村の貯水池に塩素を入れるよう指導し、今は塩素入りのれっきとした水道水となってしまう。私が原体験をした環境は、ここ十年の間でもずいぶん変わってきてしまっている。

いや、私が幼少時代を過ごしたその時期でさえ、「原体験」は必ずしも手放して喜べるも

のではなかった。私の幼少期から小学生の時期、つまり 80 年代は日本の高度経済成長が完全に完了し、既に現在のような高度な産業化が確立されている時期であった。いくら時代感覚の鈍い草深い田舎とはいっても既にこの時期、高度資本主義社会の趨勢の下にあったといってもよい。農業生産のあり方も一種の工場生産のような形で行われていた。

私は畑や田んぼで遊ぶことが好きだったが、わずか一日前にはあれほどドジョウがいた水路に、農薬散布後の翌日行ってみると一匹も見つけることができなかった、あの驚愕は鮮明に覚えている⁹。また、美しい果樹園に真っ白な農薬を撒く光景とあの甘く人工的な匂いはとても馴染めるような代物ではなかった。

私の父は農薬散布作業の後はひどく機嫌が悪くなった。どうやら農薬の成分に感情を高ぶらせる作用があるらしい。母はそのことをよく知っていて、農薬の作業後には父に近づかないように忠告したものである。私や母が父に理不尽に叩かれたり怒鳴りつけられたりするのとは決まって農薬作業のあった日であったことをよく覚えている。集落の周りは水田や果樹園によって囲まれているが、農薬散布の時期は大変だ。薬で一面真っ白になる。私はひどいアレルギー体質でこの時期になると鼻水やくしゃみが止まらなくて困った。妹はひどいアトピー体質である。収穫を手伝う時には残留した農薬の白い粉末を頭から浴びてやはり真っ白になった。私や妹の体質は、医者のお話だとやはりこうした環境にあるからではないかとのことだった。しかしこれら農薬の使用は、高度資本主義社会とそこに生きる人々が求めるものだったのである。原則的には今もそれは変わってはいない。だから私は緑豊かで健康的な暮らしと農村のイメージとを無邪気に結びつけることができない。農薬の事故で亡くなった人は私の村の周辺だけでも一人や二人ではない。

作物出荷の時期の 3 ヶ月間はまさに戦争だった。経済と消費社会が求めるように商品規格をあわせるための荷造り作業が特に大変で、私の母も祖母も朝 5 時から夜の 11 時過ぎまで働き通しだ。私も出荷の時期にはその準備をずいぶん手伝ったものだ。今では、その大変さから一そして大変なわりに収支が合わないことから一農地の幾つかはほとんど放棄せざるをえなかった、どうしようもない選択だった。

私の遊んだ「里の原風景」には既にそれほど生き物がいなかった。父や祖父が話してくれたような虫や魚はもう姿を消していた。それは高度成長期の農業方法のあり方に伴っていなくなったということらしい。春になれば村の小鳥はさえずったが、小さな小動物は父

⁹ 同じことを図らずも佐渡島の調査の際に取材した子どもたちの水辺の生き物調査の事前準備の際、NGO 職員と経験することになった。子どもたちの水辺の生き物観察の場として予定していた場所のドジョウが 1 週間で全く姿を消していた。

や祖父の記憶の中に存在するのみで私の目の前には現われることはなかった。大きな動物—目的の仕事以外にも様々な恵みや作業をしてくれる牛や馬などの家畜—はもはや「コスト」と「手間」ばかりがかかるものであったから、すべてガソリンとオイルで単一の目的のためだけに使用する高価な機械に替わっていた。それでもなお近所にヤギを飼っている家があったのは、今にして思えば奇跡のような話なのかもしれない¹⁰。

人間同士の抑圧的關係ということもある。私の母はサラリーマンの娘である。このような農村・農家出自ではない女性が農家に嫁ぐことの様々な苦労を私もまた目にしてきた。農作業の大変さ、特に出荷の時期の忙しさは言語に絶するものがある。それに加えて家事や地域の行事の裏方仕事をせねばならないのだ。またしばしば農村の封建性と形容されることの多い農家の家族関係の難しさがある。私も私の妹も生まれるときは大変だったらしい。母の語ってくれたところによると私のときは祖父に「理不尽に」叱られ、そのために急に気分が悪くなって帝王切開による緊急出産ということになった。私は 2,700 グラムの半未熟児で生まれた。妹のときもまた、農作業の大変さとあいまって具合が悪くなり、出血しながら自分で自動車を運転し 7 キロ離れた病院に向かい手当てを受けたということだ。危うく流産するところだったという¹¹。私の「原風景」には、母が置かれていたこのような家族・地域内におけるジェンダーの構造的問題が介在していたのである。それは女性たちにだけ降りかかってくるものでもない。跡継ぎが生まれなくて妻と離縁させられ、世をはかなんで自殺した同じ集落の農業青年のことを私は思い出す¹²。

.....

以上のような背景を持つ私は、農村における環境文化運動（環境教育活動）や文化発信に共感と実践的に貢献したいという気持ちを持ち続ける一方で、その運動がもし内部に今

¹⁰このように程度の差こそあれ私もまたレイチェル＝カーソンが描く「沈黙の春」を実体験していたのである。レイチェル＝カーソン 1975『沈黙の春』において農薬が環境に与える脅威を生々しく示している。特に「明日のための寓話」（前掲 p. 11－13）に示される死に絶えた村の情景はショッキングだが、荒唐無稽というわけではなく部分的には実在するものだ。

¹¹佐渡島の僻地にある地域運動の担い手の男性も、初めての子供が妻の労働の大変さのために流産してしまったことを寂しそうに私に語ったことが思い出される。

¹² 諸外国に比べて日本の農村青年の自殺率が高いことに関しては別個に研究がなされている（内山 1990、p. 271 など）。今回私が訪れた農村集落の幾つかにおいて農村のいわゆる封建的人間関係（これは昔からのものではなく現在の社会情勢とあいまって作り出されているものである）に苦しむある農業青年に出会った。彼は新宗教に帰依しており、そこに救いを見出そうとしていた。しかし先日、その青年はある野生保護センターに就職内定し、野生保護と地域作りに取り組むべく新たな生活を始めようとしているということを元気に語ってくれた。それは、私自身とも重なるものであった。

述べたようなジェンダー的諸問題を増幅させるとするならば、私は到底それを容認することができない。だからといってそれらの構造的問題における構造的弱者を「弱者」としてカテゴライズし研究対象としてアプローチしたくはない。そのようなアプローチ方法は、彼女・彼らの主体的な「声」を弱めることにもなりかねない¹³。

では、どうすればよいと言うのか。

ここで一逆説的だが一再度この運動の可能性が浮上する。農村における環境運動とコミュニティ形成の活動、環境教育活動、そしてそれらとあいまって行われていると考えられる一連の文化運動は後者の問題系の克服を射程に入れて展開しうる十分な可能性を持っていると思う。というのは-またも結論を先取りするが-この「運動」がよりマクロな視点、つまり現今の社会経済構造に対する一サイドが紹介する言葉を使うならば「反システム運動」として展開していると考えられるからである。私がこうした運動を研究対象とするのは、これら運動が、その内部に増殖させうる構造的問題にも目を向け、運動内部で疎外されうる層とも連帯しつつ、現今の社会経済体制に対するよりマクロな次元での¹⁴連帯へと、理論的にも実践的にもつながるものであると考えられるからなのであり¹⁵、まさにこのことこそ、当研究が最終的に願っていることなのである。

2、研究のスタンスと研究手法～運動研究と実践のフィールドワーク¹⁶～

さて、本稿は「運動」を研究対象としている。ここから研究を進める上で、調査者の立場をめぐる基本的な問題が生起することになる。なぜならば、研究対象自身が研究者によって一方的に表象されるべき客体（あるいは単なるインフォーマント）として甘んじるの

¹³ スピヴァック（1998）参照。

¹⁴ 近隣の日本の食糧並びに原料の搾取地である東南アジアを中心とする第三世界の農民たちや草の根の知識人たち（当然ここでは「NGO」といった組織を無視することはできない）を私は想定しているのだが。

¹⁵ 第三世界の知識人たちは自国の環境運動のみならず、先進国内での草の根レベルでの環境運動に関心を抱いているし、また連帯への期待をもっている。なぜならばマリア・ミース（前掲）が指摘するように先進国の大量消費型経済が第三世界の貧困の間接・直接的原因となっていると考えられるからである。

¹⁶ 運動を研究するに際して、研究者が完全な外部性を保持し、長期的なフィールドワークを理由にして「フィールド物神化」に安易に陥ってしまう危険性が、文化人類学のみならず様々な研究領域で指摘されている。環境社会学の分野では、現在、新たに次のような研究スタンスが求められているという指摘がある。「これからのフィールドワークは、調査する/されるというその場の構造を自省するだけでなく、現実の人々の生活過程に依拠しながら、それに関与し新たな関係性を創造することが求められている。」（寺口 2001, p. 258）

ではなく、自らが主体的に独自の視点と課題意識をもっており、積極的に発信するのだと主張し、現にそれを実行しているからである。このことは運動に付帯する文化表象にまつわる複雑なポリティクスを調査対象たる運動やその担い手となっている人々と研究者の間にも生じさせることを意味する。つまり「運動」を研究対象とした時、彼らのメッセージと私の研究成果が必ずしも同一のヴィジョンを示すべく一致するものではないから、その間をどのようにネゴシエートするかということが問題として浮上するのである。つまり、彼らの語る「真実」と私が語ろうとする「真実」との間の齟齬の問題である¹⁷。だが、はじめに私の立場を明確にしておきたい。

まず、私の本研究の動機は、先に見たように私の個人的な直接体験に由来し、さらにそれは教育学的な関心とつながっていることを述べておきたい。「教育学的な関心」とは何か。言うまでもなく、教育学は自分自身もその中に生きている生の現実社会をその研究対象としている。そうした生の社会現実では好むと好まざるとに関わらず自分自身も誰かから教育されているし、また誰かを教育している。そうした生の現実社会には、日常実践に埋め込まれているが故に、問題を含みこみながらもそれは隠蔽されていたりするという状況が存在する。そのような状況を浮き彫りにし、「問い」を発して教育的課題を見出していくこと、そしてその課題をいかにして克服するかを模索すること、これが私の言う教育的関心が意味するところである¹⁸。

だから、農山村地域の「環境文化運動」の実践活動と完全に同化し、彼等と同一の主張をすることが本稿の目的ではない。もちろん、私個人としてはそれら生の現実が起こっている諸運動（ここでは農村における環境運動と地域作り活動、それに付帯する文化運動ということなのだが）に賛意を持っており、貢献していきたいと思う。また実際に、運動に文字通りコミットした形で貢献してきたところもあると思う。しかし、それは研究の社会的使命を果たすことを意味しないと思う。確かにそれら運動そのもののメッセージや実践活動とその成果から学ぶことは大きい¹⁹。

¹⁷このことに関してポストコロニアル状況下における文化人類学研究をめぐる諸議論を検討する中で、本質主義と戦略的本質主義をめぐる先行研究は示唆に富む。

¹⁸こうした姿勢は細谷恒夫(1962、特に序論の第2章「人間形成の場としての教育的現実」と第4章「研究方法とその問題領域」)から得ているものである。

¹⁹加藤守通(2002)はコミュニティーの人間形成論の課題として4つの課題をあげる中で「学校やNPOなどにおける具体的な成果から学ぶこと」を主張している。この見解はまことにもっともなことだと言わざるを得ない。次の文献参照のこと。加藤「コミュニティーの人間形成論」『教育哲学会第45回大会発表要旨収録』(2002年10月19日・20日)p.39、『『公』の教育、『私』の教育—アリストテレス『政治学』第8巻第1章を読む—(教育哲学会第45回研究討議p.10-16))。ちなみに、加藤氏の挙げる他の3つの課題のうちの2つ、すなわち①自発的な参加に基づく複数のコミュニティーが共存する社会の形成、②単なる個人の寄せ集めではない、活力を有するコミュニティーの形成など同様の主張は、私が本稿で考察した農村での環境運動と地域作りの活動

しかし、まさにそのメッセージや活動自体に内包されている問題も見え隠れするのである。そうした問題はおそらく運動そのものに携わり推進していく実践家においては見えにくいものであるし、たとえ見えていても、現在差し迫った運動を進めていく中では十分に検討していく余裕がない。あるいはそれを検討に入れることによって差し迫った運動の推進力を弱めてしまう可能性がある。さらにそうした問題は運動それ自体に内包されているものというよりもこれまでは他の領域だと考えられた問題との複雑なかかわりの中で生起していることが考えられる。例えば本稿の第4章で、私は農村での環境文化運動（環境教育活動）の展開の中で、ジェンダー的な問題や通勤と会社勤めといった現代の一般的なライフスタイルのあり方が極めて重要な要素として浮上してくることを指摘することになる。

しかし、それにしても運動がさしあたっては想定していないというそのような問題に本当に運動家・実践家が気づいておらず、何も対策を行っていないのだろうか。私は本稿で取り上げる運動家たちが実践活動を行っていく中で、実は運動家たちも活動やメッセージの中に含みこまれている問題に気づいており、その運動推進の中でそうした問題に対処しようとしていることを見てきた。例えば本稿第4章の最後に提起する農村女性を取り巻くジェンダー的な問題に対して、運動の中で活躍する場を設定したり、運動に参加しやすい環境を整え、巻き込もうと戦略を練っている（一方で取り組みを推進するにあたってネックとなる会社や企業の動向に関しては不問に付している、ここにこの運動が持っているもう一つの側面を伺うことができるのだが）。しかし、それはあくまでもその運動を推進させるという文脈での語りなのである。それが悪いということではない。運動の推進者としてそれは極めて妥当な戦略であり理解するに難くない。

では、研究調査者もそのような方針で運動内部に潜む問題を取り上げるべきなのだろうか。つまり、「運動推進のために」という大義名分を持って。私は違うと思う。研究者はこうした事象にある意味で極めて特殊な貢献をすることになる。研究者は、まず運動内部で不可視化された問題を明るみに出す。しかしこれは運動家たちもしばしば行っており運動推進のためにそのような問題に取り組んでいるものであった。したがって、研究者がなす特殊な貢献は次のこと、すなわちそのような運動内部での問題を「運動推進のため」という当面の目的をまず「宙づり」にして考察を加えることだと思う²⁰。つまり運動推進を絶対

において耳にした。本稿第2章の事例検討の中でその具体的な幾つかの語りを紹介することになる。しかしこのことが現実の社会において以下に複雑で論議の対象となり、またこうした主張自体がコミュニティ内部の闘争と、声を隠蔽された集団を生み出し強化してしまうということを垣間見ることになる。

²⁰ しかしながら完全に「宙づり」にすることなど可能だろうか？研究者個人の私的意志を消去して「客観性」を装うことなどできるだろうか？特にフィールドでの質的調査を遂行する調査者にとって、そんなことが可能であるはずもない。ポストコロニアル批評はあたかも自己を消去し客観性を装って記述しながらも様々な既存の偏見やバイアスを含んで他者表象していたという

命題として問題を考察するのではないのである。なぜなら、運動推進のために問題となっている要素は、それを「宙づり」にした瞬間、運動にとっての問題としてではなく、別次元の問題系として浮上してくるかもしれないからだ。運動が展開する際には、その推進力を得るために、運動が目指すヴィジョンにそぐわないものを疎外要因としたり仮想敵としたりすることで、諸集団を分かち境界線を設定する傾向があるということを指摘できると思う²¹。そして先の女性の問題にしても、もしかしたら運動推進の際に必要なものとして捏造されてしまった集団かもしれないのだ。研究者はこうしたことにまで考察の手を緩めず、「現実の」課題に相對することが重要だと考える。運動そのものが問題視していることとは違う運動内部における問題やその問題が問題視しているまさにそのこと自体を考察射程に入れ、それによってその運動が仮想敵としてしまったり問題視してしまったりしている要素がどのような位置づけにあるかを明るみに出すこと。そしてそのことによってよりよい実践へ向かうような知見を模索し提供するためのよすがとなることが研究の社会的使命の本願だろう。そうした研究とは、運動を推進する側のみ肩入れして発せられるものではなく、あるいは運動推進者が仮想敵にしたり問題視したりしている者たちに味方することを目論むものでもない。そうではなくてそれらすべての人々に対して向けられ、それらの人々全てが判断するための材料となるような知見を生産することを考えるべきだと思う。そういう意味では、研究成果が運動そのものを否定するような結論となる可能性をも持っているのである²²。そしてまさにこのような形でこそ現実の活動と連帯しようとするのが研究者の社会的使命ではないかと思う²³。そこから先、実践に関わるかどうかは別次元の問

オリエンタリズムに対する批判から始まっている。したがって、サイードはその有名な著書『オリエンタリズム』の序説において研究端緒、すなわち研究対象にアプローチする際の研究者の個人的次元の所在を赤裸々に語る。また『知識人とは何か』(1998, p. 70)においても、表象する知識人は自己の楽屋裏を暴露する必要性を示唆している。私自身もこれまでの論考(平成13年度東北大学卒業論文、平成14年度東北大学課題研究論文)において、農村での生い立ちを持つ私自身の感慨と本研究対象に最初にアプローチした動機について述べた。

²¹ ある環境運動家は私に次のように語った、「運動を進めるのはそれほど難しいことではない。あるヴィジョンを示し、それにそぐわないものを原則的にはきっていけばよいのだ。」

²² 私はここで具体的には想定しているのは、第三世界における環境運動や政策に組み入れられている女性に対する不妊処置などの人口抑制政策である。

²³ しかしそれにしてもこれは難しい。人類学領域でも現地住民が差し迫った運動を成功させるために本質主義的に自己と他者を規定する「戦略的本質主義」の問題が浮上している。もちろん、文化分析のあり方として戦略的本質主義と学問的にカテゴライズし、その構造を暴露することは可能であり容易ですらある。しかしそのことが運動の進展を非生産的な形で攻撃し骨抜きにしようかもしれない。例えば本稿で取り上げた農村環境運動で運動家たちによって本質主義的に語られる運動の支えとなる「里の原風景」のイメージはその発せられる相手によって様々に変容

題である。だから研究者がそうした実践的活動に参加することが悪いわけではない。しかし少なくともそれは研究活動の本業ではないのである。

とはいえ、私は本稿で取り上げた農村における環境運動と地域作りの諸活動に大きな感銘を受けており、それらの今後の発展に大きな関心を持っているし私自身も寄与したいと考えている。だからこそ、本稿の参与観察を中心とする調査活動を展開できたとも言えるし、彼ら運動家も私がアプローチすることを快く受け入れてくれた。告白すれば私は実践家として彼らとともに同一の地平から活動したい誘惑にたびたび駆られた。それは自分のフィールドノートを読み返している今、記述のあちこちで運動家として活動することに対する熱情を語る私の姿に出会うのである。運動に関わらずに単なる外部者として記述することなどできるはずもない。このような私の調査態度は、結果として現地住民に影響を与え、終章で触れることになる従来とは異なる新しい形の運動推進組織（「里の自然環境学校」）が誕生するきっかけとなった。私自身も現在この集落住民が主体となって企画運営される組織に「ヨソモン」として²⁴参入している。こうした現地の動きの中を揺らぎながら（現地住民と著者である私との共同作業で）なされた、まさに研究対象そのものまでをも含めた当研究は、私が内面化した（そしてそれは恩師たちから影響を受けて形成されたものだが²⁵）研究者の社会的使命と地域で取り組みを実践する活動家の社会的使命とのネゴシエーションの結果であると考えてもらえるのであれば、幸いである。

以上、当研究における私の研究スタンスを表明してきた。これはある意味で理想論かもしれない。現実の社会において、誰でも判断しているし、価値評価を下している。研究調査者だけがそうした世俗的状况に巻き込まれずに自由で客観的なポジションと視点を保てるのだと主張するつもりもない²⁶。だが、上の視点と自覚に立ったとき一逆説的だが一初め

する。あるところでは回帰すべき本質的な地点として現われ、ある人に対してはいまだ過去には存在しなかった創造すべき新たな地点として示される。それは必ずしも明確に固定された首尾一貫した語りではなくその時々状況によって運動の推進を潤滑にするかのように様々な要素を含みこみながら異種混淆的に語られる。私はその様子を具体的に分析的におそらく記述することができる。が、それをするによって、彼らの運動推進力を骨抜きにしてしまう可能性があることが自覚できるのである。

²⁴ ここでの私の場合、住民とコミットしながらも、一線を画した外部参入者であること。そして運動にとっては、調整役であるということを示唆する。

²⁵ こうした重要な論考を行うきっかけとなったのは李仁子教官の問いかけであり、また生田久美子教官はその論点を明確化してくれた。それらが本稿の論考を進めるための根本的な貴重な支えとなっている。

²⁶ 特に運動の現場に立ち会った際に価値判断や態度表明をするよう迫られる場面に出くわすことがあまりに多い。このことは私が何度も経験してきたことである。

て研究者が生み出す研究成果が決して客観的で無垢なものではなく、さまざまな既存の知的制度やバイアス（あるいは思い込み）を含みこんでいることに対して自覚的になれるのではないかと思う。そしてこうした自覚こそが彼ら運動家とそして運動が敵視したり境界づけたりした人たち双方の側の（そして今まさに仮に私が実行したような二項対立的な集団設定にまつわる知の編制力に自覚的でありつつ²⁷⁾言葉に耳を傾ける際の出発点になるのではないだろうか。

²⁷⁾ この点に関してサイドが知識人論を展開した『知識人とは何か』の指摘は実に的を射ていると思う。

第1章 調査地域の概況ー山形県最上郡戸沢村角川地区を中心にー

1、当研究調査の範囲と規模

本題に入る前に、当研究調査の範囲とその規模を簡単に確認しておきたい。

当研究は、山形県最上郡戸沢村におけるフィールドワークによっている。本稿で関係する3つの視点に絞って当村の概況を簡単に示しておきたい。第1に地区の構成について、第2に村の産業構造について、第3に研究者の参入状況について、特に外国人花嫁をテーマにしたものについて示したい。そして本章の最後に、これらの分析から見える村の概況と住民の持つ研究者に対するまなざしを考察する。これらの考察は、第2章以降の研究調査を進める際の現地における調査者を取り囲む基礎的な状況を把握する上で必要不可欠だと考えられるからである。

～地区構成¹～

まず戸沢村の地理と地区構成を簡単に見てみたい。当村は、中央を大河最上川が東西に流れており、大きく3つの地区に分かれている。最上川の北側は田園と丘陵で構成される戸沢地区、村の中央部最上川沿いのかつての舟運の港町を中心に構成される古口地区、そして村の南部、月山に連なる山に囲まれた山村集落によってなる角川地区である。

小学校区は4つに分かれている。北の戸沢地区には戸沢小学校と神田小学校があり、中部の古口地区には古口小学校、そして南の角川地区には角川小中学校（小中併設校）がある。中学校区は戸沢地区と古口地区に戸沢中学校、角川地区に角川小中学校がある。

村の人口（約6400人）の半数以上は戸沢地区に集中している。当研究フィールドの拠点となった角川地区は人口約1200人、世帯数約300でそれぞれ4～38戸からなる14の集落で構成される農山村である²。

第2章で詳しく検討する地域環境教育活動「とざわ里地塾」は村内の4つの小学校区で2002年～2003年にかけてそれぞれ1回ずつ行われた。第3章以降における環境教育活動とそれに対する地域住民の動向については主として角川地区に焦点を絞ってフィールドワークを行った。

～産業構造～

2000年の国勢調査によると現在の村の人口は約6400人で、次のような構成になっている。2000年現在、農林水産業で構成される第1次産業が501人で全体の16%、鉱工業を示す第

¹ 戸沢村村内の地区の位置等に関しては論文末の資料：戸沢村位置関係図を参照のこと。

² 論文末の統計資料（戸沢村全体、角川地区）参照のこと。

2次産業が1374人で45%、主にサービス産業を示す第3次産業が1191人で39%となっている。専・兼別農家数を見ると、農家数は746でそのうち専業農家はわずか17である。兼業農家の内、農業収入の方が多い第1種兼業農家は125、農業外収入が多い第2種兼業農家は604である。後でも触れるが、景観的には典型的な日本の農山村風景が広がる地域であるにもかかわらず、その実態は近隣都市への勤め仕事が多数を占めていることをこの数字は示唆している。

では、30年前を見てみよう。1970年当時、村の人口は8600人。産業人口をみると、第1次産業は3147人で産業人口全体の73%、第2次産業は431人で10%、第3次産業は738人で17%である。1970年の専・兼別農家数を見ると、農家数は1288、専業農家は39である。兼業農家の内、第1次兼業農家は768、第2種兼業農家は481である。以上を見ても、この30年間で産業構造に劇的な変化が起こっているのが分かる。そしてこのことが後で見る世代間の激しいギャップにつながっていることを示唆している³。

～研究者参入の中で見える調査傾向-国際結婚に関する調査研究～

戸沢村には数多くの大学研究者の調査や取材、あるいはマスコミ関係の取材が入って来た歴史を持っている。かつては、出稼ぎに関する調査で村内古口地区の蔵岡集落と戸沢地区松坂集落に大学の研究が入っている。特に70年代、日本の出稼ぎでもっとも盛んだったのが戸沢村であり、その中でも上記の集落であった。

その次に社会科学系の研究者が村に入ってきたのは80年代の終わり頃から、村で国際結婚が盛んになり始めた時からである。この時には研究者だけではなくマスコミが大勢入っている。論調はおおむね国際結婚の問題性や外国人花嫁にとっては過酷な村の封建性を指摘するものが中心を占めていると言える⁴。

以上のように、これまでの戸沢村に関する研究調査やマスコミ取材は農山村のネガティブな側面に焦点を当てる傾向があったと言える。そして集落住民もそのことを強く自覚していることもこれまでの私のフィールドワークの中で強く感じられるものであった⁵。

³ 論文末の統計資料（戸沢村全体）参照。

⁴ 桑山紀彦著「国際結婚とストレス」1995は、最上郡を主な舞台として展開した自己の医療活動のボランティアの実体験に基づいて、外国人花嫁が直面する日本の農山村の問題性を指摘する方向性で書かれた代表的なものと言えるだろう。だが最上郡における国際結婚や国際交流をめぐる研究は必ずしもネガティブな側面を指摘するものだけではない。例えば戸沢村における20年間に渡る韓国との草の根国際交流や行政の文化政策、あるいは食文化の変容のポジティブな面を分析した研究（仲野誠2003）がある。

⁵ 私が当研究で現地に深く参入することが可能だったのは、農山村における高度な「環境文化」や生活文化、そして住民の様々な取り組みに共感をもって参入するスタンスを取り続けた結果なのかも知れない。角川地区の活動家N氏が私や他の地域住民（及び地域活動家に対して）次のように語っている。「これまでたくさんの研究者が角川にも入って来ていることは知っている。し

実際に村内に居住している外国人花嫁は平成13年の段階で、38人（韓国人花嫁11人、中国人花嫁17人、フィリピン人花嫁10人）である。当研究の主要なフィールドとなる村内角川地区では、13名の外国人花嫁がいる。韓国1人、中国9名（うち1名は今年2003年8月に来村）、フィリピン3名である。当研究ではそのうち8名から話を伺うことが出来た（韓国1名、中国5名、フィリピン2名）。また、終章で詳しく紹介する「角川里の自然環境学校」設立後、私は主に事務局で本稿を執筆しているが、日本語教室が毎週事務局で開かれるようになり⁶、ここでも若干の話を伺うことが出来た。

以上、戸沢村の概況として産業構造、地区構成、研究者参入にみられる調査傾向を説明してきた。こうしたことは何を示唆しているのだろうか？詳しい考察は続く章で明らかにしていくが、ここで集落住民の声を折り込みながら、その意味するところを第2章以降の論点として簡単に二つ示しておきたい。一つは世代間の激しいギャップに関することであり、このことが地域住民によって語られる農山村の実態に関して相反する2面性を創出させている。もう一つは、研究調査者自身がどのような村びとのまなざしにさらされているのか、ということに関するものである。

この二つを示すことで当研究が焦点としている農山村における環境教育活動（＝「環境文化運動」）の周辺状況と当地域が抱えている研究者に対するまなざしを簡単に知ってもらいたい。それは第2章以後私が行ったフィールドワークがどのような状況で、どのような村びとまなざしの中で実施されたのかを感覚として持ってもらいたいからである。

2、地域住民によって語られる農山村の実態～自然環境の賛美と暗い感情、見え隠れする世代間ギャップ～

農山村における地域の子供達への環境教育活動は、「里の自然環境」や「里の生活文化」を背景にして語られる。産業構造の劇的変化は第1次産業から第2、3次産業への急速な変化をもたらしているが、それがここ30年間に生じたものであることに着目する必要がある。感覚を掴んでもらうために以下のようなシュミレートを見てもらい、そして次に角川地区

かし彼らが何をしているのか、まったく分からないし、私達の生活をきちんと見て、そして話を聞いてくれたということもない。」 また当研究の取材を記事にした朝日新聞と読売新聞の記述（論文末に資料として添付）を参照のこと。

⁶この自然学校事務局は集落のコミュニティルームといった性格を持ち合わせている。この意味で外国人花嫁も利用している。こうした状況は、本稿で検討する地域の自然・文化の称揚するなかで、そうした文化を持ち合わせていない女性達が周辺化される、といったことがないように配慮した結果といえる。

の環境活動家N氏の話を聞いて頂きたい。

-現実的なシュミレーション-

子どもが10歳（小学校4年生）、両親は40歳、祖父母は70歳という家庭を想定してみよう。では、30年前を想定しよう。子どもは当然生まれていない。両親は10歳、祖父母は40歳である。従って、祖父母の年代では73%が第一次産業、すなわち農山村の自然と文化を背景とした仕事に就いている。次の世代、つまり両親の世代には会社勤め（寝るのは地域だが、日常の大部分を占める仕事は地域外の都市部へ自動車等でワープする）をしている。里山や農地の管理はずっと祖父母がやっている。両親は会社勤めで忙しいのでノータッチである。しかしながら、祖父母が歳をとって身体がきかなくなったり、亡くなると、管理されていた里山、農地は荒廃の一途を辿る。両親の世代には里山の自然環境や農業、そしてそれに根ざした生活文化は継承されていない（なぜならば都市にワープしているから）。その後、この家族は、会社勤めに不便だったり、わけの分からない農山村文化の形式的側面（年中行事）などしか見えず、そのわずらわしさから、近隣の都市部へ引っ越すことになる・・・。

-地域の環境活動家N氏の話-

(N氏)「毎日の生活パターンが朝農作業をして、そのあと会社に行って、帰ってきてまた農作業というものだから、ここで地域活動とか環境活動とかいうと非常に忙しくなりすぎてしまうんだ。みんな農業も会社勤めも中途半端な状態だし、実際みんな貧しい。だから環境教育の取組みを地域でやるといっても子供の両親、特にお母さん方はなかなか子どもたちを出してくれなかったりする。その反面、子どもたちの教育にはお金をかけている。しかし、それは地域の生活文化や知恵を教えるという要素が入っているわけじゃなくて、いわゆる都会的な志向を持った教育なんだ。そのため地域からどんどん人材がいなくなってしまう。このように住民の目が外に向いているので、この地域の貴重な環境や野生生物に対する住民の意識もまだまだ低いんだ。例えばこの地域には貴重な野生生物のギフチョウが生息しているけど、俺なんかは地域のお宝だと思うんだけど、その保護に関してあまり関心を示していない。だから外部の人が入ってきて簡単に乱獲されてしまうという現状がある。だからこうした地域環境の豊かさや価値を子どもたちに伝え、そして、都会志向的で都市へ働きに出ている両親たちに伝え、地域のあらゆる人々を運動に巻き込んで考え方や価値観に変革を起していく必要があるんだ。けど、村でこうした取組みを進めていくのは地域感情の問題もあるから難しいね。ワンマンだという批判を受けることだってある

⁷。」

戸沢村角川地区に限っていえば、その自然環境や生活文化の実質的な面を度外視して、表面だけを外部から眺めやるのみであれば、ほとんどの住民が農山村の自然環境の美しさを賛美しているように見える。しかし、それが地域住民のいかなる努力で保持されているのか、そしてそれが生活とどうつながっているのか、つまり自然環境とそこに根付く生活文化の両面の関係性を理解しその上でここでの生活を賛美するということでは、先に見た 70 代以上のお年寄りと一部の地域住民（それも地域で生まれ育った男性や地域の活動家たち）にすぎない。単に見た目の良さ（自然の美しさ）を感じるのと、その内部事情まで含めて良さと感じるかどうかという、良さの感じ方に2通りの側面があるのだ。そしてそのことは農山村に対して賛美するのか、それとも暗い感情を醸成するのかということと対応しているように考えられる。

3、研究者参入の実態と村人のまなざし

以上のギャップは私が角川地区での調査を開始する時に直面したものである。田舎として表象されることを拒む人と逆に強調してほしい、農山村の良さを語って欲しいという人と、極端に言えば二つのタイプがあった。前者には集落の若手の人が多く、後者に老年世代が多いことは参与観察、インタビュー調査を進めていけばすぐに感じられるところである。このことは2章以降で詳しく検討するが、ここで研究者が置かれる立場、村びとからさらされるまなざしはきわめて複雑だ。

第1に、彼等はただ自分の「学術」論文のために我々を利用しに来ているだけだ、というまなざし。実際、私がフィールドワークに村を訪れた後、幾人かの大学研究者が村を訪れている。これに関連して研究者に対する集落住民の声を収集することができたが、その結果、研究者がもつ外部性に対する嫌悪のような感情が奥底に根強くあることがわかる。研究者はその研究が一体地域に対しての意味があるのか示せない限り（つまりアカウンタヴィリティの問題）、この感情は残ることだろう⁸。第2に、これは第1の感情とオーバーラ

⁷ 農村の環境運動にまつわる地域感情の難しさについては私も方々で聞いている。環境運動の取組みをしようとして村八分になることもあるという話を別の環境活動家から聞かされたことがある。東北地方のある村で農業を営みながら環境運動に取り組む男性が、「昔はもっと大変だった。また取組みに参加していた集落住民が「私は『そのような活動をやっているといつか殺されるよ』と脅されたこともあるよ」と話していたことが思い出される。

⁸ 村のある職員が私にこう語った、「あの先生のような学術的すぎるような研究のあり方は、悪

ップするのだが、研究者の視野にあるのはあくまで自分達の物語であり、地域住民が発信したいと考えている声は取り上げるなどないのだ、ということである。これまでこの地区には実に様々な研究者が入って来ているにも関わらず、村びと自身があまりに研究者参入の実態を知らないという現状をいぶかしく思う住民。そしてひょんなことから、彼らは国際結婚が行われている地域の「問題のある」住民として表象されていることに気付く。地域の自然や文化に立脚した環境教育をすすめようとしている住民達はこのことを自覚し始めている。また、調査に協力したにもかかわらず、それがその後どう展開したのか全く分からないということ、自分達はその成果を目にすることはできないということから起こる不信感である⁹。

これらの地域感情は、研究者側からすれば実態にそぐわないと反論できるだろう。現に村の暮らしに共感的で貢献しようという研究がむしろほとんどを占めるし、集落住民を勇気づけたいという願いの下で書かれたに違いない論文を私は確認している¹⁰。

しかしながら、残念ながら、6つの点で住民に嫌悪感を抱かせる要因があると思う。第1、研究の主旨目的が住民によく分からないこと。第2、調査で集落へ参入する際のやり方が唐突であること。第3、住民がが目指している文化発信のスタイルにタイアップしていないこと。第4、研究調査後の結果が住民に還元されていないこと。第5、たとえ還元されていたとしても、住民にとっては理解不能な大学の「業界用語」で書かれていること¹¹。並びに村の人たちの認識様式とはかけはなれた大学の「理論」「言語」で説明されているのでよくわからないこと。第6、あくまでも言語であり、実践としての研究成果が見えないこと（つまり「有言不実行」）だということである¹²。

気があってやっているのではないだろうが、残念ながら今後こうした村では受け入れられることは難しいのではないかと思う。」

⁹ 資料に上げた新聞記事最後の部分に語られている「研究成果を目にすることがなかった」という住民の声は、このことを如実にあらわしていると言える。

¹⁰ 戸沢村を研究対象にした論文はほとんどが肯定的なまなざしの下で書かれている。しかし、それが真に住民の内部に入り込むことなく、あくまでもその外部性によってしか研究し得なかったということが指摘できるかも知れない。フィールドに赴くと役場取材のみで書かれている実態が多いように思われたし、住民の中に入っている「いきなりわけの分からないアンケート調査から始められ」ているということもある。このような状況では、研究者に対する猜疑心は存在することも止むを得ないことである。私は終章で紹介する地元学の際、住民の感情に配慮して、ある大学の研究室ぐるみで参加したいという申し出を断らざるを得なかった。

¹¹ 役場のある課長から頂いた大学研究者が作成した資料に対する話、「しょせんは『業界用語』だから、わけがわかりませんね。」

¹² この点は実践家とは一線を画して調査研究活動を行う研究者にとっては的外れの主張のように聞こえるかも知れない。しかし、長く韓国との農業交流を担ってきた専業農家のHさんが語るように、農村に住む人は、次のような感情を持っていると考えれば、無視できない主張である。「特に農業者にあっては、実践があつて、直接見せつけられてはじめて理解できるんだ。」

第2章 環境教育活動による「環境文化運動」の表層

ーとざわ里地塾の取り組みを中心にしてー

1、戸沢村との出会い～環境 NGO 里地ネットワークとイオン里地里山保全活動シンポジウム～

私が戸沢村の地域の環境活動家 N さんと出会ったのは 2002 年 3 月のことである。当時、私は、2001 年 5 月から環境 NGO 里地ネットワークに同行しながら、各地の農山村の環境運動や地域作りの現場を回っていた。私が同行した現場は、関西から東海、北陸、そして東北にかけて約 20 ケ所、日数にしておよそ 4 ヶ月にもわたっていた。それらの現場の多くは民間の非営利団体（NPO）や集落住民が主体となっていて行われる取り組みであった。里地ネットワークの設立目的とは、地域住民が主体となる中で農村地域の潜在的な能力を再発見し、地域外の住民（都市など）や行政、NPO、NGO など広範なパートナーシップを構築しつつ、より環境負荷の少ない持続可能な循環共生型の地域社会を作ることにある。私が当 NGO に半ばスタッフのような形で参入し調査研究活動をしたのは、次の理由からであった。それは、彼ら NGO メンバーが佐渡島のトキ野生復帰のための地域社会作りにおいて、農山村の自然環境やそこに住む人々の潜在能力について真摯な関心を寄せ、その声を汲み取る作業（＝これが「地元学」なのだが）を通して、環境保全活動や地域作りのプロジェクトを立案していこうとする姿勢に共感するところがあったからである。その姿勢は外部参入者であることを知悉しながらも地域住民との共同作業で集落の将来を考え共に取り組みを進めていくことを示していた。

こうして振り返ってみると当初から私は研究者の調査フィールドへの参入を「調査者だから」といって無条件に正当化できないことを自覚していたといえる。なぜ、そして、いかなる権利で我々は現地住民を、その文化を表象できるというのか¹。しかもその表象様式は必ずしも現地住民に理解されるものではない。また、その研究は直に現地住民のためになるわけでもない、そもそもその研究スタンス、研究の「ものさし」、表象様式自体が現地住民が語りたい自分達の肖像とは時にかけ離れたものだったりするわけだ。大学で書物に埋もれた文献研究ではなく、直に生の現実肉迫して研究を進めたいと願った私だったが、いざフィールドに赴こうとすると、研究者の立場性をめぐる上記のような問題が、数多くあがって来たのである。無条件に独立の客観的な調査者を標榜することなどできない。そのことを整理したくて、これまで一方的に外部から語られることが多かった農山村の最近の動向、自分達の文化を語ることが活性化されている「里地里山運動」に目を向けることになったのである。それは農山村で生まれ育った私の文化的背景とも重なるものだった。

¹ 太田好信 2001 の序章を参照のこと。

というわけで、当時、私の主要な研究テーマは、地域の住民がインフォーマントとしてではなく自らが主体となってどのように自分の文化を語り得るのか、そしてそれがどのようなインパクトを生じさせるのか、ということだった。当 NGO にこれまで約 3 年間参入する中で考察した結果、住民による文化表象の実態は、それまで「客観的」に文化を語って来た研究者の立場性の問題を浮き彫りにすることを意味していることが見えてきた。また一方で文化を語る地域住民内部で新たな周辺化・排除のポリティクスが働きうるという新たな問題が見えてきた。このことは、当研究でも後で農村女性に焦点をあわせる際に触れる。

さて、里地ネットワークは、当時、イオン環境財団²との共同で日本各地の農山村での里地里山保全活動を展開していた。そのプロジェクトは 3 年間で計 20 回に及ぶものであり、最後のシンポジウムが千葉県印西市で行われた。私もスタッフ動員という形で参入した。シンポジウム前日には、会場となる印西市の結縁寺という所、ここは里山とニュータウンが複雑に交差した地域なのだが、ここで集落住民とニュータウンの住民による地域環境・生活文化調査（＝「地元学」）が行われた。その時、山形県最上郡戸沢村から来た二人の奇妙なおじさん、M 校長先生と N さんに出会ったのが、戸沢村との最初の出会だった。

～M 校長先生と N 氏～

本当に奇妙な二人だったというのが、最初の印象であった。まだ雪深い山形県の最上郡から、わざわざ千葉までやって来たのである。しかもお土産は私造酒「どぶろく」だった。酒臭かったのはこのお土産が原因である。どぶろくの輸送は大変困難なものであり、容器が破裂しないように新幹線の中でキャップを開け閉めしながら運ばなければならない。途中で飲みたい欲望を必死で押さえながら、千葉まで運んで来たということである。このキャップの開け閉めの作業は大変重要である。どぶろくはその性質上、常に発酵しているのでキャップを閉めたまま放っておくと大爆発をおこしてしまう。のちに私がフィールド調査に入った時、N さんはどぶろくを私にあげようと思って台所にとっておいてくれたらしいのだが、うっかりしてしっかりキャップを閉めてしまった。大爆発を起こして台所を臭くしてしまい、奥さんに「すこてま、ごしゃかれた」（※ものすごく、おこられた）という。そのような危険があるにもかかわらず、この地酒を、新幹線の中でおいをぷんぷんさせながら運んで来たのだ。それだけでも、ただ者ではない。

シンポジウム前日の飲み会では、このどぶろくが威力を発揮し、お互い酔っ払いながらもスムーズにコミュニケーションを築くことができ、宴会の席上、この二人から詳しく話を聞くことが出来た。1 人は M さん。この人は校長先生だった。以前、里地ネットワークと

² 国内最大の環境財団として有名。

イオン環境財団の里地里山保全活動の取り組みが最上郡最上町で開催された時、地域の学校側の主催者として参入したということだった。この千葉には村の教育委員会のバックアップを受けて来ることができたという。

戸沢村については、私も以前から国際結婚関係の情報で知っていた。2002年3月段階で私は農村での環境運動と地域作りの取り組みは女性達が周辺化される傾向があるのではないかということに気がついていて、特に地域外から花嫁として入って来た女性達にとっては極めて参入が困難な状況を、それまでの参与観察の中で感じていた。

その中であって、戸沢村は国際交流を韓国との草の根的な農村交流の中で培い、その延長線で、国際結婚で地域に参入して来ている花嫁を受け入れるための各種の取り組みが盛んだということを認識していた。

私は戸沢村といえば国際交流と国際結婚・異文化交流の受け入れで随分かかっている地域であると認識していたからその話へと水を向けてみたが、彼らはそのことにはあまり関心がないし語りたがらない様子だった。彼ら二人の関心事はあくまでも地域の自然や環境文化の保全にあった。そしてそのことを地域作りに結び付けるところにあった。M校長先生と共に来ていたNさんは戸沢村角川地区の住民だが、彼の話は、地域の良さを再認識し、発信していくことの重要性和、そのようにして子供達が地域に育つことの誇りを持つことの大切さを熱っぽく語るものであった。彼らは一生懸命だった。この日、里地ネットワークが行った地元学の様子をつぶさに分析して問題点などを討議しあっていた。里地ネットワークのスタッフとして参加していた私も一緒に夜更けまで彼らと語り合った。彼らはこの年の夏から「とざわ里地塾」という環境教育の取り組みを行おうと画策していた。そしてそのコーディネーター役に里地ネットワークを招聘しようと考えていたのである。

Nさんの話で気になるキーワードがあった。それは農山村の「自然」のみならず、「文化」とか、子供達の「原体験」の大切さであった。彼は、地域の貴重な野生生物であるギフチョウの話を中心にしながらも、それら「自然」の要素と人の「生活の営み」といった要素を角川という地域圏における一つの「文化」として捉え、その両方のかかわりを子供達の「原体験」させていくという夢を語るのである。私は里地ネットワークに同行しながら断続的に1年間各地の農山村の環境運動と地域作りの取り組みを見てきたが、子供達に焦点を当てた、担い手作りを全面に掲げた取り組みを見たことはなかった。私は農山村の環境文化を住民が主体的に語ることで、一体将来世代にどんなメッセージを発しようとしているのかに関心を向け始めていた。

私は、Nさんに必ず一度、どぶろくを飲み角川を訪れるからと約束して、翌日別れた。

2、農山村地域の環境教育活動―「とざわ里地塾」ルポルタージュ―

私が始めて戸沢村を訪れたのは8月の終わり頃、里地ネットワークが戸沢村での環境教育活動の取り組み「とざわ里地塾」に同行することになってからだった³。

とざわ里地塾の全体の取り組みは村内の4つの小学校区でそれぞれの地域特性を生かした環境教育の取り組みを、学校と地域住民の連携で行うというものである。次のようなプログラムで開催された。

古口小学校区（2002年8月）

1日目：地区内北の妙（地名）メダカの学校周辺の水田・水路の水辺の生き物観察、
環境マップ作り

2日目：炭焼き窯見学、炭細工作り

戸沢小学校区（2002年10月）

1日目：地区内金打坊集落での鮭漁体験、松阪集落でのもの作り塾

2日目：小学校での炭焼き細工作り

角川小中学校区（2003年2月）

冬の里山観察会、冬の昔遊び体験塾、わら細工作り、民話を聞く会

神田小学校区（2003年5月）

山菜取り体験、川遊び体験

いずれのプログラムもほぼ同じような主旨と企画運営体制のもとでなされている。特に古口地区においては地域の老人達の参入が盛んであったため、これらの取り組みを地域で支えている人々の声を聞くことが出来た。ここでは、古口地区の「とざわ里地塾」の取り組みとNさんが住む角川地区のとざわ里地塾とその後の展開を紹介したい。

～ある夏の環境教育の取り組み-古口地区「とざわ里地塾」-～

<前日準備の模様>

活動の前日、午前に今回の環境教育に参加するため東京の環境NGO 里地ネットワークのスタッフと最寄りの駅で待ち合わせた。JさんとMさんは当NGOスタッフであり、他に千葉県から来たWさんは千葉県で地元学と環境教育を進めていこうとしているNPO活動家だっ

³ とざわ里地塾の開催1週間前に村内角川地区を訪れ、開催運営に関してNさんから詳しく話を聞いた。また角川地区の自然環境や暮らし向きについても取材している。こうした事前作業をしたのは、イベントのメッセージだけではなく、研究者としての独自の見方を持っておきたかったためでもある。

た。出迎えは村の社会教育課長である T さん。オシャレなアメリカの車に乗り、顔にはひげを生やした面白い人だ。あとで、彼が長く最上郡の国際結婚の対策室に出向し、2年間ほど取り組みを行って来たことを知った。

さて我々是一路、宿泊の拠点とする若者センター向かう。その間、車内では NGO の J さんがいろいろと課長さんに質問し、どのように地域が動いているのかを知ろうとしている。T さんは学校の環境教育の取組みに触発されて老人たちによって自主的に作られたわら細工などを作り教える会（「わら細工会」とここでは仮称しておこう）などができたり、炭焼き小屋が老人パワーによって作られたりして盛り上がっている様子を話した。

お昼に若者センターに到着し、地域集落の方々や学校関係者と打ち合わせを行う。東京の NGO スタッフからは地元学の説明などがなされる。午後も打ち合わせは続く。環境教育関係の本を企画している出版社 4 人が今回の取組みを取材させてもらいたいということで東京から到着し、打ち合わせに参加する。また各集落の地域教育を推進する役員らも到着した。先ほどの話に出てきたわら細工会の老人たちも集まってきている。そして日程確認などが地元の校長先生を中心にして行われる。その後、今回のイベントが行われる場所へ向かう。途中、わら細工会の活動拠点の児童館を訪れ、作品を拝見する。

現地に到着したのは 2 時過ぎ。現地で打ち合わせを行う。現地は水田と水路、そして新しく行政と住民で作った大規模な「メダカの学校」があり、また老人たちを中心にして作ったかなり本格的な炭焼き小屋がある。いろいろな工夫がされており、大人たちはつい観察に夢中になる。ここで近くの集落の S さん⁴も合流する。

現地では明日のメインメニューの一つである草花を利用した遊びの予行演習をする。皆、子供のときに行った遊び方で、草笛、草風車、弓、草鉄砲、お面遊びな



＜メダカの学校・橋などは手作りだという＞

ど数多く取り揃えており、それぞれ老人たちや役場スタッフ、学校の年配の教師、集落のお父さん方などが担当して明日は子どもたちに教えるという。予行演習ということだったが、結局大人たちだけでも夢中になってしまい、現地での打ち合わせを終えたのは 4 時過ぎになってしまった。宿に戻り、今回のコーディネート役であった地域の方々と地元の温泉で入浴した後、取材に来た出版社の方の希望で、小学校裏手の鎮守の森を被写体とした

⁴ 彼とは 1 週間前に会っていて集落活動に関するさまざまな話を聞かせてもらった。p. 21 参照のこと。また、彼については第 3 章で詳しくふれることになる。

スポットを探そうと試みる。四季を通じて写真が取れるような（つまり里の自然というテーマで絵となるような）ところを探しており、そして里山での暮らし（里の生活文化）が見えるようなところが望ましいということであった。

さて6時から集落の役員、地域の学校職員と各校長先生、わら細工会、外部参加者のNGOスタッフ、出版社を交えて歓迎会がもたれる。これは9時過ぎまで続いた。単なる宴会ではなく、皆一様にスピーチの時間を与えられ、各自どのような意味をこの活動に見出しているのか、そしてどのようにこの活動を盛り上げていこうとしているのかについての話がなされる。この内容に関しては後ほど詳しく触れよう。

<当日1日目>

7時に朝食、すぐに出発。現場に8時過ぎに到着する。準備風景を拝見する。老人会のおじいさん方、婦人会と老人会のおばさん方が昼食の準備などをしている。9時に子どもたちや保護者が集まってきて開校式が行われる。子どもたちには各学校などを經由して申し込みの連絡が回されていた。また各地域の役員が宣伝もしていたようである。まず子どもたちをグループに分けて水田や水路、メダカの学校での水辺の生き物調査を行うことになっていた。

私も「仙台から来た変な学生」と社会教育課長さんから紹介され2班の副引率指導者として子どもたちと調査に加わるようになった⁵。主指導者は地域集落の役員をしているUさん（男性）である。私が加わったグループには子供の保護者であるお母さん方も一緒に2人ほど加わっており、めだかの学校を作った際の経緯などの話を聞くことができた。後に触れる。



子どもたちは最初、泥に入ることを嫌がっていた。しかし大人たちが見本を見せて生き物を捕まえる様子を見ながら徐々に夢中になっていった。そして最後には苦労しながらも多くの生き物を捕まえ、おじいちゃんやお父さんたちにその生き物が何なのかを聞いたり、持ってきた図鑑で調べたりするようになっていたのである。

⁵ このような活動で、「客観的」な立場から参与観察を行うことはほとんど完全に不可能であるように思われる。またこうした活動に対して何らかの態度表明をすることを一たとえその活動の全体像が見えていない初期の段階においても一迫られる場面は多い。というよりも、こうした調査の過程で、彼らとこの活動の位置づけを共にに行っているのかもしれない。しかしながら今回このような形で取組みの一活動者として子どもたちと接しさせてもらうことができ、その結果、彼らが抱えている様々なメッセージや願い、それを支える感覚に対して及ばずながら一歩でも近づけたのではないだろうかと思っている。この点で受け入れてくれた村の人々には大変感謝している。

お昼ごろ水辺の生き物調査が終了した。子どもたちやお母さん方役員とご飯を食べる。昼食の内容は朝から炊事の準備をしてくれていた婦人会老人会の方々が作った地域の食材を利用した料理である。どのように調理しているか、使われている食材の特性など（防腐効果など）を丁寧に説明して下さる。子どもたちは用意してきたスナック菓子になどは見向きもせずに里の料理を夢中で食べていたのが印象的であった。

昼食の終了後、水辺の生き物調査をまとめるための作業を行う。地域資源カードに記入し⁶、地図の中に記入する。

1時過ぎに前日大人たちが予行演習した草花遊びを行う。子どもたちだけでなく大人たちも夢中になって行う。15:00過ぎに一日目の活動終了。子どもたち帰宅。

我々スタッフたちは若者センターに戻って、地図を作成、水辺の生き物調査の際、子どもたちが捕まえた生物を写真に取っていたので（私もこの撮影にはカメラを持って協力していた）、その整理作業を行う。これはこの地域の環境状態を科学的に知るための資料となることが企図されている。地図作りは集落の役員が中心となって夜遅くまで NGO スタッフと共に行われた。



＜草木での風車の作り方を教えている＞

10時過ぎ、完成した環境マップを眺めながら、地域の校長先生、村の教育課の職員、取材に訪れた出版社の社員、環境 NGO スタッフらで夜遅くまで酒を飲みながら語り合う。

＜当日2日目＞

朝食後 8時過ぎから打ち合わせを行う。内容は次回以降の環境学習の日程や取材の打ち合わせなどである。その後、二日目の活動を行うために現地に向かう。二日目の活動は子どもたちの炭焼き細工づくりである。老人たちによって作られた例の炭焼きがまを利用する。老人たちが中心になって炭焼きの火入れを行なう。その炭焼きでできた炭を使って子どもたちが様々なアクセサリを作るのである。全日程がお昼ごろ終了。閉校式が行われ、どんな生き物がいたのか、どんな草花で遊びができるのか、楽しかったことなど、活動の内容や感想を是非とも家に帰ってお父さんやお母さんに教えてあげてください、との話がなされる。そして解散。東京から来ている NGO スタッフ 2人と私は校長先生の車に乗せられて先生のご自宅を訪問した後最寄り駅に送ってもらう。

⁶佐渡島で使った物と同様のもので NGO が持ち込んだものを利用している。

以上のように、環境学習の取組みには多方面の人々が参入している点が見受けられよう。これは彼らの環境教育が単に子どもたちへ向けたものであるだけでなく、自らをより広い環境運動や地域作りへと結び付けようする（あるいは既に結びついている）中で必然的にできた形であることを示唆している。では取り組みを行う側の内部の意図にはどのようなメッセージが込められているのだろうか。そしてそこにはどのような課題構造が垣間見られるのだろうか。

～「子どもたちに地域の『原体験』を」というメッセージ～

前節で環境教育活動の一部始終をざっと見ていただいた。さて、この活動はその背後にどのようなメッセージを持ち、子どもたちに向けているのだろうか。私はこの活動がおこなわれる1週間前に村を訪れ、集落の活動の一人（Sさん）に会い、この環境教育の活動の意図するところを聞くことができた。

彼は、地域の環境をたくさん体験してもらえば、子どもたちにたとえ他の地域に出たとしても根無し草になっておかしくはなることはないだろうと話していた。自分が育った農村環境での「原体験」とは非常に重要なのだ、と。そして学校を媒介にしてこうした活動を行うことで、村の各地区間のコミュニケーションを活性化させ、それぞれの集落で行っている地域教育をつなげていくという「社会的仕掛け」作りの一貫でもあるのだ、と話した。そして、今の子どもたちに関しての言及では、彼自身の子供が地域で遊んだ体験があまりないので、この地域のよさがあまりわからないのではないかと、ということも話していた。このように自分の子供に対する実体験としての反省的視点をも持っている。



＜わら細工を教えている（秋の取組みから）＞

～地域内コミュニケーションの活性化と「老人パワー」～

また彼はこうした活動の主役として子供を仕掛け人にしながら地域活動に両親や祖父母を巻き込んでいこうという作戦に関して話してくれた。そして現に今回の活動を機に老人たちが主体となって「わら細工の任意団体「古口乙夜塾」や炭焼き小屋が作られた。ここで

「彼ら老年世代はこの地域の自然環境を利用した生活文化を継承している存在である」と見なされ

前述の環境教育のイベントの際にわら細工会のリーダーの老人から聞いた話を紹介しておこう。会を作るきっかけは学校の総合学習で子どもたちを教えと頼まれたところにあったという。昔の児童館を根拠にしてほとんど毎日地域の老人が集まってやっている。その 都度協力をお願いしたりなどするときもあるが、恒常的に 20 名程度のメンバーがいるという。先にも見た通りこの団体は地域活動の主要な役割を果たしていると評価されている。「当初やり始めたときには、まあ、週に 2 回程度が限界だろうという話だったのですが、やってみると面白いものです。わらぐつのように難しいものはちょっと大変ですが、簡単なわら細工程度であれば、すべての老人が楽しめるものだし、毎日誰かがここにいてやっているという状況になっています。そこに行けば、誰か地域の老人に会えるのです」と語ってくれた。夜の歓迎会での話を聞いていると、非常に楽しそうにしているので、見ている私も爽快な気持ちを持ったものである。彼らは、村の運営を退いた後でも、自分たちの役割を見出せたという。しかも子供達の学習に重要な役割を果たすという、ある意味でこの村が取り組み始めた新しい取組みの先を行こうとしている。このことは老人たちも自覚しているようであった⁸。

～古口・北の妙におけるメダカの学校、炭焼きの学校のその後の展開-古口「乙夜塾」の取り組みの活性化と「北の妙創郷大学」の設立-～

古口の「とざわ里地塾」の取り組みを地域で支えたのは、わら細工などのもの作りの老人集団「乙夜塾」だった。その後、この乙夜塾のメンバーを中心に炭焼き窯を製作するなどして、現在炭焼きも行われている。地域内外の子供達に炭焼きの技術を教え、できた炭を村内の施設やほしい人にあげている（私も何度も訪れている内に上質の炭をずいぶん頂いた）。そして、さまざまな取材を受けている光景を目にした。2003 年 6 月には、古代米を子供達と植え、昔のスタイルでの農業体験活動「田んぼの学校」をするなど多彩な取り組みへと発展した。炭焼き窯や、前述のとざわ里地塾が開催されたメダカの学校、そして田ん

ているし、実際そうした面を持っている。しかしながら、歴史的に本当にそのような知恵がかつて存在したか、あるいは彼らが本当にきちんと継承しているか、ということに関しては、ここではあまり議論の対象とならないようだ。彼らが行うわら細工作りにしても、藁靴（わらぐつ）などは難しいので作れる人があまりいないという話も聞いたし、ペットボトルやジュースの空き缶などのかつては存在しなかった素材を利用したわら細工も存在しているからである。また炭焼き小屋に関しても、クーラーボックスを利用した冷却装置やかまどの入り口に使用されているドラム缶の開閉装置などは、明らかに現代的な工夫と素材が利用されている。一方で炭焼き小屋の屋根などはいわゆる昔ながらのかやぶき屋根が使用されていたりする。これらは皆老人たちのアイディアでなされているものである。このように伝統的な文化の発信とは、厳密な意味でのそれとしてではなく、今現在において老人たちがいかに地域の諸活動に参入しようかという側面から語られていることが垣間見られると思う。

⁸ 秋に行われた第二回目の環境学習においても大活躍をされておられたのを記憶している。

ぼの学校がある地区が「北の妙」というところなので、これらを総合して「北の妙創郷大学」として、取り組みの広範な展開を目指している。私はフィールドワークを開始して以来何度も訪れているが、土日にはきまって子供達の姿を目にした。

会の代表であるKさんは村のある集まりで次のように、乙夜塾、北の妙創郷大学の設立経緯を述べている。

「4年ほど前から地域の学校づくりという話がありましたが、そのころから私どももということになろうということと思いますが、元々学校に出入りをさせていただいたということとはなかったし、前はそんなに学校との出入りはなかった。そんな中で学校に出入りをさせていただきました。中々忙しくて学校に出入りするということもできなかったと思いますけれども、私は暇人だから、来いやということで、じゃあ行くかということになったわけです。やっぱり古口の場合、230戸ほどありますけれども、年寄りの家、それから若い家庭の家というようにやっぱり核家族化がだいぶ進んでおります。そんな点では、やっぱり年寄りの家というのは、中々子どもと付き合う機会がないということになってきています。そうなりますと、やっぱり学校さ行くということとか、子どもと付き合うということは、いいんですな、やっぱり。そんな点で、本当に新鮮な感じを結構持ったようでした。そんな動きがありまして、その後、暇な連中ですから、何かみんなで集まってするべやと、いうようなところから、始まったのが、ものづくり塾でした。そんなわけで始めてみますと、結構いろいろあれもしたいこれもしたいという意欲が出てきた。やっぱり年寄りというのは長いこと海千山千生きてきたわけですから、あの人も行くならば、わたしも行くけれども、あの人と一緒ならば、やんだなあというのが、年がいくとなかなかどうして一筋縄ではいかない面があります。まあそういう面では、まずあんまり難しく考えないで、楽しみながらやるべや、ということになりました。何十年生きていたって知らないものは知らないんだから、この際、覚えていたことは、みんなに教えればいいし、知らねえことはみんなから素直に聞くべやと。だから、みんなが先生で、みんなが生徒だみたいな感覚から始まった面では、非常に楽しくしております。だからまず肩の力を抜いて、誰のためだとか、子ども達のためだとか考えたら、肩張ってうまくねえから、我のためだ、我が楽しければ、後はそれ以上求めないとそんな気楽な気持ちで集まるべやと、その代わり会費も要らないし、定款もねえし、契約もねえし、出席簿もねえし、来たい時来て、好きなことやるべやという非常に気楽な形で始まったのですが、それがもう毎日来るようになったというわけです。そんなことから、あれもしたいこれもしたいというのが次々と出てきた。そんな点で、いろいろめだかの学校やらなにやらやっていると、子ども達との関係というのがすごく和やかなんですな。じいさまたちばかり集まっているとどっちかというとなかなか堅くなる。けども子どもが入るとがらっと変わる。そしてやっぱり昔を思い出して、

あの時はこうだった、ああだった、おらだ昔はこうだったと生き生きと話をし出すんです。そういう面では、地域が元気になってきたのかな、という具合にみられます。そういう面でいろいろな動きがありました。今度は川のアダプト事業だとか、川の診断書とか川に通信簿つけてくれやということで今やっておりますが、そんな中に子どもも入るんだよ、小学校の子ども達も来るんだよ、ということになると元気さが違うんですな。どうもうちに帰ると、じいさん一人ばあさん一人、もしくはじいさんかばあさん一人、というのが多くなってきた、なかなかうちにかえったって、言葉も少ないし、じいさんあっち行けや、というようになりやすいものですから、その点で、子どもとの関係というのは、ものすごく楽しくしているみたいです。ですから、私の方も何かある時には、子ども達が来てもらうとおらだが元気になるから、やっぱり子ども達にもなるべくいろんなことを教えて、子ども達を引っ張り出して子ども達が参加してもらうことによって、おらだも元気になるなということです。だからこれまで地域の学校づくりということで学校に引っ張られてきたのが、逆におらだの動きが出てきたおかげで、逆に子ども達を引っ張り出して、おらだが元気をもらっているというのが実態です。まあそんなことで、これからもボランティア活動をしながら、まああんまり金の事は言うなと、今から金儲けして、どこさたがっていくんだ、飲みてえ時にはみんなで金出して飲むべやと。そんなことで、本当に気楽に動き出したのが、今の状況です。そんなことで、あきされると困るなとか、あるいはさっき言ったみたいに、あいつといっしょだとやんだなんていうことがないようにだけ思っております。」

ここでは、取り組みを進めていくための地域内の人間関係の難しさも語られている。次章の第3章ではこの点、すなわち地域の内部構造に考察の焦点を当てることになる。その前にもう一つの地区、所々の条件が整い、長期のフィールドワークの実施が実現した角川地区での取り組みの様相を紹介したい。本稿では主として角川地区において、取り組みをめぐる地域の内部構造を具体的に検討することができた⁹。

角川地区の動向 -2003年2月～2003年7月 とざわ里地塾とふるさと委員会の取り組み-

私が長期のフィールドワークを開始した角川地区では2003年2月に「里地塾」が行われ

⁹ 当村のような盛んに文化運動的な取り組みが起こっている地域での、しかもその取り組みが地域内の複雑な人間関係で成立している地域で、地域で長期の参与観察を主たる方法とするフィールドワークを行うことは大変難しい。調査遂行の中で、時にプライバシーの問題とどう折り合いをつけるかで悩む場面も数多く発生する。実際、戸沢村でフィールドワークをすることを聞いたある大学の教員が私に、やめた方がよいということを忠告している。私が、角川地区に外部参入できたのは、極めて稀なことなのかも知れない。この点で、私は調査研究を支えてくれた角川地区の住民の皆さんに最大限の感謝を申し上げたい。

た。それに先立って、私は何度か角川地区を訪れていた。後で見るように「とざわ里地塾」は学校と地域との連携による教育活動だが、学校側がやや主体的に取り組みを企画する印象が強かった。それがきっかけで古口の乙夜塾のように地域住民が主体的に動き出す例もあるが、角川地区の場合は諸々の理由からかならずしもそうは動いていなかったようである。このことは次章で詳しく触れる。

さて、角川地区の「とざわ里地塾」では冬の野外遊びやカンジキを履いての里山観察会、わら細工体験、民話を聞く会などが行われた。前日に NGO スタッフや宮城教育大学の環境教育を学ぶ学生、取材のカメラマンなどが合流し、取り組みの一部始終を見守った。

この「とざわ里地塾」で地域の代表として N さんと共に企画に参入した E さんは地域の子供達に里山の雪遊びなどを教えられて、楽しそうに遊び回る子供達を眺めながらも、今の子供達はこうしたイベントをしないとなかなか外で遊ばないんだよな、という感想を私に漏らしていた。子供達を見ると、なるほど、楽しそうに遊んでいるのだが、肥満ぎみの子が多いことに気付かされる。



＜雪の里山で遊ぶ（とざわ里地塾）＞

あとで学校の保健の先生 K 先生に話を伺ってみたところ、角川小学校ではことにその傾向があるのだということだった¹⁰。

学校と地域が連携する中で企画したこの取り組みに地域の子ども達はほとんど参加したようである。100 名ほどの参加者があった。角川地区は約 300 世帯の農山村集落なのでこれはかなりの参加率ということになる。古口でも見られた光景だが、地域のじいちゃんばあちゃん達の生活技術や知恵がこれほどまで子ども達にとっても喜ばれ楽しく体験されるということが、角川地区でも見ることが出来た。特に「縄ない」の講習会では、参加した学校の先生、大人も子どもも簡単そうで難しく、なかなか縄になっていかないことを楽しみながら真剣に取り組んでいた。この時のインパクトはなかなか強かったらしく、この年の9月に開かれた小中学校の運動会では、はじめて祖父母達の縄ない競争が種目に入った。

～角川地区・とざわ里地塾以降の取り組み-ふるさと委員会の活動-～

学校と地域で構成される「ふるさと委員会」という組織が角川地区には存在する。これ

¹⁰子ども達も肥満ぎみであることを自覚しているようだ。夏休み前のある日、保健室に集まって、痩せるための健康食やエクササイズについて真剣に議論していた。その頃わたしも体重が増え始めていたので、その会合に参加して、彼らと同じように縄跳び毎日 200 回、一日 4 キロは歩くなどと約束したものの、結局達成できなかった。子ども達はしっかりやったようだ。夏休みのある日にも健康ダイエット食を作って試食会を開いたらしく、そのダイエットスパゲティを私も頂いた。

は地区会長や学校長や担当の先生はじめ、婦人会長、PTA、保育所関係者など、地域のあらゆる団体を巻き込んだ組織である。このふるさと委員会の代表が E さんであり、最初に出会った N さんであった。N さんは角川小中学校の PTA 会長をしていた。このふるさと委員会ととざわ里地塾の取り組みの延長線上で、地域の自然環境を利用した学校と地域の連携による 2003 年度の地域教育活動が企画された。終章で触れる里の自然環境学校の設立のため取り組みの様子に大きな変化があるため、7 月までのプログラムをここでは紹介しておきたい。

以下のようなプログラムが計画され実施された。

2 月 「とざわ里地塾」

4 月 カタクリの花・ギフチョウの観察会

5 月 ため池でのフナ釣り大会

6 月 集落最上流部の浄の滝へのヒメサユリ観察会

7 月 通学合宿ともらい湯

いずれの取り組みも地域の自然環境や地域内の人的ネットワークを利用した取り組みであり、地域住民の協力のもとで経費はほとんどゼロで実施されている。7 月の通学合宿については若干の説明を必要とするだろう。この活動は子ども達の自主性と協調性を高めることと、大人と子どもとの地域内コミュニケーションを高めるために実施された。村の社会教育課からの呼び掛けもあって、集落住民と地域の学校が企画運営したものである。3 泊 4 日のプログラムでは、子供達は地域の公民館に集団で寝泊まりし、そこから学校に通う。この期間には、親は面会してはならないことになっている。子ども達が食事を作り、計画したレクリエーションをし、お風呂は、地域の主に一人暮らしの人の家に頼んで「もらい湯」に出かける。両親にとっては大変子ども達のことが心配になるようなプログラムだったようである。しかしながら地域ぐるみで子ども達を育てるという主旨のもとで行われた。このように環境教育の取り組みと通学合宿の取り組みの共通した目的にはかならず子ども達を媒介としたコミュニティ作り、地域内コミュニケーション作りの要素が入っていることが分かるだろう。そしてこれら取り組みの土台となっているのが、地域の自然環境とそれに根ざした文化、永年に渡って作られた地域内の人的つながり、近所付き合いなのである。その点で老年世代の人たちや、そうした文化に関心と共感を抱く地域の活動家（角川地区であれば E さんや S さん）が取り組みを後押ししようとしている。

以上、戸沢村における「とざわ里地塾」を中心とした最近 2 年間にわたる環境教育活動を点描してみた。次の章では、これらの取り組みに携わり、推進する地域の人々に焦点を

当てたい。彼（女）らはどのような思いを抱き、どのようなメッセージを持ってどのように発信し、誰に対して、どのようにこれらの取り組みを推進しようとしているのだろうか？

第3章 地域の人々の諸相Ⅰ-環境教育と地域作りの取り組みを推進する人々-

本章では、前章で見たとざわ里地塾を発端とする農山村における環境教育と地域作りの一連の取り組みを進める地域の人々の声に焦点を当てる。まず、「とざわ里地塾」がどのような経緯で行われるようになったのか、最初の震源となっている村の社会教育課や学校教育の現場の声を上げたい。その後で、この取り組みを通じながら、さらなる地域での活動を進めようとしている地域の活動推進者の声を浮き彫りにしていきたい。

1、社会教育課長 T さんの話から～行政・住民の意識改革と「とざわ里地塾」～

「とざわ里地塾」は学校と地域住民の連携による取り組みだったことを前章で見てきたが、行政サイドでその仲介的役割を担ったのが村教育委員会社会教育課（中央公民館）であった。「とざわ里地塾」は地域住民で構成する青少年育成村民会議と学校と地域住民で構成する「地域の学校づくり推進協議会」がその企画・運営の中核を担っているのだが、これを行政側から支えているのが社会教育課であった。

社会教育課長 T さんは、古口地区に在住している。家は、目の前に最上川が流れる眺望のすばらしいところにある。T さんは村の行政に勤めて30年ほどになるが、その間、行政の中でもほとんど「特務」と言える部署に就いていたという。戸沢村は国際結婚関係で比較的村のバックアップが充実しているということで紹介されることが多い¹。彼もまた村の国際結婚関係の担当職員を勤めたことがあり、社会教育課長の前、2年間は最上郡広域で、国際交流・国際結婚の担当として出向していたという²。そして平成6年から社会教育課長として在任している。ながらく国際交流・国際結婚の担当職員として在任していた彼は、「農山村の封建性・家族問題とか、結局変わらねばならないのは、我々農村に住む日本人の方になるんだよな。」ということをつぶやく。その一方で、彼は今、農村のこれまで受け継がれてきた自然や文化を見直し、その中で子供達への教育を考え地域作りの取り組みを住民が主体となつてできるようバックアップしようとしているのである。そこには農村住民が本当の意味で意識的に豊かになるにはどうしたらよいのかといった複雑な思いが交錯して

¹ 誤解がないように確認しておくが、戸沢村においては、行政はあくまでバックアップであり、いわゆる行政主導の国際結婚の推進という参入の仕方ではない。行政主導による国際結婚への動きはあったことは事実のようだが、それは住民の意志によって退けられた。背景には20年にも渡る韓国を中心とするアジアの農村との農業交流の歴史とそれを担ってきた農村青年達の動きがある。くわしくは、仲野誠氏の論文2003を参照のこと。

² そういうわけで、桑山紀彦（前掲）にも彼の事が詳しく紹介されている。ちなみに、桑山氏の著書は、現地に赴くと、あまりにも人物が特性されやすい書かれ方をしておりその点でプライバシーの問題に対する配慮が欠けているのではないかという指摘を彼からも受けた。

いることはその後数えきれないほどのインタビュー・参与観察をすることになる当初から感じられた。

～最上川河畔にて-社教の取り組みと地域の学校作り推進協議会の活動～

私のインタビューの申し入れに対して、せっかくだからという T さんの好意で、古口小学校の職員の学区内視察研修に同行させてもらった。コースは最上峡を酒田方面に向けて行き、途中で「神代杉」や隣町の松山町と接している柏沢の分校跡、そして渡船の事故で殉職した教員の碑に参拝するというもので、古口小学校の新任の先生に地域を紹介するものである。私は T 課長さんの車に乗って同行した。古口小学校の先生方が到着するまで、我々は最上川の川面を眺めながら、私は中央公民館では聞けなかった、社会教育課の取り組みや里地塾に至るまでの地域の学校作り推進協議会の結成やその活動について話をした。

『とざわ里地塾』を開催できるようになるのには、9年かかったよ。社会教育の最後のとりでといわれた公民館も、この社教（社会教育課）に来てみたら、最初は討論だけの集団だった。住民で組織する推進委員会はあったが、この当時は名ばかりで年2、3回会報を出してそれでおわりというような代物だった。『公民館は社会教育の最後の砦』と言われながら、言い方は悪いかも知れないけれども、行政の中の島流しの場と化している印象があった。当時、週休二日に学校が移行し、地域に根ざし教育をこれから始めるんだ、というような方針を打ち出そうとしていながら、実際には議論だけで何も行動に移されていなかった。行動して行くための意識だってなかった。職員にもそして住民で構成する推進委員（青少年育成推進委員）にも。だからまずは意識改革から始めた。その中でいろいろな活動も行った。サマーキャンプなどもその一例と言える。また、当時、条例を改正して、なんとか集落到1人は推進委員をおけるような形にしようとした。村全体で8名だったのを25名まで増やそうと試みた。しかし予算の関係やあまり増やし過ぎると今度は深く突っ込んだ議論ができなくなるおそれがあるし、委任状をもらってそれでおわりといった人も出てくるということから、12名まで増えた段階でこれ以上は増やさないことにした。またPTAなども入れて作った。そんな中で集落の会長さんも巻き込んで地域で子供達を育てるというような方針を打ち出していこうとした。

このようにやっている内に今度は取り組みに肯定的な今の教育長が来て、さまざまな活動や取り組みを実際に行うようになってきた。地域の学校作りや各種創造事業なんかがそうだ。そのなかで地域の学校作りの取り組みの中で子供達に老人達がわら細工などを教えるようになった。教える中で老人達が子供達からパワーをもらった

んだなそしてもの作りの老人団体・乙夜塾が古口地区に結成され、週2回活動を行っている。というよりも今見ていると、毎日のように老人達が集まってやっているようだね。また、村民フォーラムを開く中で戸沢小学校のS校長先生と出会う。「現代農業」での地元学特集を見て、環境NGO里地ネットワークのTさんとのつながりがあるということを知り、村民フォーラムの講師として呼んだ。ここからTさんとの直接のつながりができた。そしていよいよ「とざわ里地塾」の取り組みへと進むことになった。そんなわけで村の校長会でこの企画が受け入れられ、古口地区の乙夜塾とも共同して最初に行うことができるようになったんだ。このように地域の人を巻き込んでやるのは容易にはできないし、一朝一夕にはできない。推進委員の意識改革やこの人ならばやれるというリーダー的な存在の地域住民に委任を出し、講習会を何回も開いたりなどして、内側から基盤を作るのにもずいぶん時間がかかった。そういった地盤の上に、あの里地塾の取り組みがあるんだ。

こんな苦労を経ながら、地盤を辛抱よく作って、今日の取り組みに繋がるまでやってきたのは、なかなかすごいことだとよく言われる。けど、私は戸沢村のエリートだ。それで村から給料をもらってるんだから、そんなことは当たり前さ。もうひとつ、角川地区であればNさんやEさんのような人たちが重要。以前までのPTA会長さんによく見られるように、子供が卒業してしまうと地域作りや子供の教育と関係なくなってしまう、といったことにならないという仕掛けも必要だ。どんなにいい企画書でも企画書だけ作ってもしょうがないからね。実行に移しながら考えていくことが大切さ。何よりも楽しく面白くやって行くことが必要だよ。楽しく面白くやって行けば、そして、そのように行動して行けば、自然と予算なり助成なりもついてくるものなんだ。古口のメダカの学校だってこうした取り組みの中で県の事業から100万円の助成が来ることになって、行うことができた。そして今年になって、毎日新聞の主催する賞もとることができてしまったんだ。だから面白く、楽しくやって行けば、このように展開して行くものなんだ。

もう一つの取り組みとして通学合宿というものがある。通学途中の家に子供達がもらい湯に行き宿泊するといった取り組みで、そのような中でコミュニケーションを活性化し地域の各世代の人と交流をしよう、特に老人達に教わろう、といった活動で、「よし、やろう」ということになった。しかし、親達は大変だ大変だという。一方で老年世代の方にとっては、なんでそんなに大変なんだという思いが強い。昔はみなもらい湯をしてきたのだから。そんなに大変なことだって思うのは変だというわけだ。それでとにかくやってみただけど、結果としてはうまい具合に行くことが出来たしよかった。そういうわけで、この取り組みを今年も行おうということ

になりそうだ。

戸沢村では教育長の肝煎りもあって、各学校に社会教育主事の視角を持った教師が配属されている。このように各学校に社会教育主事の教師をおいているというのも意図的にやっていて、そしてこのような地域の運動をすすめるための地盤としたいからなんだ。

この話からわかることは、この取り組みがあくまでも住民によるものにしたいという思いである。そのためのバックアップと慣れるような取り組みを村の教育委員会の社会教育課を中心に仕掛けているようである。そして実際に、住民が主体となる形で動きつつあるところを私自身も調査の中で見てきた。過疎の農山村において、「地域ぐるみで子どもを育てる」ということ、このようなコミュニティ作りの要素を大きな目的の一つとして環境教育活動が行われている。そして、このことは農山村における潜在能力、すなわちその自然環境やそれに根ざした生活文化、それらを担う人々の再発見・再評価、地域内コミュニケーションの活性化の必要性とつながっているのである。

次に視点を角川地区に移したい。この地区は先に紹介したように、村において最も山奥の集落で構成されており、もっとも過疎化少子化が進む地域である。急激に学校規模は小さくなり、平成12年からは小中学校併設校となっている³。まず地域の学校作りに積極的に取り組もうとしている角川小中学校、A校長先生の話を取り上げたい。

2、地元学校の校長先生の話～地域に誇りを持ってないことが子供達の甘さにつながる～

角川小中学校の校長先生には、地域の子供達と最初の直接の接点を持つ時にずいぶんお世話になった。特に学校内部をいつでも自由に見せてもらえるようにしていただいたのはありがたい。地域の子供達の様子を地域と学校の両面から見れたのは、当論文のように地域住民の教育活動を中心に上げる時、その対象となっている子供達の姿を常に思い描きながら執筆するためのよすがとなったと思う。地域住民の声を上げる前に、まず、地域の環境教育活動の取り組みに対して、学校サイドから校長先生が語ったことを紹介しておきたい。

まず、子供達の親が地域を誇りに思えないのが問題です。つまり地域に、そして自分達の生活に自信がない。子供に対して「自分の好きに生きろ」と親達が語るのをよ

³ 生徒数の変化動向については、論文末の統計資料（角川中学校生徒数の変化）を参照のこと。

く耳にするんですが、実はこれは自信のなさの表れでもあると思うんです。つまり、それはある種の無責任感でもあるのです。これは進路の時の甘さに繋がってくるものです。もちろん、進路の問題というのは、いろんな要素がからみ合っている中で起こることだから一概には言えないですが、このような要素が大きいんじゃないかと私は思っている。

親がここの地域の良さを分かっていないので、不便だけが目立つことになる。余暇の過ごし方も、休日もこの地域の自然の中に出るわけではなくて、都市に遊びに行くというパターンになってしまっている。結局、そういった教育の仕方の中で、将来ここで中心とならねばならないような担い手まで外に出るような風になってしまっているのだと思いますね。

私達学校側の職員も家庭の内部のことまでアンテナを張るようにしている。それは家庭の中のことに関心があり直接家庭を見たいのだというよりは、そのことが何より子供達のために必要だから、という視点から家庭のこと、家族の方々の意識も考えざるを得ないということなんです。そう考えて、地域の意識調査といったアンケート⁴をとってみました。そして地域集会も開きました。実はそこで外の地域出身のお母さん達なども集まって、ここでの生活や教育に対する不満をたくさん出させたかった。しかし、ああいう場ではなかなかそういったことをおっしゃってくれることはなかった・・・。

第4章で検討するが、地域住民の意識、とりわけ農山村、農家出自ではない女性達が「課題」として常に地域作りの取り組みでは浮上してくる。しかし、そうした女性達の声はなかなか聞き取ることが難しい。そういうわけで、私がお母さん方の意識や声に着目しようとしていることにこの校長先生は大変関心をもたれたようだった。「むしろ、あなたのような立場の方がお母さん方の話がきけるかも知れない、是非ともよい調査をして下さい。」と。さて、取り組みを学校サイドから推進しようとするこの校長先生は、地域作りの重要性和行動を起こすことの重要性を語る。そしてまずは学校からさまざまな刺激を地域に向けて発信していく必要性を感じているのである。このような学校側の動きに地域作りに積極的な集落の若手お父さん方も反応を示している。Nさんと共にPTAの取り組みや集落の活動を行っているHさんは、Nさんの家で他のお父さん方と共に、アンケートについて次のような感想を述べている。

⁴ このアンケートの結果を入手することができた。ここには、校長先生の分析と考察も載せられている。論文末の資料：角川小中学校実施アンケートを参照のこと。

ずいぶんつつこんだ、こんなことまで聞くのか、というアンケートだった。最初はぜんぜん回答が得られなかったようだな。両親が参加して、地域集落の声を聞こうという集会にも先生方が皆参加しているのに両親が参加したのはほんのぼつりぼつり(3, 4人)、なんだか職員会議に両親が入り込んだような体裁だった、それでもせっかく時間をとったので、ということで電話をかけて4, 5家族呼んでそれで何とか開催するという始末だった。

でも、校長先生は辛抱強く学校から何度も同じようなアンケート出してきて、これはこの校長先生は本当にやる気なんだ、と思った。やっぱり教育は制度というよりも、こうした人次第なんだという点があると思う。だから、今年も校長先生が変わることなく、昨年度の里地塾などの施策を進めていこうとしているところは大変いいことだと思っている。

この校長先生が学校側を代表してこれほどまで過疎と少子化にみまわれる地域の取り組みに肩入れするのは、僻地の学校をこれまで歴任している中で、行動に移さなければ子供達の大切な故郷がどんどん失われてしまうことを経験して来たからだ。彼が赴任した学校で今はもう存在しないものもある。その校舎の一部が記念品として校長室には飾られていた。だからこそ、この校長先生は次のように語る。

この地域は、もはや地域として成り立つための限界に来ていると考えています。だから、とにかく行動せねばどうにもならないところまで来ている。だから、とにかく行動せねばということで学校の方でも地域作りと連携できるような取り組みをやりようとしているわけです。だからこそ、先日の「とざわ里地塾」や角川地区独自で行っている「ふるさと委員会」の取り組み-今年は月に1度ずつ取り組みを持つようになっていますが-を行おうとしているんですね。このような取り組みを行うと教員が土曜日も日曜日も出てこなければ行けないので、大変負担が増してしまいます。でも私は『2, 3年は我慢してくれ、そうすれば、今度は地域が独自に動いて取り組めるようになるから。だから、それまでは我々も積極的に関わって地域が活性化するための取り組みを進めていきたいのです』と説明しているんです。

3、地元の地域活動家の思い

さて、これまで、行政、学校サイドで取り組みを進める人々の話を中心に紹介してきた。

行政・学校側が地域に接近しながら地域を活性化させていこうとする意志を持っていることが垣間見ることができたと思う。では地域内部で取り組みを担い推進していこうとしている人々はどのような考えを持っているのだろうか？千葉のシンポジウムでの出会い以来、当調査に協力をしてくれた角川地区の N さんは、まさにこの活動を進めようと熱意を持って取り組んでいる地域活動家の 1 人である。先に見た社会教育課が管轄する青少年育成推進委員のメンバーであり、角川小中学校 PTA 会長でもある。そんなわけで、「とざわ里地塾」はもとより、角川ふるさと委員会の一連の取り組みでも中核的な存在として活躍していた。彼とは、最初に私が訪れた際（2002 年 8 月）、集落を流れる川のほとりで次のようなやりとりがあった。

私が訪れる前日、彼は私のために前日、カニを採るための罠を仕掛けておいてくれた。「かかっているかいいなあ、見せてえからなあ」と言いながら、罠を引き上げた。私はカメラを構えて、獲物がかかっているか覗き込む。体長 20 センチメートルほどの大きなカニが見事に捕まっていた。「これでも昔に比べるとずいぶん体格が小さくなったんだよ」と彼は話す⁵。そして、カニをぶら下げながら、彼は今計画していることについて話してくれた。

この川には、カニも魚もたくさんいる。子供達にこの川で遊ぶようにと奨励している。既に取り決めもあって小学校の場合は保護者同伴で、中学生であれば 3 人以上であれば、川の中で遊んだり泳いだりしてもよいことになっている。水深は深いところでも 2 メートルぐらいだから危険なことではない。だからこの場所を整備したいと思っている。川床へ下りていく階段を行政では作ってくれないから、我々集落の住民で草刈などして整備しようと思っているのだ。朝仕事を 3 度ぐらいやればかなりきれいになるだろう。先日、県のほうで川の「里親」を募集するという回覧が回ってきた。2 団体に上限 25 万円援助するというのだ。それでこれを申請したところ認可が下りた。1 週間後に集落の会議があるからそのときに議案を出して実際に活動を始めたいと思っている。うまくいくかどうかわからないが、是非ともやりたい。でも地域感情が非常に難しいものだから。「みんなでやるんだ」ということにならないとなかなか難しい。今回の申請に関してもうまくことが運ぶように地域住民に対して流す情報を少し操作したんだ、大きな声ではいえないけど。とにかく是非ともこの取組みをやりたいと思っている⁶。

⁵ 地域の環境や資源を利用する知恵や技術を持つ人々は環境の変化に極めて敏感で極めて具体的に細かいところまで気がついていて、このことには驚かされる。

⁶ この計画は、先ほど環境教育の取組みに参加した際、話を聞くとどうやろうまくいったらしい。

彼は地域の自然を子供達に体験させたいと強く願っている。しかし、なかなか地域の感情がむずかしいという。私自身も調査を進めていく中で、誰か1人が突出したリーダーシップをとってこのような地域の取り組みを行うということは不可能に近いのだろうということを感じていた。ここが村の感情の難しさである。なにか事を起こそうとすると、「いいふりして」（自分だけ格好をつけてというほどの意味）⁷ といって、絶対に1人勝ちを許さない空気のようなものがある。彼が語るように、最初から地域ぐるみでみんなでやるんだ、ということにならなければ、活動が進むのは難しいであろう。それに、先に見たように、子どもたちの両親になるとなかなかこのような地域の自然環境や生活文化に根ざした活動にコミットできないということも課題となって浮上してくる⁷。二重三重の困難が存在しているのである。

しかし、Nさんはなぜここまでして、地域の自然や文化を子供達に伝えたいと思っているのだろうか？彼自身が地域を誇りに思っているし、角川が好きだから、という理由があるが、以下を見るようにそれだけではない。子供達が、「外」に出るということがたとえ自明の事であったとしても、だからこそ学んでもらいたいという思いも強いのである。

子供達に、とにかく地域の良さ、外に出た時に誇りに思えるようにしていきたい。それがおそらく外に出て困難な局面に出会った時自分を支えるものになるのではないかと思う。子供達は将来必ず外に出ていく、出て行く子が圧倒的に多い。けど、だからこそ、この地域での「原体験」が外で困難に出会った時に思い出され、その子を支えるものとなる。だからこそ、俺らは子供達に地域の自然や文化をしっかりと原体験させなければならないんだよ。

こうした思いにはNさんのサラリーマン時代の経験が影響しているようだ。Nさんは仙台にある大手デパート系列のデパートに23歳の時から18年間勤めていた。「高卒にもかかわらず昇進して、労働組合の委員長もやらせてもらったんだよ。」奥さんとはこの会社で出会ったという（奥さんは当時値段のラベル作成の仕事をしていた、サラリーマンの娘さん）。

Nさんは、この当時の労働組合での経験は、今の地域作りのための諸活動に対して示唆となっているという。この時の経験が今の地域作りや推進委員の役割を果たす際に大きな意

彼は「来月から本格的に作業を始めるよ」とうれしそうに私に語ってくれた。

⁷ 子どもたちの両親たちが育った時期は高度成長期にぴったりと一致する。このことから農村の環境運動家が指摘するように、日本全体の産業化が里の生活文化を周辺へと追いやりその継承を阻んだのだというストーリーは説得力があるように思われる。

味を持っているというのである。

Nさんは、このようにずっと会社勤めであったので、地域の農業のことなど実はあまり良く知らないのだという。田んぼの仕事もみんな人に依頼しているので、分らないのだという。「大きな声では言えないけど・・・」自分自身もまた「農村に住んでいながら、農村・農業のことをよく知らない」それが実態なのだという。しかし、その反面、農繁期の忙しさ、農繁期の作業というものがないため、時間をとって、地域作り活動に奔走できるような立場にあるのだということも言う。

会社での労働組合運動の楽しさ、面白さについて教えてくれた。デモの仕方だとか労資組合でのやりとりなど、いきいきと語った。その頃の労働組合長としての仕事は、それなりに充実していたようだ。そういえば、PTA 総会の際、Nさんは会長として挨拶をしたのだが、「新入生」というところを「新入社員」と間違えて言ってしまい、長くそのことに気がつかなかった。周囲の笑いによりやく気がついて、「すみません、労働組合が長かったものですから」と言い訳していたのを私は覚えている。不景気になって、会社が合併をくり返し、縮小して行く中で、人員整理の際、自分が直接同僚に声をかけてやめさせていかねばならないような立場になり、そのつらさを身を持って体験した。最後まで自分は会社にいなければならなかったのだが、それは委員長と言う立場であったからだった。それでもやめていった元の同僚から逆恨みの脅迫のような電話がくるのに頭を痛めた時期もあったという。このような企業勤めの人間関係の裏面の嫌らしさも味わって来た経験を持っている。

そして、7年前に（本会社のマイカルが潰れる4年前ということになるが）、ようやく会社を自らやめ、そして義理の兄が運営している角川にある製材所に勤めることになった。当初は東北地方を転々と回りながら（もちろん会社の都合でまわされるわけだが）好きな釣りをしながら、仕事をするのもいいかと思ったが、やはり角川を離れることはできない、ここで、この地の良さを見直しながら生活を組み上げたいと思ったのだ。

俺は角川がすきだ。だからこのような地域の自然や生活文化を基盤としたような子供達への教育にかかわりながら地域の良さの再発見していきたい。俺自身もギフチョウとかこの地域のほこりと言えるような貴重な自然環境や動植物がいるということにかつては無関心だった。むしろ外から来る人が知っていて、その時地域住民は下を向いて農作業をしているんだ。地元の人はその貴重さを全く知らず、外のヨソモンがわーわーいってとっていくのを地元は「なんだべや？」といて眺めている光景が見られるよ。こういう状況は悲しいよな。

だからこそ、彼は地域と地域の子供達のために自らリーダーシップをとることを厭わない。

今年は自分もPTA最後の任期になるから、少し強く出て、地元の自然を見直し、生活文化を見直し、実際に子供達とそうした杉やら動植物やらを見に行くような活動をしなければならないということを総会でも訴えてみようかと思っている。ただ単に飲み会と体育館で子供達を遊ばせているという行事ではなく、このような形での教育が必要だということを訴えかけたいんだ。俺は、PTAと推進委員会に入って活動しているから全体が見える。いろいろな取組みや地域の活性化や子どもたちへのイベントなどが行われているが、単発的に発生していてつながっていないことが問題だと思っている。俺はこうした複数の村の組織に入ってやっているからよくわかるんだ。だから、生意気のように思われるかもしれないけれども、俺のようにわかっている人間がつなげることができるようにして行く必要があると思っている。

～ふたたび地域感情の難しさ、そしてヨソモンの視点の重要性～

行政や学校に対する複雑な地域感情についても複雑な思いをNさんは抱いている。必ずしも行政・学校と地域が理想的な形で連携していると認識しているわけではないようだ。

行政で、あるいは教育委員会で、あるいは先生達で、どんなに地域が主体となってああしろ、こうしろと言っても、最後は退職金をもらって、新庄あたりの都市で悠々と暮らすんじゃないかという思いが地域住民にはある。だから彼等がどんなに立派なことを言っても、地域の人の心には中々響いてこないのだと言う。週休二日にして先生達が楽になっただけじゃないか、その時間を地域での教育活動に当てると言っても、地域がこれほど疲弊しているのに、どうしろというのか、かえって無責任じゃないか、という思いも強いよ。地域のお父さん、お母さん達はみんなほとんど共働き、そうじゃないと子どもがいる場合、やっていけないからね。それに行政や先生は土曜日は休みかもしれんけど、そういうお父さんお母さん達は必ずしも土日休みというわけではないんだ。農繁期には農作業も入って忙しくなるからね。

しかし、Nさんの地域の取り組みを進めたいという思いは変わらない。そして地域全体で動くことを望んでいる。

でもそれでも、この取り組みは進めていかねばならないと思っている。そうなった時、やっぱり地域で取り組みに反対する人が多いことには困っているよ。なにか地域のためにと想着て言い出すと反対が多いし、「またかNが変なことを言い始めた」と

いう感じになりがちなんだ。でも確かに自分達のやり方がひとりよがりで行き詰まっているところもあるから、出川さんのように地域のことを考えながら研究してくれる人や里地ネットワークのTさんのようにヨソモンの目から見た考えを取り入れたいと考えている。ということで、Tさんを角川に呼んで地元学ができればすばらしいよな。

終章で触れるが、後にこのNさんの角川でみんなで地元学を行うという願いは叶うことになる。そして、取り組みが進むにつれて集落住民が急速にまとまる中で自然環境学校が設立されることになった。このことは終章で詳しく触れたい。

さて、このようなNさんの姿勢は、同じく地域の自然を愛する人との静かなネットワークをすでに広げていた。

4、山のサブローさんとの出会い

まだ雪の残るある日の夕暮れNさんが防寒具に身を包み、長靴をはき、懐中電灯をもって現われた。「出川さん、これを着て（防寒具をもってきていた）、この傘をもって、これから山のサブローさんのところに行こう。」

どうやら、以前話していた、角川出身で東京で仕事をした後、定年で角川に戻ってきて、向かいの山で一人で山暮らしをしているサブローさんと電話が通じたらしく、私をそこに案内していこうというのだ。

車で途中までは行けるが、歩いていくことに意義があるというNさんのポリシーで、我々2人と犬（レオ）と一緒にテクテクと歩いていった。途中まではなんてことのない道だが、集落を過ぎて山道に入るとすぐ道の下は崖になっていて、雪がびっしりと降り積もり、ある箇所などは雪崩が起きている。そんなところを上っていった。夜、暗い中でとても危険だ。歩くこと1時間、ようやく山小屋に着いた。想像していたような山小屋ではなく、中はコンピュータが二台（一台はノートPC）、各種プリンタが3台、ファックス、そしてインターネットはがつながっていた。

サブローさんはごくごく普通のおじさんという感じだ。しかし、考え方に信念があり、激しく語るところがある。もともとコンピュータ関係の仕事で世界中を飛びまわっていた、室内にはそうした時期の外国の写真などもあった。コンピュータの話や技術移転の話など非常に詳しい。ここに住むようになってからの村役場との激しいやり取りなども聞かされた。また、保守的な風土についての苦言も聞いた。これほど搾取され、貶められているのに、下の集落のばあちゃんたちは、選挙のとき、それでもあの人に入れるしかないんだといて諦めている、と非難したり、また自分の生活道路を工事するから8:00から17:00

まで通るなという高飛車な通達に断固抗議したり、などそんな話を聞いていた。役場にとってはきっと厄介な人物だろうな、ということで笑いながら話をした。夜遅くまで N さん持参のカニや、赤マムシ酒（乾燥した赤マムシをバリバリちぎって日本酒にいれ、火鉢の上で温める）、くさやをつまみながらのみ、最後にはひっぱりうどんを食べた。そしてウイスキー、どぶろく（私の大好物だ）など、各種酒を、飲む。

山小屋の生活についての話をサブローさんは次のように語った。

こうしてここで全て自分で作ってやっていこうとなると、生活するということがどういうことなのか実際に理解できるよ。またぎの生活がどういうものなのかということが理解できてくるんだ。米や野菜は完全に無農薬で作っている。あの除草剤というやつは相当に身体に悪いからね。それに鶏も卵がほしいからと言うより可愛いから飼っている。餌も化学的なものは全く使っていないしね。

娘と妻は東京にいる。春になれば遊びに来るよ（実際春先、奥さんと娘さんにお会いすることになったのだが）。妻はお母さんの看病で東京を離れられないが、そうした看病がなければ、ここに来て一緒に住むことになるだろうね。後 10 年ぐらいはここでこうして生活していく自信がある。孫が生まれたから、少し大きくなったらここで引き取って山男に育てたいと思っているね。

寝たのは実に午前 1 時（！）だった。結局泊まっていくことになってしまったのである。小屋の外で深々と雪が降り積もる音だけが聞こえた。

次にサブローさんに会ったのは 4 月の雪が消えてからのことだった。サブローさんの山小屋のある地点は、角川地区でも有数のカタクリの花の群生地でしかも希少種であるギフチョウの生息地帯に位置していた。ふるさと委員会でカタクリの花とギフチョウの観察会を計画していた。また「とざわ里地塾」を取材し、環境教育の本の出版を考えている東京の出版社も訪れ、その模様を取材するということだった。

私は、早朝からサブローさんの家を訪れた。取材陣と同行して山に登る前にぜひとも単独で見に行きたいと考えていたからだ。農作業も始まっていると思うので、何かあれば勉強がてら手伝おうかと考えていたのである。サブローさんは、ちょうど朝の仕事を一段落して、次の仕事にかかるころだった。今は山刈りの仕事をしていて、これをしないと草が木のように大きくなってしまって、わらびが出なくなってしまうという事である。そういうわけで、夏までに 3 回ほどもこの作業をするという事だ。けっこう骨の折れる仕事らしい。朝の 4 時ぐらいからこの作業をやっているという。そしてこれから今度は冬の間小

屋の中に閉じ込めていた鶏（チャボ）を外に出すという仕事をするという事だった。その前に、私はサブローさんに連れられて、カタゴの花をみてまわった。早く雪が消えたところは確かに一面カタゴの花に覆われていた。残念ながらこの日は空が曇っていたため、花びらは閉じていた。カタゴの花は太陽が出ている時、花びらを広げ、その時の花の様子がきれいだと、そんな事を話しながら、サブローさんは私を案内してくれた。またギフチョウの生態についても話してくれた。ギフチョウはコシノカンアオイ、ヒメギフチョウはウスバサイシンの葉の裏に卵を生むのだという。

その後、私達は一緒に鶏出しをやった。いやもう、大変な作業である。重たいし、臭いし、鶏は逃げるし。作業をしながらサブローさんもこういうことは遊び心がなければ馬鹿らしくてできないよ、と苦笑した。

だから、日本の農家もみんな動物を飼うのをやめてしまった。手間もかかるし、動物というのは、世話が焼ける、あんまり家を留守にはできなくなってしまうしね。だけど自分は鶏がけっこう可愛いんだ。特にこれから何羽か雛がかえり、そのひよこがまた格別可愛いなんだよ。

小屋作りを手伝ってみたが、これをもし一人でやるとしたらかなり大変だという印象だった。しかし、雪に閉ざされ、半年間も倉庫の中に閉じ込めていた鶏は嬉しそうだった外に連れ出され、しかも雨が途中からふってきたのを新鮮な趣で浴びていた。屋根のあるところにはいらず、わざと雨の当たるところに9羽すべて出て行ってしまうのである。それを眺めながら、サブローさんは「雨が新鮮で珍しいんだよ」という鶏の心境を代弁していた。

作業は10時半頃に終わった。この後はビールやウイスキーを飲みながら、いつものようにストーブに当たりながら語り合う事になった。サブローさんの幼少時代の話聞いた。サブローさんは満州（満州国ヒンコウショウ六道河）からの引揚者だという。満州国では全部で100万平方メートルの農地がある。当時の日本の耕作地が37万平方メートルだから大変な広さだ。そしてそれがまた肥沃な耕地なのだという。

当時の東北の農民が、自分の親達も含めて、なぜにあれほど満州に渡ろうとしたのか、というのはよくわかる。当時、本当におしんの世界を引きずっていた時代だった。自分の家族も10人家族で、みな満州国にいった。当時飯米農家といって、これは食えない東北の貧しい農家のことだったんだ。自分の家もそれに違わない飯米農家だったよ。それが、向こうに行って、いっきに300町歩の農家になれるのだというのだから、それに飛びついて行こうとするのは当然のこととして理解できるものだ。

満州から引き揚げてきて小学校5年の時に角川に戻って来た。この当時の水田の作り方というのは、田んぼに穴をあけ、その穴の中に馬の糞を雪のある内にそりに積んで入れておくのだ。これが唯一の肥料になったのだね。こういった肥料だから、当時の水田にはドジョウがたくさんいたよ。今もまた農薬も強いものを使わなくなったから、ドジョウが少し出てくるようになったが、よく見ると奇形の物がけっこういるよな。やはり除草剤というのが相当よくないようだな。けど一方で除草剤無しで、人間でやろうとすると3回も草取りの作業（田んぼの中にはいつて）やらなければならないからね。これは本当に骨の折れる作業なのだ。私もやっているが、腰は痛くなるしもう大変だよ。そういうわけで、一回だけしかできず、そのため収量は減るが、どうせ、自分ぐらいしか食べないのでそれはそれでいいというように思っているのだが。まあだから日本で除草剤を使わないようにすると日本の農業は成り立たなくなるっていうものね。

角川では10歳から15歳まで過ごしたんだけど、その体験が後の生き方に非常に大きなものを与えていると思うし、今こうしてふるさとに戻ってきて、こうした生活を送っているのも、魚が故郷の水を求めて河に戻ってくるようなものではないかと、自分でも思っている。他に住む場所はたくさんあったし、アメリカの西海岸の友人のところなど、1ヶ月ほども行って试试看て、いいなあ、とも思ったことがあったけど、結局この角川に落ち着く事になった。それはやはり10歳から15歳の頃の「原体験」に引き寄せられたところがあるんじゃないかなと思っている。

そのようなサブローさんは角川地区に住む住民の環境意識の低さに相当怒っている。また、無計画的（とサブローさんは感じている）なダム工事や地域の人ゴミのポイ捨てなど、本当にひどいものだという事だ、と憤慨する。

環境破壊、とりわけ地域の人ゴミを山に捨てたり川に捨てたり、平気にするんだよ。山に行ってみよ、本当にゴミだらけだよ。だから、そういったゴミ捨ての問題、環境問題に配慮できる子供を育てるような教育をするべきなんだ。自分がここに住む前は本当にひどいものだった。集落の人は自分の浄水場のところにまでゴミをどんどん捨ててしまうし、川なんかにもわざわざ運んできて物をどんどん捨てていく。すぐ近くにゴミ置き場があるにもかかわらずね。山に登ってくるなあ、と思ったらゴミを捨てにきたんだと、堂々と答える始末なんだから。これには、本当に自分でも強く抗議したよ。そして最近になってようやく捨てないようになった。捨てたところを年に何回かの清掃作業で、きれいにするというのだから、ばかばかしいことこのうえな

いじゃないか。だけどそんなことを私はそんなことをはっきりと言うし、このような暮らしをしているから、相当変わった人間だと思われているだろうね。

～ふるさと委員会による里山観察会（カタクリの花・ギフチョウ観察会）～

さて、サブローさんの管理している山で N さんと学校が中心となってカタクリの花・ギフチョウの観察会が企画され実施された。こうした野外での取り組みは地域の子供達は大変喜ぶ。サブローさんも子供達と山を歩きながら熱心に説明していた。当日は50人ほどの参加者があったので、いつもは静かな山が急に賑やかになった。このように、いつもは見のがされている地域が見直される



＜山小屋周辺はカタクリの花の群生地＞

のは嬉しいものなのである。今回は東京からも取材が入っていたので、事前の準備も大変だったようだが、それはそれでサブローさんにとっては嬉しいものなのである。「校長先生からの電話がたくさんあって大変だったよ。やれカタゴの花（※カタクリの花のこと、方言）の成長はどんな様子だとか、ギフチョウは出そうかだとか。自分の方では取材を受け入れるだけの責任も持てないし、かたごの花がちゃんと咲き乱れるかどうかなんて、自然に聞いてみなければわからない。それに自分も山の仕事で忙しい。だから、校長先生には自分で見にくれはどうですか、ということをやったら、本当に山に登って見に来たよ」と嬉しそうに話していた。



＜子供達と里山を散策するサブローさん＞

～観察会の後-再び山小屋にて-～

山小屋のサブローさんと N さんの話から、今回のようなイベントでも難しい側面をうかがわれた。今回のギフチョウ観察会では、カタクリの花とギフチョウに親しみ、観察するということが主眼だったということ、そして地域の自然環境やその良さや価値を見直そうということが主眼だったわけだった。しかし S 校長先生が虫取り網を持っていることに抗議をして、説明しても頑として聞かない地域住民がいたということだった。それはサブローさんの管理する山の地権者の一人なのだという。また、子供たちがカタクリの花を踏みつけて自分の山に入ってくるのを好まないというのだ。

この夜は、サブローさんと夜まで飲むこととなった。N さんは途中でこっそりかえってし

まった。そして取り残された私は、結局、またもや宿泊することになってしまった。サブローさんは「このようなにぎやかなイベントの後、急に自分ひとりだけになってすごすのは、やはりさびしいものなのだからな」という。

5、地権者 T さんの語り～守りたい地域の自然環境～

話は、この里山観察会が開かれた時期より大分、後になる。終章で触れる自然環境学校が設立された後の話である。例の観察会に反対的な身振りを見せていた地権者の1人 T さんが、地域の子供達に対する環境教育活動を進める自然環境学校に参入してきたのである。彼の話は、地域の環境教育の取り組みに対して示唆的だった。彼は単に自分の山に人が入ってくることが嫌だったのではない。自然を大切にしようという思いが強いがために、人がむやみに入っては行けない領域があるのだということを自覚していたからなのだった。

まず、子供達に自然を保全するというのがどういうことなのか、しっかり教える必要があるよ。私は、いろんな山に入っているけど、入りやすく林道を切ったり、必要かどうか分からないダムのために美しいブナ林が切られたりしている現場を見てきた。そして、そのように人が入りやすくなると、今度は貴重な植物の乱獲が始まる。ゴミも無造作に捨てられる。そんなところを見てきたよ。この間も、山の写真を撮ろうと思って行ったら、車が途中で泥にぬかって立ち往生していた。県外ナンバーだったな。その人は、警戒して私を見ていた。でも、車を出すのを手伝ってくれて言ってきた。けど、私はまず、暗くなる前に写真を撮りたいから後で来るので、と言いついて、もう少し奥までいったよ。そしたら、水芭蕉が一面抜かれて散乱していた。『あ、あの人がやったんだな、だから警戒していたんだな』とすぐ思った。私は、懲らしめてやろうと思って、回り道をして、彼らと会わないようにして帰ってきたよ。そんなような現場、よく見かけるよ。

地域の自然を見直す、体験することに対して、T さん本当はその重要性を感じながらも、警戒せざるを得ないことがこれでもよくわかる。しかし、彼は今、終章で触れる新たに地域に設立された自然環境学校に来て子供達に地域の自然の事を様々教える取り組みに参入している。

6、地域の活動に取り組む地域の女性たちの動きと思い

角川地区は年輩のおばさん達の活動も盛んである。地域行事ではおばさん方が必ずといっていいほど参画している。彼女らは、生まれ育ちも角川地区の方が多い。勤め仕事を経験したことは余りなく、ずっと角川の地域圏の中で生活してきた。したがって、さまざまな集落の年中行事や、土地に根ざした食文化の知恵技術に熟知している。私は簡単な食文化調査を50人ほどのおばさん達の協力の下で実施したが、その結果、地域の食文化がよく分かるのはもとより、地域の農業のあり方、里山や川の自然環境が浮き彫りになってくるのを認識した。これが若手のお母さん達になると、その食文化のことを聞いても、もはや地域の自然や農業のことは全く見えてこない。店から買ってくる食文化となってしまうからである。

本章最後に当たる本節では、視点を少し変え、地域に根ざして暮らしてきた女性の声、とりわけ子供達に対するまなざしを取り上げてみたい。このことは次章の子供達の親世代の女性達との著しい世代間ギャップを浮き彫りにすることにつながるだろう。そして、これまで取り上げてきた地域の環境教育活動によって、なぜ若手女性達が意識的・物理的両面において周辺化されがちなのか、見えてくるのではないかと考えられるのである。

さて、この女性Dさん(73歳)は、2章で取り上げたとざわ里地塾や、角川地区でのふるさと委員会を中心とする取り組みにたびたび地域のおばさん方を誘って参画してきている。彼女は長く地域の婦人会長を歴任し、女性の立場から地域作りに取り組んできた人であった。私が角川地区に調査に入って初期の頃、この女性のほうから地域のことをいろいろと紹介すると声をかけてきた。この女性は私の住み込んだ家の隣に住んでいたので、何度も訪ねてお話を伺うことが出来た。インタビュー調査の初動段階では地域の自然やそれに根ざした食の話が主であったが⁸、環境教育の取り組みと相まって、自分の子ども時代の地域の子供達の話と今の子供達の話が語られる。いくつか重要な点を指摘しながら、数度にわたるインタビューでのやり取りを本人の了承を得て、以下に掲載しながら検討してみたい。

筆者：この間、お話を聞く中で、聞きそびれてしまったところがありました。子育てについて、話を聞いておかなければならなかったんですが、地域の自然や食文化の話があまりに面白くて、この地域の子育てのことを聞くのを全く忘れてしまっていました。それで、今日は、おばさんの子育て体験みたいなものを聞かせていただければと思います。この間、角川ふるさと塾がありましたが、今そのような自然を使った昔の遊びなどを地域で教えようとしていますよね。しかし、昔はそんなことしなく

⁸ 薪ストーブに当たりながらゆっくりとしたペースでのインタビューだった。いろいろと郷土料理を出してくれるので、それを味わいながらの楽しくおいしい調査となった。この初期の調査の間に私は一気に体重が4kg増えた。

でも子供たちはやっていたということを聞いています。どうなのでしょう？

Dさん：あの、目とか身体で体験しているんじゃないかな、おせる（※教える）わけでもないからさあ。やっぱり、私らは小さい時というと、母親と父親とばあちゃんがいる完全な家族で育ったっけ（※育ったんだよ）。みんな物心ついたときから、誰それ、あそこを掃いてこい、とか、流し行って水持って来いとか、みんな子供達は使われたので、そんなの当たり前だと思っていた。学校さ出るようになって、朝仕事して、そして学校さ行くというのが当たり前だと思ってきたもんな。家でたいていのことはしたな。

それで、そういう中で自然と覚えるよ。自分で仕事やったりしてよ。大人の人たちは必ず縄ないしたり、わらじ作りしたり、そんなことするもんだけ（※だから）、昔の家も床を拭かせられるんだっけな。小さい時、物心ついた時にはたいていのことはした。

学校出て、夏場だったら、ほれ、父親は馬の草刈、一緒に馬に乗せてもらってよ、その草刈りをしている内に、ワラビだとか、スカンコだとか、山菜取りだけね、そんなのを採って家に帰ってきてご飯食べて、そして学校に行った。秋になると栗拾いとか毎日、父親の馬の上さ乗せられて、そしてやったという覚えあるな。たいてい学校行く前に身体動かして、そしていろんなことを覚えたような気がする。

筆者：では、草花遊びとか、山の資源というのもそういう生活の中で覚えていったということですか？

Dさん：んだな。父親もアケビの蔓なんかとってきて、籠作ったけよ。それ見ていて、それで自分でも作れるようになった。何でも親のすること見ていたという感じ。俺のおばあさんも昔語りをしたり、繭から糸とって織物なんかした。養蚕するからって、桑を採って来たとか、いっぱい仕事あった。そういうような感じで地域のことをいっぱい覚えてきたような感じだな。

こうした話の中で分かるのは、農山村地域のおばさん方が身につけている高度な里の文化、生活技術といったものが、昔の地域・家庭生活の日常の中で自然と身につけて来たものだということである。逆にいうと、現代ではこうした地域の自然や農業と日常生活との関係が薄れているため、子供達やその親達には伝わっていないということが考えられる。さらにインタビューを続けてみよう。

筆者：子供同士で教えあうということは、どうでしたか？

Dさん：子供同士で教えあうというのは、遊び歩くときな。遊び歩くときに、今みてえに

買ったものという遊び道具なかっただけ（※から）、女の人たちだったらたいい「おひなごと」といって人形作ってよ、いっぱいこうお父さんお母さんという人形を作って、それさ着物縫った。まだ小さくて縫えねえ子どものうちはおっきい子どもが作って、じゅんぐりに（※順番に）してそうして遊んできたな。男の子たちだったらまずコマまわす（※コマ回し）とか、めんこつきとかって、遊びしているみてえだったけど。女の子たちはたいい鞠とかお手玉とかこのお雛ごと、人形作って遊ぶこと、そういった遊びをしているんだったな。

筆者：それが、今のお母さん達の世代ではどうでした？おばさん達はどのように今のお母さん達を育てたんですか？

Dさん：私ら子供の時だと、自分ら欲しいといったもの、欲しかったもの買い与えてもらえねかったさけ（※から）、どうしてもそれが悪かったと思う。だんだん30年代ぐらいから、少し生活の状況が良くなってきたんだ。ここさ嫁に来てから。なんか自分の子供達にも買い与えたような感じするな。今の子供たちとは違う簡単なものだけどな、立派なもの（私のコンピュータを指して）こげなのはねかったども（※こんなものはなかったけれども）。そして、うん、今こういうようなことして育てて子供達の親になっているわけだけど。遊び物もだんだん贅沢になってきたけれども。30年代ぐらいから、少しぐらい自分の子どもに物を預けるようになってしまったな。

筆者：手伝いというのは、おばさんの次の代の人たちはしましたか。

Dさん：一人で山に行ってワラビをとって来て売るということはしなかったと思う。おらだ（※自分達）の時代は山さ行って採ってきて、それを売って、帳面買ったり鉛筆買ったりそういうようなことしたよ。

それこさ、金持ちの家では何もしなくても買ってくれたけど、おらだは貧乏人の家で育ったっけ、自分のものは自分で手に入れるようにした。そういうようなことはもう30年代ぐらいにはないよな。

あとはれ、子どもさはおばあちゃんからもらって、お母さんなんかはお金なんて持っていなかった。舅さんがお金を持つことになっていたから、ばあちゃんからもらったりしていた。今の子供の育て方は、親が育てるという感じだが、おらたちの時には、姑さんが育てるという感じだったよな。

筆者：今だと生みのお母さん方が中心になって子育てするような感じですけどね。

Dさん：昔の嫁なんか働けば「いい嫁だ、いい嫁だ」と褒められたんだ。そして姑さんが子供たちの面倒をみる。お金なんかも貰って。「うちの姑さん、またかあ」なんて言わなかったさけ。

筆者：おばさんの子供ぐらいの年代からはちょっとすでに変わって来ているんですね。

Dさん：うん、すでに変わって来てるな。だけ（※だから）、子供たちさ、ちっとわがまま
　　というか、そんな感じになっている。学校だとかも、高校とか、おらだの時は、女
　　学校さ行くというと、女子がそんなところ行く必要ね、金ねえからそんなところさ
　　行かされねえ、というそういうような思いがあったな。少なくともおらの子供の時
　　分は。自分の子供にはそんなことなくって高校さ行かせたけれどもよ。あのあたり
　　からそんな感じだったが。

　　このおばさんには4人の子息がいる。息子さんが2人、娘さんが2人である。そのうち
　　息子さんが17歳の時に交通事故で亡くなっている。次女は同じ集落（100m以内！）に嫁
　　いでおり、現在中学3年生の娘と小学5年生の息子（つまりこのおばさんの孫）がいる。
　　だから、近所で自分の娘の子どもを見かけることができる環境にある。

筆者：今の、小学生とか中学生とかは当たり前のことではあるけど、おばさん達の頃とは
　　全く違う感じですね。ちょうどおばさんのお孫さんぐらいの子どもということにな
　　るんだと思います。山に入って遊ぶこともないし。

Dさん：そうです。その家（同じ集落の娘さんの嫁ぎ先）にいと、やっぱり、まだこ
　　こさ（おばさんの息子さんにはまだ子どもがいらないので）孫さいねえだけな、すぐ
　　家にここさ子供やったけど、割合しつけてくれるみたいで、わりあい素直だな。そ
　　してちっちゃい時からそこさ（娘の嫁ぎ先）行って見てきたけれども、まあ、俺の
　　子供ではねはー（※俺の子供ではないからな）ということで口出しもしないけれど
　　もな、けど見ているんだけど。虫歯もねくてな。ウーロン茶とかそういうよ
　　うなの飲ませてよ、それが子供たちみな素直に聞くんだよな。一番大きな子供も虫
　　歯ねえと思うぜ。割合素直だよな。そんでもきかねえときはきかねえど、まるでほ
　　の、まだじいちゃんとかばあちゃんとか叱ってもなあ、きかねえ時はある。

　　会社勤めをする両親が家庭経営の実権を握るように社会状況が変化する中で、子育てに
　　指導的な形で祖父母が参入しづらい実態となっていることが伺える。そのことが地域の子
　　供達と祖父母の関係に微妙な影響を与えている。それでも、子供達に祖父母世代もきちん
　　と関わって子育てしなければならないという思いは残っている。

筆者：けれども、昔の流儀だと子供の教育はじいちゃんばあちゃんだったわけですから。
　　でも今そんなことやってらやっぱり大変ですか。

Dさん：この辺ではじいちゃんとかが言うことを聞かねばならねとおせている（※教えて

いる) もんだから、割と素直に育っているようだな。そしてまた子どもが学校
 さから帰って来るつと、家は空けておかんねということがあって、しかもおらの
 娘は看護婦しているもんださけ、夜勤とかあるもんだけ、一人では子供のことずつ
 と見らんねべ。そうすると、おばあちゃんなんか、ちゃっこいうちから (※小さい
 時から)、夜勤とか、その家のおばあちゃんが見ているみたいだ。

勤め仕事で忙しい子どもの親達との間で、祖父母もさまざま遠慮をしながら、子育てに
 参入していこうという面が伺える。そして、次に見るように子供達のおやつをめぐってし
 つけと食に関するきちんとした考えも伺える。

D さん：うん、おやつとか、ラーメンとか、たいてい子供は、ラーメンとかなんとかって
 言っているし、またせんべいとか言っているけど。おれも言う時あるんだけど、ラ
 ーメンとかだとあまり身体さよくねえから、握り飯でも握ってみろと、俺言う時あ
 ったんだ。ちゃっこく (※小さく) 握り飯作って、焼いてそして何かにくるんでお
 くとかよ。くつついて遊び歩いている子供さ、いてんべ (※いるよな)。そういうよう
 な子さ、「ほら、これ食え」ってこさえて (※作って) おく。そうすると、子供たち
 も喜んで食うてんだよ、今でも。ちゃっこいうち (※小さいうち) からこういうよ
 うなことしているみてえだ。でもあのおばあさん (娘さんの嫁ぎ先のおばあちゃん)
 言うには、そんなことしねはね、食わねだけ、おれの家さ来ても、あんなもん食う
 もんではねえ、ということもあるみてえだ、おれとこ来るとみんな食うというん
 だ。子供がちゃっこいうちから、しつけだといって食わせているみてえだな。

しかし、今のお母さん達が勤め仕事をするようになって状況が変わって来ていることを
 彼女は指摘する。

D さん：ただ、ここの集落でも、お母さんたちがみんな勤めているべ。そうすると、金を
 置いていくみたい。お金を置いていって、その金で子供達は店に行っておやつで買
 って食ってるみたい。そのようなことあまり良くねと思って、うちでもウーロン茶
 とかアイスとか、冷蔵庫に入れてそれをきちんと食べろよと。ちゃっこいうちから
 そういうようなことしていたから、今でもそのように食うというよ。

同じようなおばあちゃんいたって、そんなことしなければ、食わね一つんだよ
 な。そういうようなことだけ、やっぱり常にこうしてしているもんださけ、グレル
 ということなく割合素直に育っているんだな一て、俺は見ているんだ。

おばあちゃん達の中には、作っても子供たちが食わない、という人たちもいるけれども、それはそのおばあちゃんがきちんと作って、子供たちに与えていないからだろう、だから食べないんだ、ちゃんとしていれば子供たちは食べるはずだ、という。そのためには、ばあちゃん達がそのようなことを自信を持ってできるような環境が必要だと考えられる。このおばさんが言うように子供達は出来合いの物や買ってくるものではなくて、きちんと作られたばあちゃん達のおやつは喜んで食べるという。

Dさん：おらの子どもが中学生の頃は家の周辺は除雪しなくて、スキー乗りするような遊び場だったんだ。そうすると、俺まだここでちゃっこい子ども来るといって、残ったご飯、こう焼いてよ、「おまえら腹へってねえか」と叫ぶんだ。「腹へっている人、ここさおにぎりあるんだ」といって、みんな寄って来るのよ。ほだかなって
いって、ちゃっこいのに、ちゃっこいのをくわせると、腹へっているんでうめな。
で食うのよ。それ見て、俺も面白かったな。食ってもらえると。いらねえと言われるとだめだけれども。面白かったんだ、やだって言わねもん。

こうしたばあちゃん達と子供達とのコミュニケーションが、ばあちゃん達が地域の子供達への一連の取り組みに参入するきっかけとなっている。それらの行動は、自分達が生活している地域における子供達との日常の交流によって動機づけられているのである。

Dさん：こういうことしていると、みんな子供たちもなつく。この近くの子だけでなく少し遠い集落の子たちもよ、俺のこと、「あつばあちゃん」って。「あつ（※あっちの）ばあちゃん」で何のことかっていうと、ここでは向こうのばあちゃんとかあっちのばあちゃんて言うんだ。自分の家のばあちゃんのこと「ばあさん、ばあさん」て言うし、あっちのばあちゃんは「あつばあちゃん」て言うんだ。おれも最初何のことかと思っていたんだが、そういう意味で子供達は話していて、おれのこと「あつばあちゃん」ていうんだ。ここら近所を歩いたって、「あつばあちゃん、あつばあちゃん」て子どもらは叫ぶのよ。

幼稚園の子供達が小学校さあがった時、その時ちょうど婦人会の会長していたので、入学式に参加していたんだけど、そのとき「あつばあちゃん、あつばあちゃん」って、みんな覚えているんだ。幼稚園さ来た人たちみんな覚えているんだ。「あつばあちゃんまた来たぞって言うてくるんだ。」こういうやりとりがまたおらにとっても面白いし、嬉しかったんだな。

このような子供達とのやり取りは今の若手のお母さん方では難しくなっているのだ。今勤め仕事になっている。そのことを D さんも指摘する。だからこそ、家に祖父母がいることが、子育てにとっても重要性を帯びる。

D さん：勤め仕事にはみんな行っているんじゃないかなあ。子供が学校に行っている人たちはみんな仕事もってるな。おばあちゃんがいる子達は、さまざましてもらえるからいいけど、冬なんかおばあちゃんのいない子なんかかわいそうだよなや。

だけ、ここの隣の家とかも、おばあちゃんいたので、子供たち帰って来るとただいまと言って薪ストーブに一緒にあたれるべ。向こうの家とか勤めに行っている子供なんか、「おめえらさ、おばあちゃんいて、暖かいところ帰ってこれて、いいなやあ」なんて言うんだと。それで、「電気ごたつあつべや」と言うんだけど、「それでもいいなや」と子供たちは言うのよ。母ちゃんたちも、そこんところは、やっぱりおばあちゃん達いたほうが得だって言うのよ。なんでかという、会社の旅行だとか、研修だとかあっても、おばあちゃんたちいれば、安心して子供預けて行けるけど、いないときにはどうするべ。子供たちさねや、頼めねえし、どこか施設さ近くにあればいいけれども、ここらはねえから、おばあちゃんがいるところは得だわ、といって、聞かせているんだ。今のお母さんなると人たちも。

若手のお母さん方も、実際には祖父母を頼りにしているんだ、という自覚がおばさん方にもある。しかし、もっと若手のお母さん方も地域にいて子供達に関わる必要性を感じている。しかし、地域内での働き（農業など）では、子育て資金が十分に得られない。このことが若手のお母さん方を朝から晩まで、そして休日まで地域を不在にする要因となっている。そういった生活様式に対して、しょうがないという気持ちを持ちながらも、しかしそのような現代の生活スタイルに納得しきれない思いも見隠れする。

D さん：農家では今は暮らせられねえわ。少しでもいい、日雇いでもいいからと言って、働いている人たちが、よおけだな。ちゃんとした職持っている人たちだば、例えば、役場だとか郵便局だとかだったらいいけれども、普通の一般のお父さんやお母さんたちは不安定な仕事でみんないそがしく勤めているな。それだけ、金、金、金と言うようになったんだな。

この薪ストーブの薪だって、時間さえあれば、その辺に行って取ってきて、乾かしておけばいいんだけど、その時間がないっていうんだから、買って焚いている人

もいるんだべ。ほんて（※本当に）、みんな忙しい生活になった。

このような今の生活スタイルに対する疑問を彼女は持っている。それが学校と地域が連携して地域の自然や文化に根ざした環境教育の取り組みに参入する動機付けとなっている。そして、学校でというよりは地域ぐるみで子どもを育てたい、そしてそんなことを受け入れることができるような子どもになってもらいたいと考えているのである。

筆者：学校のほうでも、この間の「ふるさと塾」なんかそうですが、学校内だけでなく、校外の地域でいろんな、地域での自然環境だとか文化だとか教えて行くのが大切なんだということを言っていますよね。

Dさん：学校の先生方が、これやれというよりも、地域の人たちがよ、こういう（地域に根ざした遊びや暮らしのあり方という）のがあるって言って、素直に聞くような子供になってもらいたいような気がするな。

本章では、地域の環境教育を進めようとする人々の声を中心に上げて来た。これらの取り組みは、行政・学校・地域が連動しながら、地域ぐるみで子供達を育てていこうとするものであった。その基盤となっているのは、地域の自然環境や生活文化を見直すということであった。そしてそれは地域住民が潜在的にもっている能力を再発見し、地域内のコミュニケーションを活性化させる作用を持っていた。そして、これらの取り組みを進める人々を動機付けているものは、彼らが地域の自然環境や生活文化に対して抱く思いであり、それはまた、現代主流となっている生活スタイルに対する疑義を伴うものであった。すなわち現代主流の都市的なライフスタイル全般とは別の価値付けを持った農山村の文化運動、そしてそれに根ざしたコミュニティ形成運動の色彩を呈していると言える。

しかしながら、これら地域の環境教育活動に関わる地域住民はいずれもその地域に根ざしてこれまで暮して来た人々であった。彼らにとって地域の自然や文化が評価されるのは自明のことであったとも言える。あるいは現代の社会経済体制の中で周辺化された農山村の彼らにとって、これらの取り組みは彼らを勇気づけるものでもあった。なぜなら、今の彼らを育てたものがこれら農山村の自然や文化であったからである。そして彼らは今もなお少なからず地域の自然や文化に日常的に接して来た、あるいは接しようとして来た人々であった。

しかし現代農山村には外部から参入し、必ずしも地域の自然や文化を担っていない人々もいる。特に若手のお母さん達はその代表であると言えるだろう。彼女らと老年世代の女性

達とではかなりの世代間ギャップが存在することが考えられる。前節のDさんの語りではたびたび、これら若手お母さん方の生活スタイルに対する疑義が伺える。確かに、地域における環境教育の取り組みの中では、若手のお母さん方の姿を見つけることは難しかった。

次章では現在の地域の経済生活を支えている若手世代、とりわけ若い世代の女性達⁹に焦点を当て、地域における環境教育を中核とした取り組みに対する意識を浮き彫りにしながら、地域の日常とこれまで紹介して来た環境教育の取り組みとがどういった関係にあるのかを、彼女らの意識を浮き彫りしながら考察する。

⁹ ここでは、地域環境教育活動の直接の対象となっている小中学生の子供を持つ女性（30代～40代）を想定している。

第4章 地域の人々の諸相Ⅱ-日常生活と住民の意識～若手世代の女性達を中心にして～

本章では、地域の若手の住民の声に焦点を当てたい。とりわけ、これら農山村の環境教育活動に主役として参入することが少ない地域出自ではない女性達の声を取り上げる。これまで紹介して来た農山村の自然や生活文化を土台とした環境教育活動は彼女達の目にはどのように映っているのだろうか？そもそも過疎化・少子化にある現代の農山村で子育てをすることをどのように認識しているのだろうか？

まず、「とざわ里地塾」の取り組みに対する若手お母さん方の代表的な声を浮き彫りにしてみたい。しかし、調査の初動段階から、こうした若手の女性に対する調査がいかに困難であるかが分かって来た。若手女性に対するインタビュー調査に対して、それは家の中では決してできない、と彼女たちは言う。なぜなら家族の目があるからだ。そこで、本章におけるインタビュー調査はただ一つの例外を除いて地区の公民館とか私の家に女性達が集まった時、それも少人数で集まった時に行われたものである。

1、調査の難しさ～世代間ギャップと聞こえにくい若手女性達の声～

小学生と中学生の子どもを持つ40代の女性2人（Aさん・小学生と中学生の子ども2人を持つ、Bさん・小学校から高校生まで3人の子どもを持つ）からは、インタビューの最初からこのような話を聞くのがいかに困難なものなのかということをお教えされた。

Aさん：「子育てについての問題をお母さん達から聞こうというのなら、それは相当難しいよ。子育てについてはなかなか話せないようなことなんだ。」

Bさん：「もし教育に関して舅たちと少しでも同じような意見を持っているのだったら良いけれども、全く違うのだから、けんかになるだけ、話すことなどはできないんだ。ばあちゃんたちと教育方針違うから、あえて話せないのだ。同居していればなおのこと、話せないことだ。だって、同じ家の中で生活しているのだから。それに教育のこと、子育てのことなどはすぐに話せるようなことでもないし、特に人がいる中で（これはインタビューアである私のみならず、集落の他の人がいるような中で）本音を言えるようなものでもないのよ。」

こうした、女性達の声を目撃しようとする「耳」は、世代間ギャップの存在する家庭内だけの問題ではない、実は、女性達内部に存在している。地域の一連の環境教育の取り組みに深く参入しているある住民（男性）のお嫁さんCさん（10代の娘さん2人を持つ）は、

私にこっそりと教えてくれた。

以下は、「他の人には私が言っていたと言わないでね」と注意をしたうえで話してくれたものである。

Cさん：ここでは、プライベートなこと、プライバシーを保つことがすごく難しいのよ。どうしてそんなに人のことに興味があるのだろう、というぐらい他人の話、花嫁の人物評などをうわさする。何がそんなに楽しいのだろう、というぐらいそんな話題をいつでも持ち出して話し込むの。それも地域の女性たち、おばさんたちがそういった話を好んです。だから、家のこと、個人的なことまでみんな分かってしまうのよ。それにいろいろな付き合いのしがらみもある。うちなんか、周りがみんな親戚よ。すごくわずらわしいし、プライバシーが保てない。自分の自由にできない。まるで「牢屋」に入れられているかのようにがっちりと周りを囲まれてしまっているという感じがあるの。

お母さん方が集まって話ができる御観音講¹でもこんなような話ができない。集まっている花嫁から、その舅へ話が漏れて、結局自分の家族や集落中の人に話がいきわたってしまうから。だから、御観音講では気晴らしの軽い話をし、深いところまで入らないように配慮しているのよ。

この御観音講の集まりに、私も何度か参加した。夜、地域の公民館に集落の女性達が集まり、回り番で自分の手料理を持ち寄り、懇親を深める、和気あいあいとした場のように思われた。地域で生まれ育った女性（40代、中学生と高校生の子どもを持つ）は、次のように語る。「御観音講は仲間作りの要素が大きい。また、コミュニケーションの場でもある。子供の話やだんなの悪口など、まあストレスの発散の場という面もあるし」。小さい時からこうした集まりを見て来たこの女性の感じ方は肯定的なものである。だが、注意して御観音講で交わされる会話に耳を傾けると、話が深いところに入り込みそうになるとすぐに話題転換をしてしまう。すごく話題が多くてせわしない会話のような印象は確かに受けた。家族内での目だけではなく、回りの目、特に女性達内部での目が存在しており、外部から

¹ もとは、出産の無事を祈る集落の若手女性達が御詠歌をあげる集落行事。角川地区では古くから行われているようである。現在は集落の女性達が月に1度集まって交流をする場となっている。角川地区では集落ごと世代ごとに1～3のグループがあり、女性達の重要なコミュニケーションの場となっている。

来る女性達にとっては大変気になることなのである。このような思いは特に海外出身のお嫁さんは強く抱いているようだ。Eさん（来日7年目）は、次のように教えてくれた。

Eさん：家族関係や地域での人間関係の難しさや抵抗感といったものも確かにあることはあるけど……。だけど、旦那もお母さんもやさしい人だからそんなに気にしてはいない。旦那も他の田舎の男性よりは理解があるし話せる人よ。それよりも集落のお母さん方で嫌なことがある。裏と表がありすぎる。話の中では絶対に表面には出さず、裏でこそこそとすごく悪口めいたことを言い合う、そういう場面に出くわすとすごくショックだし、「一体何なのよ」、と思う時があるわ。

以上のように、女性内部の監視の目が存在する。これは世代によって、あるいはそこで生まれ育ったか否かによって異なるようだ。地域に生まれ育った年輩の（あるいは若手でも）女性達は濃密な人間関係を楽しみながら肯定的に評価しようとする。一方で外部から嫁いで来た女性達にとっては「古い因習やしきたりでがんじがらめになっている集落の生活」（来日13年目の海外出身の女性・小学生の子どもを持つ）という印象を抱いてしまうのだ。それも、まさに地域の女性達の付き合いの内部でそういった思いが醸成されてしまう。

このことは、女性達に対する調査を困難にするだけでない。先に見た地域の環境教育の取り組みが目指している地域内コミュニケーションの活性化、昔ながらの村の付き合いの見直しなどといったヴィジョンを女性達が素直に受け入れられない原因にもなっていると考えられるのである。

農村の女性達は家庭内で弱い存在だという指摘がよくされるが、そういったことも原因となっているかもしれない。例えば先のCさんは「いろいろとあなたに話したいこともあるけど、特別にそういった話の場を設けようとする、『うちの嫁、何しゃべったんだ』というような疑いの目を舅・姑や夫からすぐに向けられるから、本当に何かの機会に寄せてこうして話すぐらいしかできないわ」と語る。地域・家庭内と地域の女性内部の要因が絡まってますます女性達の声が出にくくなっているのである。

本章は、このような困難な状況の中、女性達の集まりや、いわゆる井戸端会議、あるいはしばしば私の住み込みの家で行われた宴会（公民館での飲み会の後、近くにある私の家でお母さん方の2次会が行われることもあった）など、地域の日常生活におけるさまざまな機会を利用して、インフォーマルな形で積み重ねて来たインタビューと参与観察によっ

ている。こうした調査方法では彼女らの声を本当に十分に反映できるかどうかは心もとない面が確かにある。だが、今後調査を継続し、彼女ら及び彼女らの家族との信頼関係を築く中でその精度が高まって行くのではないかと思う。彼女らの家族との信頼関係は非常に重要である。本章は地域の日常生活における様々な機会でのインタビューと参与観察によって書いたが、こうした調査を可能にしたきっかけは、よく私の家に遊びに来る子供達が、その親と私とをつないでくれたということにあり、それで地域のお母さん方・お父さん方の一定の信頼を得ることが出来たと言えるかもしれない。その結果として、お母さん方に対するインタビュー調査も進めることが可能となったとも言えるのである。その点できっかけを与えてくれた地域の子供達に感謝したい。しかしながらそれでもなお、本章を作成するにあたって最大限の努力をもって、紹介する一連の女性達の「声」は、人物が特定できないように配慮したつもりである。そのため、本章ではどのような状況下でどういった背景を持つ女性たちにインタビューしているのか意図的にぼかしている面がある。そのため、読者によっては説得力に欠ける記述の仕方と見受けられるかも知れない。しかしながら、調査の初動段階で分かって来たように、彼女達の声が人物が特定される可能性を持って描いてしまうことは、現在の彼女達の日常生活や家族・地域関係に与える影響が大きすぎると判断した。そうした配慮の結果であることをどうか御了解頂きたい。

さて、地域の環境教育の取り組みをお母さん達はどのような思いを持っているのだろうか。そのことをまず見てみよう。

2、とざわ里地塾に対する評価

A、Bさん：あれは盛り上げるだけ盛り上げて、地域の日常生活のこと、今の地域の現状をよく把握していないで、上のほうで派手なことだけやっているという印象を受けたよ。外部の人はたまにきて楽しんで、地域作りだと言って盛り上げるけど、その中で、日常生活を行っている者の身になると、本当にしんどいことだし、「外部から参加してくる NGO やじいちゃんやばあちゃんは気楽にできるからいいけど」、みたいな気持ちにどうしてもなってしまうわよね。

A、Bさんが言うように、取り組みが地域に根ざしたものでありながらも、あまりに現在の日常生活とは遊離している、という印象を女性達は受けている。そして、現在の地域での生活を実質的に支えている自分達にとっては大変負担だと感じているのだ。そうでなくても、ここはさまざまな地域行事や集落の年中行事、学校に関わる行事があって参加せねばならないので、さらに地域の取り組みをやることに対して大変負担を感じているのであ

る。

Bさん：ほんと、地域の活動と子育てと、正直いってしんどいと思うことがあるわ。

Aさん：仕事が多様化して、みな女性たちは外に勤めに出ている。忙しいし、日曜だからといっても仕事が多様化しているから仕事があつたりする。だから意思があっても集まりに参加できないのよ。

Bさん：前にやった里地塾の活動は、確かにやることの大切さや良さは分らないでもないけど、実際それをやるための労力を考えると、できるかな、というのが本音だよ。外からくる人は、確かに盛り上がればいいけど日常生活している私達としてはこれは本当に大変なことだし、しんどいと思うわ。

3、地域行事に対するまなざし

このように、農山村におけるお母さん達は多忙な日常生活を送っている。これまで受け継がれて来た地域行事もしなければならぬし、勤め仕事にも行かなければならぬし、しかもその勤め仕事も不安定かつ多様化しているので、必ずしも集落行事にあわせることができない、さらに農作業も手伝わなければならない。彼女らは地域生活において3役4役をこなさねばならない多忙で困難な状況にあることが見えてくるのである。

このような多忙感・しんどさというのはいったんよその地域に出たお母さんには特に感じられるものであるようだ。3年間東海方面に夫と仕事に出て今年角川に帰って来た女性Fさん（30代・幼稚園の子どもが3人いる）は私にうつむきながら次のように話した。

Fさん：住んでみると、いろいろ大変でしょ。外の地域の方がいいでしょ。

筆者：まあ、お店とか少ないことは不便を感じる時もありますけどね。

Fさん：そうではなくて……。よそではないこと（地域行事とか集落の年中行事）がここではあるということよ。私は、もともとこの出身ではあるけど外の生活を体験してきて、もう一度ここに戻ると、そのわずらわしさが見えてくるの。例えば、集落の行事やら、家族の中での様々なしきたりのようなものがあって、いまどきそのような昔ながらのものがあすぎてびっくりするわ。

このような地域行事の取り組みに対する負担感のようなものも女性達の間には確かに存

在するようだ。

先にお母さん方の集まり「御観音講」で女性達のコミュニケーションの場であると肯定的に評価していた地域出身の女性も次のように指摘していた。「でも、さっき話したようにこういった御観音講のようなことをやるのが今は大変になってしまっているのね、勤めや何やらで忙しいから。かえってこういったことをやるのが、ストレスになってしまうというジレンマも抱えているのが今の状態。手間がかかることだからね。だからそれを少しでも軽減しようとして、これまでは持ち寄りの手料理だったけど、今はオードブルを頼むことにしてしまったのよ。そうすると今度はお金がかかってくるから……。そこでまた負担になってしまうのね。」

さて、集落の取り組みには自由参加なのだと表面的には言われるが、しかし村の中では、そうした「集まり」に行かなければならないような「空気」のようなものが醸成される。先に地域内に存在する女性を取り囲む地域・家庭・女性内部の様々な「監視の目」とあわせてそのことをCさんは先に「牢屋」という表現で語ったわけである。すなわち集落の行事への「暗黙裡の強制的参加要請」といった雰囲気を作られている、そしてそれに対応することが地域の女性達にとって過剰負担なのだというのである。地域行事における住民同士の交流の重要性を語る夫の傍らでCさんはさらに次のように話した。

集落行事などや各種集まりには行かないわけにはいかないような雰囲気となっている、そのような「空気」を作り出しているのよ、はっきりとは言えないけど。例えばこの間「御観音講」の集まりがあったけど、こういったものもある意味ではわずらわしく大変なところがあるの。でも行かないわけにはいかない、反対意見の声を出しにくいようなものとなっているのよ。

こうした地域行事や、地域の自然の取り組み（※2月に実施されたとざわ里地塾を指している）での準備でもお母さん達はとても大変だった。それに今回の雪祭り（※集落行事として毎年開かれている）でもいろんな料理などのもてなしの準備を5日も前からしてるのよ。そうした準備は本当はとても大変なことなのに、そして、みんなそのことを薄々分かっているにもかかわらず、声としては出さず、何にもない顔をして取り組みにかかわって、そして、今もこうした交流会であっけらかんとしている。だけど、本当はすごく大変だし、みんなそう思っているのだと思う。だけど決してこうしたことは言わない。嫁の立場ということもあって、言えないような構図になっている。私も旦那にはけっしてこういった話はしない。女性たちの集まりでも互いに言えるような雰囲気じゃない。出川さんには話し

ているけれども集落の人には、同じ女性たち同士でも決して言わないことなんだよ。

こんなことは、男たちは分かっていないし何にもしてくれないよ、ただ酒を飲んでいるだけ。だから、こういった地域作りの活動や環境活動や地域の暮らしについて素晴らしいものだ、良いものだ、と外から来る人も地域の男たちやお母さん達の一部は言うけれど、端から見ると、ばかばかしく思えてしまうわ。

私が地域の外国人花嫁の話をする「それは外国人だからというのではなく、日本人も含めて、若いお母さん方はみな同じ問題なのだ」と。そして、このような意識は当然子供達の将来に対する考え方にも関わってくる。

このようなしがらみや集落の付き合い、行事での過剰負担が原因で、村の女性たちは子供(娘)を農家や田舎の家には嫁がせないように願っている、そのくせ当の村に嫁が来ないと言って嘆いているのだから、この矛盾はどうにもならないばかばかしさを感じるわ。

こうした声は研究のあり方自体にさらに次の示唆を与えてくれる。

もしあなたがこうした地域の暮らしや活動について学ぶのであれば、ただそれを素晴らしいといってむやみに賞賛するのではなく、こうした内部のお母さん方への過剰負担などの問題、お母さん方の表立って出せないような声も取り上げるような研究をして欲しいわ。

それにしても、上の一連の発言を見ると、彼女達は地域における環境教育の取り組みを、自分達に過剰な負担を与えていると彼女達が認識している集落の地域行事、年中行事と同列のものとして感じているように考えられる。つまり、地域における環境教育の取り組みが実質的に地域作りや子供達の将来に必要不可欠なのだというようには考えられないのだ。それは次のように若手の女性達（のみならず若手の男性達）も考えていることでも分かるだろう。彼（女）らの目には、環境教育の取り組みを通して地域に新たな価値付けをしていこうとする側とはまさに正反対で、子育ての環境としては問題のある地域だと映るのである。

4、過疎地で育つ子供達の将来に対する不安～よそとの交流の重要性～

小学校高学年の子どもを持つあるお母さんは次のように話す。

過疎地の子供たちの将来への不安がある。特に人なれしてほしいということがある。ここは保育所も一緒、小中併設校なのでそこでも一緒。12年間も少ない子供達だけで育つ。それが心配。だから、村の交流事業やスポーツ少年団に子供達を出したいというのもそういう気持ちがあるから。すごく多忙な毎日で、送り迎えがしんどくても、そういうようにしているのは、子どもに人慣れしてほしい、地域の他の子供たちと友達になれるようになってほしいからなのよ。

角川小中学校が小中併設校になったのは平成12年のことである。当時、中学校統廃合問題で地域にアンケートが配られた時、老年世代は角川の名前を残したい、他地域の中学校と統合すべきではないという考えが圧倒的に多かったのに対し、お父さん達は、他の子供達と揉まれるべきだということで、統合の方に賛成する人が多かったということである。「俺も中学生ぐらいになったら、村の中央の中学校でみんなに揉まれて育つのがいいと思うのだが」とその女性の夫も話した。そしてこの女性は次のように続ける。

そういうわけで、スポ少（スポーツ少年団）などに積極的に子供達を出そうというのも集落の外の子供達と人なれしてもらいたいから。だから、いそがしいし、毎週なにかあるということで非常に大変だけれども、どんなに忙しくてもそういう場に出すのよ。

このように考えるのは、近い将来、高校に入る時に地域の外に出ると想定されているからである。村の教育長に確認したのだが、数年前まで角川地区は村内でも最も高校の中退者が多く、かなり頭を痛めた時期もあったという。小中学校でも次のような出来事があった。ある日の午後、1台の車が小中学校の裏手の河原に止められていた。小学校のK先生（40代男性）が車を運転していた娘さん2人と話をしている。年は18、9歳ぐらい。今、近隣の都市のアパートで一人暮らしをしていると言う。K先生は、「彼女も高校を中退しているんだ。やっぱり高校に行ってから友だち作りがうまく行かなくて、それで1人だけぼっんとしてしまい、そのことが原因で中退するというケースが多かったんだ。」中学校のH先生（30代男性）は角川地区の子供達の、私から見れば濃密で微笑ましく、またおかしみのあるコミュニケーションの仕方に対して次のような分析をしていた。

それはこの地域で、子供たち同士よく知り合っているもの同士だからこそできることなんだ。だから、この地域からいったん出てしまうと、そのようなコミュニケーションの仕方はできない。だから、高校に行ってから苦労するというのには、そこに原因がある。今（6月現在）、高校に進学した生徒が、よく中学校に遊びに来るけど、それは、そうした「地域の外の世界」になかなか馴染めなくて、それで遊びに来るということがあるのではないかな。だからこの先生方もまあしょうがないか、ということでそういった生徒を受け入れているんだ。

コミュニケーションのあやうさがある。つまり、この地域での子供達の人間関係でのみで通じるコミュニケーションのあり方であるということ。それはよそのあまり知り合っていないもの同士の中では通用しない。この子供達のやり取りの方、子供達の関係は、確かにこの地域のよさなのかも知れない。でも、ここで培った良さを振り捨てないと、外では、高校から先はやっていけない、ということもあるんだ。

高校生の息子さんを持つ女性Gさんは次のように話してくれた。

子供達はずっとこの地域にいるわけではないし。特に中学を出た後、高校にいった時、本当に困るのよ。いわゆる「母ちゃんショック」というもの。最初息子が高校に入った時にもまずその生徒の数に圧倒された²。一クラスに46人もいて、机が教室にびっしり並んでいて、このことだけでも、もう相当の負担なの。この地域ではみんな子供達は兄弟みたいに育ってしまうので、まったく見知らぬ他人とも縮こまることなく付き合えるようになって欲しいという願いがあるのよ。

5、子供達の将来についての展望～「いずれは地域の外に出るから」～

そして、こうした願いは、地域外にある高校への進学ではなく、その先の将来を見据えている。Gさんはさらに次のように語った。

やはり子供は仕事で生活圏を決めるから、もしこういう仕事がしたいから、地域を離れるといった時、その時には家にはお父さんとお母さんしか残らなくなってしまうけど、引き止めることはできないよ。それにそもそもこの地域で仕事を探すというのは本当に大変だし、実際にはないと思う。だから、高校が終わって、あるいは大学が

² 現在（2003年度）の角川中学校は全校で28名である。最も少ない学年（クラス）の生徒数は、実に6名に過ぎない。

終わった後は地域を離れるということは覚悟している。もちろん、ばあちゃん達の古い人たちは昔ながらの長男は家を継ぐのだという意識もあるみたいだけど、そんなのは今の時代にそぐわないわ。

第3章で紹介した地域の環境教育に積極的に取り組んでいるNさんでさえ「子供達は将来は地域の外に出るんだ」ということを自明のように語っていた。だが、彼女達にとって、子供達を地域の外に出すということは、単に就職の関係上、止むに止まれず地域に出すというものでもない。先に見たCさんは、地域のしがらみやしきたりのため、農村には絶対に嫁がせたくないと語っていた。また、地域に住むある外国人花嫁は次のように語っている。

私は地域の生活をよいものとは考えてない。古い因習やしきたりでがんじがらめになっている集落の生活、そして限られた地域の中で「井の中の蛙」的に暮らしている住民の生活にうんざりする。だから自分は自分であり、このような日本の農村の生活や考え方には馴染めないの、私はそれでいいと思ってる。だから、この集落には住んでいるけれども、地域の文化や付き合いに馴染もうとは思わない。だから地域のことやそこに住む他の人たちのことは自分には関係ない、自分は自分のやり方でやっていきたい。

海外の都会出身のお母さんの中には、自分が思い描いていた日本での生活と余りに違う田舎の生活と自分とを区別して話す傾向がある。そして、そのことで自分と地域を結び付けている子どもとさえも時にギャップが存在することを見え隠れさせている。角川地区でも大きな農家が点在するある集落に住む海外出身女性は娘さん（小学生）を同伴して私のインタビューに答えてくれたのだが、次のようなやり取りがあった。

女性：とにかく、向こうでは都会ならではの仕事をしてきたし、こちらでもおなじようなことをしたいという目的もあって、そんな感じで日本に来たから、旦那さんが好きだからとか、そういうわけで日本に嫁いできたわけではまったくないの。けど、今は娘が生まれたので、娘のためにここでこうしてがんばっているんだ。自分の国でやって来たことを生かそうとしてもここでは、あまりに環境が違い過ぎてね。みんな諦めたわ。ここはとても田舎過ぎるもの。田舎で農業でいろいろと作っているけれども都会ではそんなものはすぐに手に入るから、別にそんなことを苦労してやろうなんて思わないわ。

娘：(強い口調で)でも田舎の人が作っているからこそ、都会の人はそれを買えるんじゃない。

女性：もちろんそうだけど、それを作る人、買う人というように役割分担はあるのよ。

この女性にとって自分は「作る人」(つまり農村の人)ではないというのである。しかし娘さんからすれば自分のおばあちゃんが、「作る人」であり、すごく大切に農作物を育てていることを知っているし、そのことに共感を持っている。この子は帰宅するとおばあちゃんが、そうした作業をしているのをずっと目にしているのだ。しかし、この女性にとっては、そうではない。実際の経済生活を支えるために近隣の都市部に一生懸命働きに出ている。

若手の男性もまた、女性達とは意識は異なるが厳しい農業情勢の下、勤め仕事も並行してやらねばならない生活では、こう女性達が考えるのもやむを得ないだろうと感じている人が多い。例えば、小学生の娘2人を持っているMさんは子供達に地域のことを子供達に教えるのに熱心な人で、環境教育の取り組みにもしばしば参加していたし、Nさんが企画している川の環境保全の取り組みでもしばしば参画しているのを私も見かけていた。一度話をしようと彼の方から言ってくれたのだが、実際会おうとしたところ、彼のスケジュール調整に一週間もかかった。彼は自分の一日の生活パターンを語りながら次のように話した。

私は、4時30分に起床し、畑へ仕事に行く。6時30分頃仕度に戻ってきて、7時ぐらいに車で1時間ほどかけて会社へ出勤する。夕方の6時頃、家に戻り、田んぼを見回りに行く。そして部落の会合などあれば夜7時30分ぐらいから遅い時には10時ぐらいまで話し合いに参加する。というわけで、なんかすごく忙しい。農業だけならともかく、勤め仕事にも行かなければならないのでそのことが負担になってる。今、農業は大変厳しい状況にあるしな。子供達に将来農業をさせるということは考えられない。すごく苦勞することは目に見えているしそのような苦勞させられないから。自分が農業をやっているのは、単に仕事として、しょうがないからやっているというだけではなく、個人的に好きだからこそやっていけているということがあるな。

Mさんの最後の指摘は重要である。先に見た里地塾やふるさと委員会で様々な取り組みを仕掛けているNさんの場合も、同じように、自分がこうしたことをするのが「好きだから」というのが彼ら地域の環境教育の取り組みを行う人々の最後の動機付けとなっていることがあった。だから、もしこうした思いを共有できないのであれば、共通の意識を持つ住民

の「単発的で一部の参入で終わってしまう」ということも確かに考えられる。

だが、女性達の中でもこうした感覚を共有できる人は、地域の取り組みに積極的に関わっている姿が見える。それは外国人花嫁であっても例外ではない。角川地区のある集落では2人の中国人花嫁が御観音講に参加している。そしてIさん（来日8年目・小学生の子どもがいる）は地域の生活や農業について次のように肯定的に語る。

Iさん：うん、やっぱり街とは違うよね。新庄市（近隣の都市・人口約4万人）とこっちでは30分ぐらい離れているだけだけど、ここは、すごい田舎の山中だよ。でも今は慣れたから、全く山の中だと考えることもない。山歩くのは結構好きで楽しい。私小さいときから山歩きは好きです。中国の実家にいる時からけっこう山歩くの好きだった。

田舎もいいよね。日本の田舎にももう慣れたから。やっぱりこっちは街中よりもっと良かったと考えるの。何もかも便利でしょ。自分のうち畑もあるし、食べ物も好きなだけ作っていれば、何ぼでも食べることができるでしょ。街中だと何でもかんでも買わないと食べられないからね。

だが、この女性の夫は私の帰り際に、「妻はああ言っているけど、当初ここに嫁に来た時には大変苦労したようだ、一時ノイローゼのようになっていたから、だから俺もあちこちドライブに連れて行ったりとかしたんだ」と教えてくれた。農山村に住むことによって生じる初期の困難が確かに存在していることは伺われる。

だが、殺風景な開拓農村に育ったある女性は豊かな里山に囲まれた角川地区に嫁いできて、地域の自然に関心を抱いている。そして老年世代とのギャップを楽しんでいる向きもあるのである。ある御観音講で次のような話があった。実はこれは最初に紹介したBさんの話である。

6、狸を背負う話～世代間ギャップの楽しさと地域の良さへの気づき～

Bさん：会社から車で家に帰る途中、狸を曳いた。気持ちが悪いので、そのまま逃げて帰ってきたのよ。で、そのことをばあちゃんに話すと、「なして背負って持ってこなかった」と問い詰められる始末だった。私は「そんなこといったって、気持ち悪くて・・・」と答える間もなく、ばあちゃんは、そんなことお構いなしに、「もう他の集落の誰かが背負って持って行ってしまったかもしれねけど」、といいながら、引かれた場所へ取りに出かけた。自分からすれば、「ひえー気持ち悪いー」というかんじ

なのに、ばあちゃんは、「そんな千載一遇の機会を逃すとは」という感覚で取りに行くのだから、恐れ入ったことだよ。

そんな話題を楽しそうにお母さん達たちは話していた。今度は違うお母さんが、「ママシも見つけたら、私なんか気持ちが悪いくて逃げるのに、ばあちゃんたちやじいちゃんたちはそれこそよこで追いかけて捕まえようとするし、蛇を増やすために裏手の山に放しているぐらいなのだからほんとにねえ」、と自分達にとってはむしろネガティブな内容なのに楽しそうに話しているのが印象的だった。

女性達が全く地域の自然や文化に関心がないと言うわけではないのである。先に、地域を「牢屋だ」と語ったCさんも次のようにも語っているのである。

この角川は自然環境的には確かに大変素晴らしいと思う。ここに来て19年、今でも山道を車で行くとき、その美しさに魅せられて車を止め、見入ることがある。それほどこの地域の自然環境、景観は素晴らしいものだと思う。この地域にずっと住んでみてそれは確かに感じてはいるのよ。

終章一里の自然環境学校の設立と新たな変化への兆し-

1、暫定的なまとめ

これまでの話を簡単にまとめてみたい。戸沢村における環境教育の取り組みは、農山村の自然環境や生活文化を素材として、それを担う地域住民によって行われようとしていた。そしてその推進の原動力には3つの要素があった。一つ目は学校週5日制を契機にして、行政・学校サイドから地域連携による地域教育活動を推進させようという動きがあった。二つ目は、地域の住民の中で地域の自然や文化に関心を抱き、そこにアイデンティティを見出そうとする住民が主体となって取り組みが推進されていた。それら住民はその地域に生まれ育った人が多い。彼（女）らは農山村の自然や文化を子供達に伝える取り組みを通して、現代社会において社会経済的に周辺化された地域における独自の、そして今でもまだ残っている「良さ」を再発見・再評価していこうとしていた。そのような目的の中には地域内のコミュニケーションの活性化といった要素も含まれている。地域ぐるみによる環境教育の取り組みは、地域に育つ子供達にとって貴重な「原体験」の取り組みであり、子供達が将来例え地域の外に出たとしてもそうした地域の体験が支えとなるだろうとの思いがあった。三つ目は、特に老年世代に多いが、かつてとはあまりに違う「都市的な」現代の生活スタイル（勤め仕事と購買型消費生活）、若手世代の子供達に対する身振りに対する疑義といったものが、彼（女）らをこうした地域の環境教育活動に駆り立てている。これら地域の環境教育活動を動機づけている諸々の要素は、農山村の独自性を生かしたコミュニティ作りにつながろうとしている。

一方、実際に現在の地域生活を経済的に支えている若手世代（今の子供達の親世代、特に外部から嫁いで来ている女性達）は、こうした地域における環境教育の取り組みにそれほど積極的ではなかったと言える。それは現在も地域生活全般において多い地域行事・集落の年中行事から生じる多忙感や地域内の濃密な近所付き合いに対して物理的にも精神的にも負担だと感じているからであった。こうしたことは、地域における環境教育活動がその取り組みを進める際に狙っている地域内コミュニケーションの活性化というヴィジョンに対して批判的な評価が一方では生じていることを意味する。また、彼（女）らは農山村地域における環境教育の取り組みは、現在の生活スタイルとあまりに遊離しており、暇を持て余している住民や外部から楽しみにくるヨソモンが勝手に盛り上がっているものなのだという印象を抱いている。それよりも、子供達が将来、地域の外に出た時の事を考えて、地域における教育ではなくむしろ、外に目を向けた、現代の社会経済体制に合致した現実的な子育てを考えているのである。これは先に見た農山村独自の価値を見出し、農山村の独自のスタイルのコミュニティを新たに形成していこうとする動きと逆行する。その反面、農山村住民が手入れをすることによって形成されて来た地域の里山の自然を美しいと感じたり、じいちゃんばあちゃんたちの担っている一連の生活文化や価値観を面白いと感じた

りすることはある。しかしそれはあくまでも自分達がそれに対して距離を持って遠巻きに眺めることができるような状態においてである。

以上、極めて簡潔だが地域の環境教育活動をめぐる状況を分析してみた。第3、4章で見たように、実際には極めて複雑で錯綜した状態があり、行政・学校・地域住民が、さまざまなレベルで取り組みに参入したり、あるいは批判したりしている。先に見たように女性達の内部も出身地や地域に参入するまでの生活体験如何によって複数の軸で分裂している。さらにコミュニケーションをめぐってさまざまな不利な状況も見え隠れしていた。また、運動の推進側も様々な軸で引き裂かれており、そのような状況が相まって、Nさんが語るようにせつかくの取り組みも「単発的で一部の参入に過ぎなくなってしまう、いつまで立ってもマジョリティが交代しない」といった嘆きの声が聞こえる。

まず、この取り組みをめぐる当面の課題は二つあると言えるかも知れない。第一に取り組みが地域の現実の経済社会生活との折り合いを考える必要があること、つまり複数の軸で引き裂かれた地域住民が連帯できるスペースを確保するよう努力すること。もう一つは取り組みが、単に一地域の問題ではなく、より広範に現代社会に対して、子供達の将来に対して、新たな魅力的な価値付けを伴うメッセージを発信できるかどうかということである。もちろん、2、3章を見て来た今、そういったメッセージが取り組みの中に深く内蔵されていることに我々は気がつかされるだろう。戸沢村角川地区における農山村地域の一連の環境教育の取り組みは、住民が手作りで取り組みを行うことで、意識的にも物理的にも豊かになるためのものであり、環境教育という取り組みを通して、人と農山村の自然や文化が織りなす新しいコミュニティを形成するための「環境文化運動」であったと言える。

実はこうした運動へと向う価値観はすでに見え隠れしていた。しかし、それを住民がどこまで自覚し、地域内部だけでなく外部に発信していけるか、さらに取り組みを継続していくための現実的な運営と複数の軸で分裂している地域住民が連帯できるあり方を考えていかねばならなくなる。しかし、第3章と第4章を見て来た今、その間の隔たりがいかに大きいのか、果たして連帯可能なのか、読者は疑問に思うに違いない。

終章では、研究調査者として、私が地域に入ったのち、当調査の後半の地域の最新の動きを見ていきたい。ここでは、研究調査者としての私も地域のこうした動きの中に巻き込まれていく。研究調査を進める私は好むと好まざるとに関わらず地域住民に様々なレベルで影響を与えるし、また私も影響を与えられる。本章の最新の地域の動きはそのようなネゴシエーションの中で起こった研究者と地域住民の、あるいは（そして）複数の軸で裂かれた住民同士の新しい「連帯」へと向おうとする変化の兆しである。私は、そのような「連帯」へと向おうとする中に、研究調査者もその一部として巻き込まれることを、光栄に考えているし、望ましいこととも思っている。

さて、本題に入る前に、現時点までの村内の動きをざっと見てみたい。村内各地に地域作り団体が誕生して来ている現状を押さえないからである。

まずは、古口地区の動きに関して。もの作りの老人団体「乙夜塾」を中核にして新たな展開が見られる。この乙夜塾も子供達にももの作りを教えてくれと頼まれたことがきっかけで、やっているうちに自分達も面白くなって出来てきた団体であった。この団体に加えて、炭焼きの取り組みを行っている山の学校やメダカの保護増殖の取り組みの場であるメダカの学校、そしてこれらの実践場は古口地区のはずれにある北の妙というところにあるが、そこに所在する牧場の土の学校、そして古代米植えを子供達と共に行うことによって田んぼの学校をつくって、「北の妙創郷大学」を設立した。今後も多彩な活動を行おうとしている。

次に戸沢地区の動きについて。とざわ里地塾の発起人である戸沢小学校の S 校長先生の学区ではメダカやホタルの保護増殖活動や子供達の自然観察の場として、集落住民と学校の先生方で実にユニークなビオトープを学区内のある集落で作って着実に活動を始めている。

そして次に本章で取り上げる角川地区の最新の動きについて点描しよう。この地域は村内でもっとも山奥にある地域で、過疎化と少子化で小中学校併設校となっているところであった。私が第 3、4 章の調査をしたのもこの地域であった。ここでは、昨年の里地塾に続いて今年度は学校の先生と地域住民で構成するふるさと委員会が中心となって毎月一回、地域の自然環境を利用した「イベント」を行ってきた。4 月に行われた稀少動物であるギフチョウとカタクリの花の観察会については山小屋のサブローさんとかかわりの中で取り組みの様子を第 3 章で詳しく紹介した。その後、5 月にはフナ釣り大会、6 月には集落の最上流部にある浄の滝へのハイキングとヒメサユリ観察会、そして集落での通学合宿ともらい湯の取り組みが 7 月に行われた。

2、「角川里の自然環境学校の設立」～研究者のインパクトと変化への兆し～

そのような活動に加えて、大学院生の著者と、地域の小中学校の先生や地域住民が一緒に地区の中心集落で地元学という地域調査を行ったことがきっかけで、地域の自然環境や生活文化の再評価、そしてそれを子供達に伝えていこうという動きが、地域集落の広範なレベルで起こることになった。それが集落住民を主体として企画運営する団体、「角川・里の自然環境学校」である。地区の会長さんである L さんの呼び掛け文書の一部を紹介しよう。

さて、都市化社会の中で、近年角川地区においても、子供たちへ里の自然環境や文化など、本当に人間らしく生きるための知恵や技術を伝えると

ということが求められております。

先日、下本郷集落において「地元学」という手法を用いて、周辺の里山、川、集落内を住民や外部から訪れた方々と一緒に歩いて調べてみました。その結果、極めて豊かな自然環境や生活のさまざまな知恵や技術、文化が角川にも数多く存在することが明らかになりました。しかしながら同時に、それらの文化が受け継がれないまま廃れようとしている実態も分かりました。こうした状況は角川を愛する者として寂しい限りです。

こうした状況をかんがみて、角川の住民が一致団結して、子供たちに地域の自然環境や生活文化を伝えるメッセージを発する必要があるのではないか、そのために地元住民を主体として子供たちに地域の里の自然や生活の知恵や技術を伝える場をつくろうとする声が起こり始めております。そしてそのような知恵や技術、文化を持っておられる方々を広く募る必要が出ております。

今回の集会ではこの点を中心に、角川を愛し、地域作りに日々取り組んでおられる各集落の声がけをお願いしたい旨、話し合いたいと思います。

これまでの環境教育や地域作りの取り組みではどうしても一部の住民の参入に過ぎなかったり単発的なイベントで終わってしまいがちだったという反省点があった。それらの課題を踏まえてこの「学校」では、山の学校、川の学校、食の学校、農の学校、もの作り塾、民話・昔遊び塾といった6学部からなる教育部と、環境保全/循環共生/地域資源研究部とコミュニティ活動/地域作り研究部からなる研究部、ヨソモン交流会館（子供交流館）からなる交流部、南部里地探検隊で構成する探検部隊、そしてそれら各部の取り組みを陽に陰にサポートする応援部といった多彩な機能と多様な人々の参入を可能とする仕掛けが考えられている¹。特に女性達を中心に結成された食の学校の存在は重要である。食の学校のグループは第3章の終わりに紹介したDさんが呼びかけ人となって、特に若手女性達の参画を念頭においている。地域の郷土食や伝統食を子供達に伝える取り組みを行いながら、地域に根ざした健康的で現代の生活スタイルを見直す食のあり方を模索するために結成された。

これら自然学校の取り組みが射程にしているのは地域内だけではない。村内各地の市民団体や地域の子供達のもとより、地域外の都市を中心とするヨソモンやその子供達とネットワークしようとする（つまり都市と農村の対流を巻き起こそうとする）目論見が見られる²。これは私がここで地域の環境教育活動を調査する中で取材した一連の動きを図式化して住民にインタビューを重ねる中で、逆に彼らがそれを横領し、考え出したものである。そしてこの背景には、私の視線を通しながら、地域住民が農山村地域の自然環境や生活文

¹ 詳しくは、論文末の資料：角川里の自然環境学校組織理念図を参照のこと。

² 詳しくは、論文末の資料：角川里の自然環境学校ネットワーク概念図を参照のこと。

化を教えることは地域の子供達だけでなく、都市の子供達にとっても重要であるというより普遍的な価値を持っていることに気付いてきた結果でもあった。それは地区会長を動かしたことから伺えるし、また、先に見た自然学校設立の呼びかけ文にも見られるだろう。そこには地域の子供たちのみならず地域外の子供たちや大人たちも含めて、地域の環境文化・生活文化を学べるように情報発信していくことが農山村で生まれ育ち、そのような文化を担っている我々の義務でもあるのだ、という運動推進側の新たな自信の表れでもあり、第 3 章で見られた一連のメッセージと相まって現代社会において農山村からの新たな価値を発信していこうとしているのである。

3、現在進行中の動き～新たなつながりの構築を目指して～

だが、第 4 章で見たように地域には現実的な問題が数多く存在している。これに対して「里の自然環境学校」は次のような身振りを見せ始めている。まず先に見たように取り組みに対する若手世代の批判の要因となっている地域経済の低迷から生じている若手お父さん、お母さん方の社会経済的な悩みにいかに対応していくかが模索され始めようとしているのである。角川地区の若手世代は近隣の都市部まで共働きで出かけている家庭が多い。近隣の都市とは言え、積雪の多いこの地域での通勤は、言語に絶するような大変さがある。しかし、それでもなお特に子供のいる家庭では現金収入を得るためには共働きでなければやっていかれないという声が聞かれる。このようにせつかく地域に根ざした教育の取り組みを行おうとしても若手世代の仕事の多様化の中、土曜日曜日にも仕事があったりして、なかなかお父さんお母さん方は参入するのが難しいし、取り組みに関心を向けにくい状況となっている。むしろこれら世代の過剰負担となってしまうことも十分に考えられるのである。今、このような現実の経済的課題とどう解決するようなつながりを構築していくかということが活動していく中で模索されつつある。一例として地域資源を利用した環境教育活動の中で副産物としてできる様々な郷土食やもの作りの作品を販売しようとする声が出ているし、実際小規模な形で販売され始めた。また、地域の自然の写真を添付したカレンダーを販売し、事務局の運営資金にあてられた。このカレンダーは、第 3 章で紹介した当初地域の環境教育の取り組みに対して地域の自然保全の観点から批判していた T さんが作成した。自然学校に参画する中で地域の自然の美しさをまず住民、特に若手の世代に知ってもらおうとの思いと、自然学校の事務局運営を自律的に行える財源を自分達で確保したいということから作成されたものである。また、彼は、若手の女性達にも地域の資源に抵抗なく接して楽しんでもらおうとお洒落なつる細工を考案し、事務局に展示している。

取り組みを進める中核メンバーは、若手世代の声に真摯に耳を傾け始めている。現実には地域を支え、これからの地域を担っていくお父さんお母さん方は大切な人材であるが、特に今の若手お母さん方は外部から嫁いでいる人が多いため（角川地区では 13 名の海外出身の女性が居住している）、彼女達は地域の生活文化こそ担っていないかも知れないものの、

地域についてヨソモンの視点を持って見つめている。その意味で、彼女らの声には今後の地域作りを展開する上で、重要なおもしろい視点として組み込まれる余地があるのではないかと彼らは考え始めているのである。これまで地域の教育活動となるとどうしても伝統的なものや歴史的なものを中心としがちであったが、このような若手の世代層を排除しない地域作りのあり方が模索されようとしている。だが一方で彼らは、農山村の生活スタイルと文化を担う老年世代を勇気づけながら、取り組みを子供たちへの環境教育であるとして、ソフトなイメージで進めようとしている。そして実は、このことは自分たちの取り組みを、現実の社会経済の中に組み込まれている親の世代の価値観の変革やその土台となる現実の生活スタイルの変革へとつなげようと模索することを意味しているのである。

最後に、若手世代が子供達の将来の不安材料として提示していた地域の外部の子どもとの接触に関しては、これまで閉ざされていた地域を外部に開くことによって、解決しようとし始めている。それは、先にも書いたが地域の自然や文化は外部の、とりわけ都市の子供達にとって重要な教育的要素持っているのだという自信の表れでもあり、今後各種取り組みを地域の子供達だけでなく外部の子供達も参画する形で実施していこうと考えている。その意味で地域内部だけでなく、より広範な現代の社会に対して農山村からより広範に普遍性を持ったメッセージを発しようとしているのである。それは、これまで地域住民の中で自分達の内部だけで語られて来た地域の良さを、ある外国人花嫁が指摘したように「井の中の蛙」的な形で賞賛するのではなく、外部に向って地域と自分達の生き方を共感できるような連帯できる形で発信していこうとする、周辺化された現地からの市民運動としての文化表象運動の側面を持っているとも言えるかもしれない。こうしたことから、観光といっても、単に搾取的で地域を安く切り売りするような観光形態ではない、都市と農村の住民が学びあい、本当の意味で互いの暮らしを互いに構築し合えるような、そしてそれが地域作り・環境作りにつながるような「観光」のあり方が模索されはじめようとしているのである。事務局にも全国各地からネットワークを結ぼうとする連絡が入り始めた。また、地域内でこれまでの環境教育の取り組みに否定的だった層も徐々に参画し新たなネットワークをつなげ始めているのである。

4、より広範な社会的メッセージ発信への自覚

このように新しい連帯の形や多方面とのネットワークをつなげながら地域住民による環境教育と地域作りの取り組み、すなわち農山村での「環境文化運動」が進もうとしている。そして、彼らは、取り組みに子供達の未来にとって大切だと考えられるメッセージを含めつつ、より広い大文字の未来の社会経済環境を作っていくようなメッセージを地域の次元から積極的に声をあげ、実際に参入していこうという、一段高いグローバルな視点を持つようとしているのだ。

山形県最上郡戸沢村角川地区。過疎と少子化、周辺化された村と対外的にも対内的にも認識されていた小さな農山村は確実に新しい変化を迎えているようである。それは、地域環境教育活動が進められる中で、住民が主体となってヨソモンとの交流の視点を持ちつつ新たな地域のつながりを構築しながら、地域の自然環境・生活文化を保護継承しようとする取り組みであり、その中で見えてきた様々な現代的な課題や、地域でこれまで見えにくかった住民層とネゴシエートとした結果であった。それはまた取り組みの中で関わって来た NGO・研究者とのネゴシエートの結果でもあったと言える。それらの土台に立って小さな山村で力強く、新たな環境文化・生活文化、そして人を創造していく方向、すなわち現代農山村における「環境文化運動」が進もうとしているのである。ローカルだけど自分達の手で確かな感触を楽しみながら。

参考文献

アーニャ＝ルーンバ

2001 吉原ゆかり訳『ポストコロニアル理論入門』松柏社

青木やよい

1986 『フェミニズムとエコロジー』新評論

アリエル・サレー

1995 松丸久美訳「ディープ・エコロジーより深いもの—エコフェミニズムからの問題提起」（小原秀雄監修・鬼頭秀一他解説『環境思想の系譜3 環境思想の多様な展開』東海大学出版会）

石原豊美

1996 『農家の家族変動—ライフコースの発想を用いて—』日本経済評論社

市田(岩田)知子

1995 「生活改善普及事業に見るジェンダー観—成立期から現在まで—」（日本村落研究学会『【年報】村落社会研究 31 家族農業経営における女性の自立』農山漁村文化協会）

伊東俊太郎編

1996 『環境倫理と環境教育』朝倉書店

イネストラ・キング

1995 松丸久美訳「傷を癒す—フェミニズム、エコロジー、そして自然と文化の二元論」（小原秀雄監修・鬼頭秀一他解説『環境思想の系譜3 環境思想の多様な展開』東海大学出版会）

内山政照

1990 『現代農村の社会問題—教育・マスコミ・後継者難・嫁不足・自殺—』

筑波書房

エドワード・W・サイード

1993 板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム上・下』平凡社ライブラリー

1998 大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社ライブラリー

1998 大橋洋一訳『文化と帝国主義Ⅰ』みすず書房

2000 大橋洋一訳『文化と帝国主義Ⅱ』みすず書房

大田好信

1998 『トランスポジションの思想—文化人類学の再想像—』 世界思想社

2001 『民族誌的近代への介入—文化を語る権利は誰にあるのか—』 人文書院

萩原なつ子

2001 「ジェンダーの視点で捉える環境問題—エコフェミニズムの立場から」
(長谷川公一編『講座 環境社会学第 4 巻 環境運動と政策のダイナミズム』 有斐閣)

加藤守通

2002 「コミュニティーの人間形成論」(教育哲学会第 45 回大会研究討議「『公』の教育、『私』の教育—アリストテレス『政治学』第 8 巻第一章を読む」)

鹿野勝彦

1997 「インドにおける住民運動と国家—森林利用と林政をめぐって—」(青木保他編『岩波講座文化人類学 6 巻紛争と運動』 岩波書店)

金泰泳

1999 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて』 世界思想社

具度完

2001 石坂浩一、福島みのり訳『韓国環境運動の社会学』 法政大学出版会

熊谷苑子

1995 「家族農業経営における女性労働の役割評価とその意義」(日本村落研究学会『【年報】村落社会研究 31 家族農業経営における女性の自立』 農山漁村文化協会)

栗本英世

2001 「紛争研究と人類学の可能性」(杉島敬志編『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後—』 世界思想社)

桑山紀彦

1995 『国際結婚とストレス』 明石書店

桜井裕子

1990 「エコロジカルフェミニズム論争は終わったか—エコロジー危機とフェミニズム—」(江原由美子編『フェミニズム論争—70 年代から 90 年代へ』 頸草書房)

佐島群巳編

1992 『環境問題と環境教育』 国土社

庄司俊作

- 1994 「家族農業経営と女性—村落研究の課題を求めて—」(日本村落研究学会『【年報】村落社会研究 30 家族農業経営における女性の自立』農山漁村文化協会)

ジュディス・プラント

- 1995 松丸久美訳「新たな世界へ向けて」(小原秀雄監修・鬼頭秀一他解説『環境思想の系譜 3 環境思想の多様な展開』東海大学出版会)

スー・グレイグ、グラハム・パイク、デイヴィッド・セルビー

- 1998 阿部治監修『環境教育入門』明石書店

杉島敬志

- 2001 「ポストコロニアル転回以後の人類学的実践」(杉島敬志編『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後—』世界思想社)
- 2001 「人類学の設計主義」(杉島敬志編『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後—』世界思想社)

スチュアート・ヘンリ

- 1997 「先住民運動—その歴史、展開、現状と展望」(青木保他編『岩波講座文化人類学 6 卷紛争と運動』岩波書店)

スピヴァック

- 1998 上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房

村落社会研究会

- 1996 「年報村落社会研究第 32 集『自然の再生 21 世紀への視点』」
村落社会研究会編

高田明彦

- 2001 「環境 NPO と NPO 段階の市民運動—日本における環境運動の現在」
(長谷川公一編 講座 環境社会学『環境運動と政策のダイナミズム』有閣)

田中美佐子

- 1996 「フィールドワーク体験」(文化人類学調査実習報告書 11『沖縄都市近郊・南風原町兼城の文化と社会』国際基督教大学人類学研究室)

ダナ・ハラウェイ

- 2000 高橋さきの訳『猿と女とサイボーグ』青土社

Donna J. Haraway

- 1997 Modest_Witness@Second_Millennium. FemaleMan_Meets_OncoMouse, in
Great Britain by Rutledge

寺口端生

- 2001 「環境社会学のフィールドワーク」(飯島伸子他編 講座環境社会学第
1 巻『環境社会学の視点』) 精興社

戸田清

- 1994 『環境的公正を求めて—環境破壊の構造とエリート主義』新曜社

トリン・T・ミンハ

- 1996 小林富久子訳『月が赤く満ちる時—ジェンダー・表象・文化の政治学』
みすず書房

中道仁美

- 1995 「農村女性研究の展開と課題」(日本村落研究学会『【年報】村落社会
研究 31 家族農業経営における女性の自立』農山漁村文化協会)

沼田眞

- 1996 「生態学からみた環境教育」(伊東俊太郎編『環境倫理と環境教育』朝
倉書店)

日本村落研究学会編

- 1997 『年報村落社会研究 第三十三集 有機農業運動の展開と地域形成』
1996 『第三十二集 川・池・湖・海 自然の再生 21 世紀への視点』
1995 『第三十一集 家族農業経営における女性の自立』
1994 『第三十集家族農業経営の変革と継承』

波多野豪

- 2000 「有機農業運動におけるエコロジー認識とジェンダー問題」(富士谷あ
つ子、伊藤公雄監修、日本ジェンダー学会編『ジェンダー学を学ぶ人
のために』世界思想社)

森岡正信

- 1995 「エコロジーと女性」(鬼頭秀一編『環境思想の系譜 3 環境思想の多様
な展開』東海大学出版会)

ブライドッチ、チャルキエヴィッチ、ホイスラー、ワイリング

- 1999 壽福眞美監訳『グローバル・フェミニズム—女性・環境・持続可能な
開発』青木書店

細谷恒夫

1962 『教育の哲学—人間形成の基礎理論—』 創文社

松田素二

2001 「文化／人類学—文化解体を超えて—」（杉島敬志編『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後—』 世界思想社）

最上広域市町村圏事務組合編

2002 「平成 14 年度 国際交流センターの概要」

マリア・ミース

1997 奥田暁子訳『国際分業と女性』 日本経済評論社

ミシェル・フーコー

1986 渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』 新潮社

1972 中村雄二郎『言語表現の秩序』 河出書房

光岡浩二著

1996 『農村家族の結婚難と高齢者問題』 ミネルヴァ書房

ラマチャンドラ・ゲーハ

1995 「ラディカルなアメリカの環境主義と原生自然の保存—第三世界からの批判」（小原秀雄監修・鬼頭秀一他解説『環境思想の系譜 3 環境思想の多様な展開』 東海大学出版会）

レイチェル・カーソン

1975 青樹築一訳『沈黙の春』 新潮社

レナード・ロザルド

1998 『文化と真実——社会分析の再構築——』 日本エディタースクール出版部

和多武編

1999 『環境問題を学ぶ人のために』 世界思想社